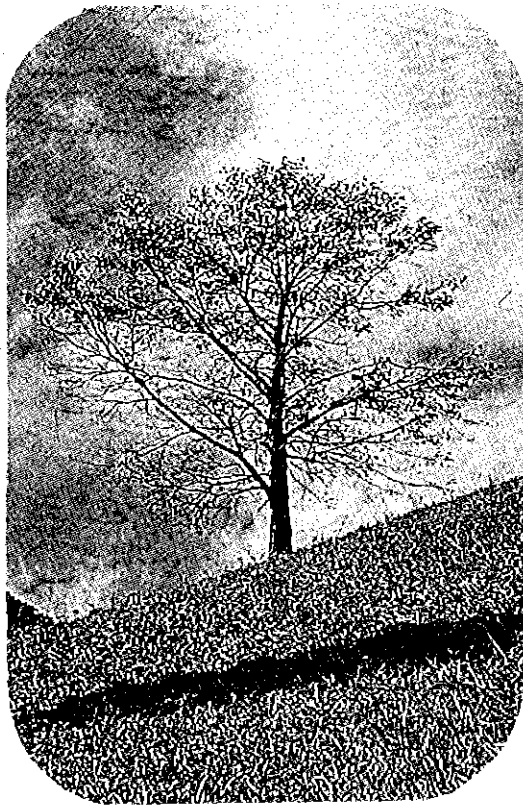
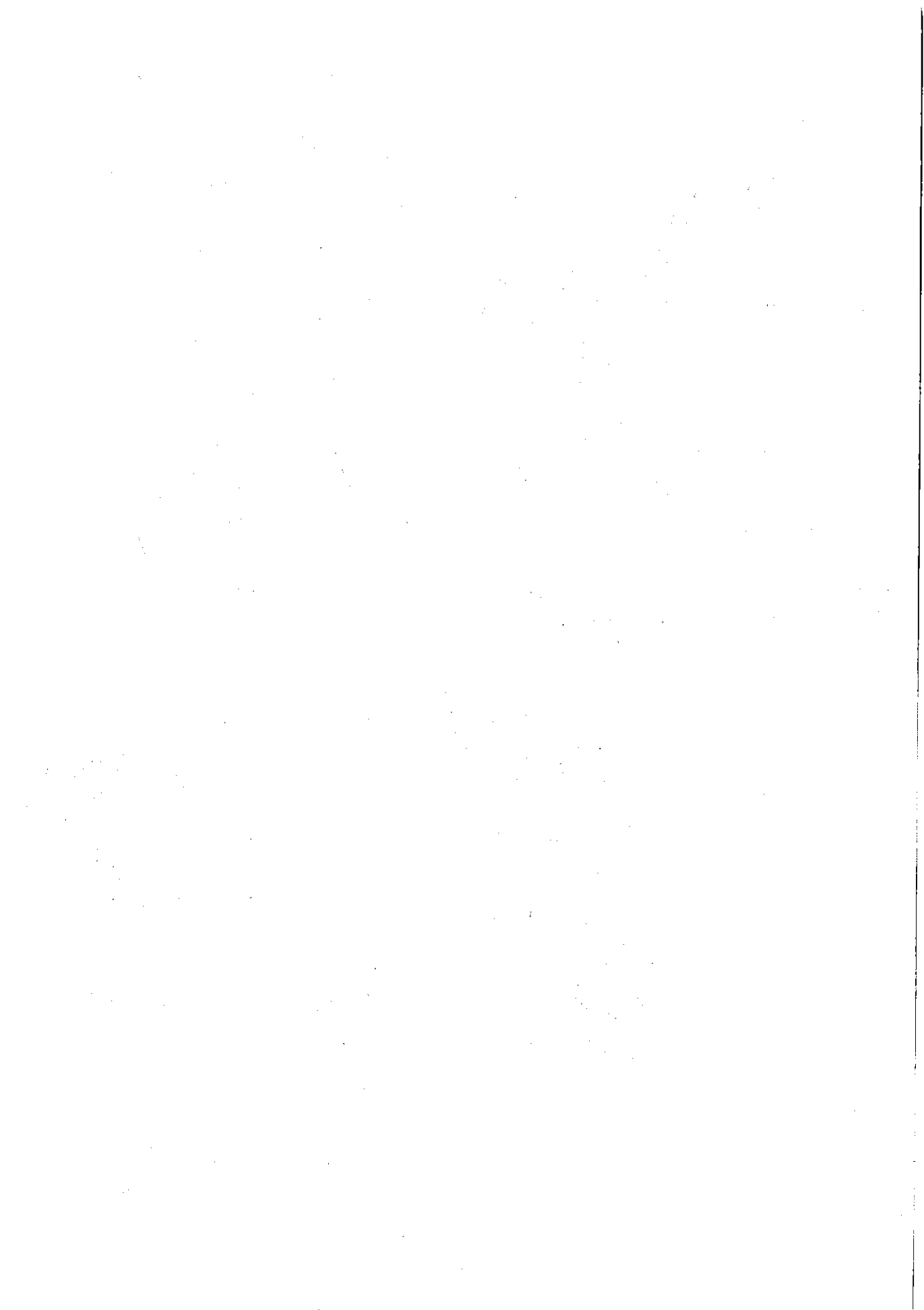


第二次世界大戰體驗記

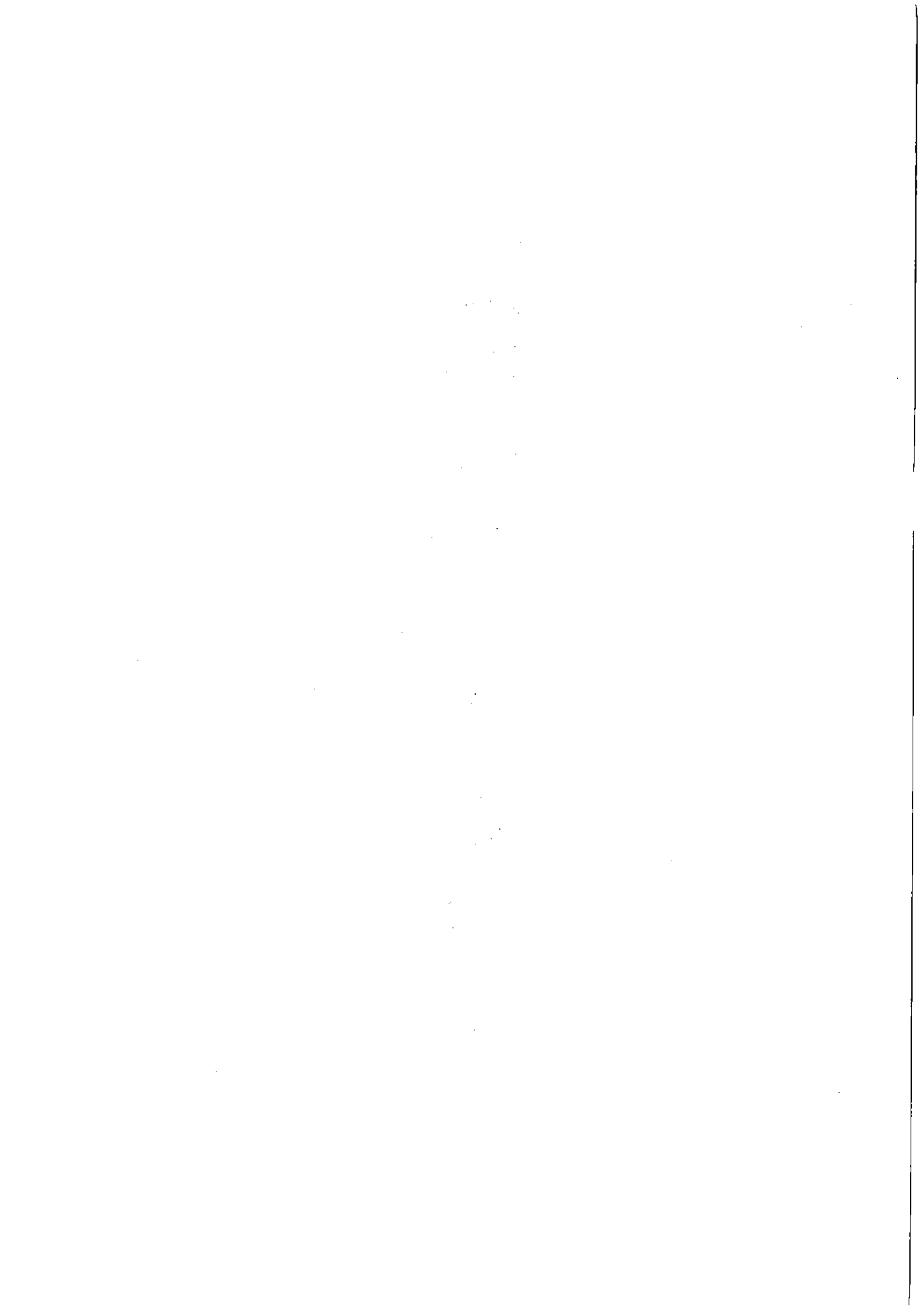
轍



加西市教育委員會



永遠の平和を求めて



# 発刊にあたって

加西市教育長 菅 野 和 彦

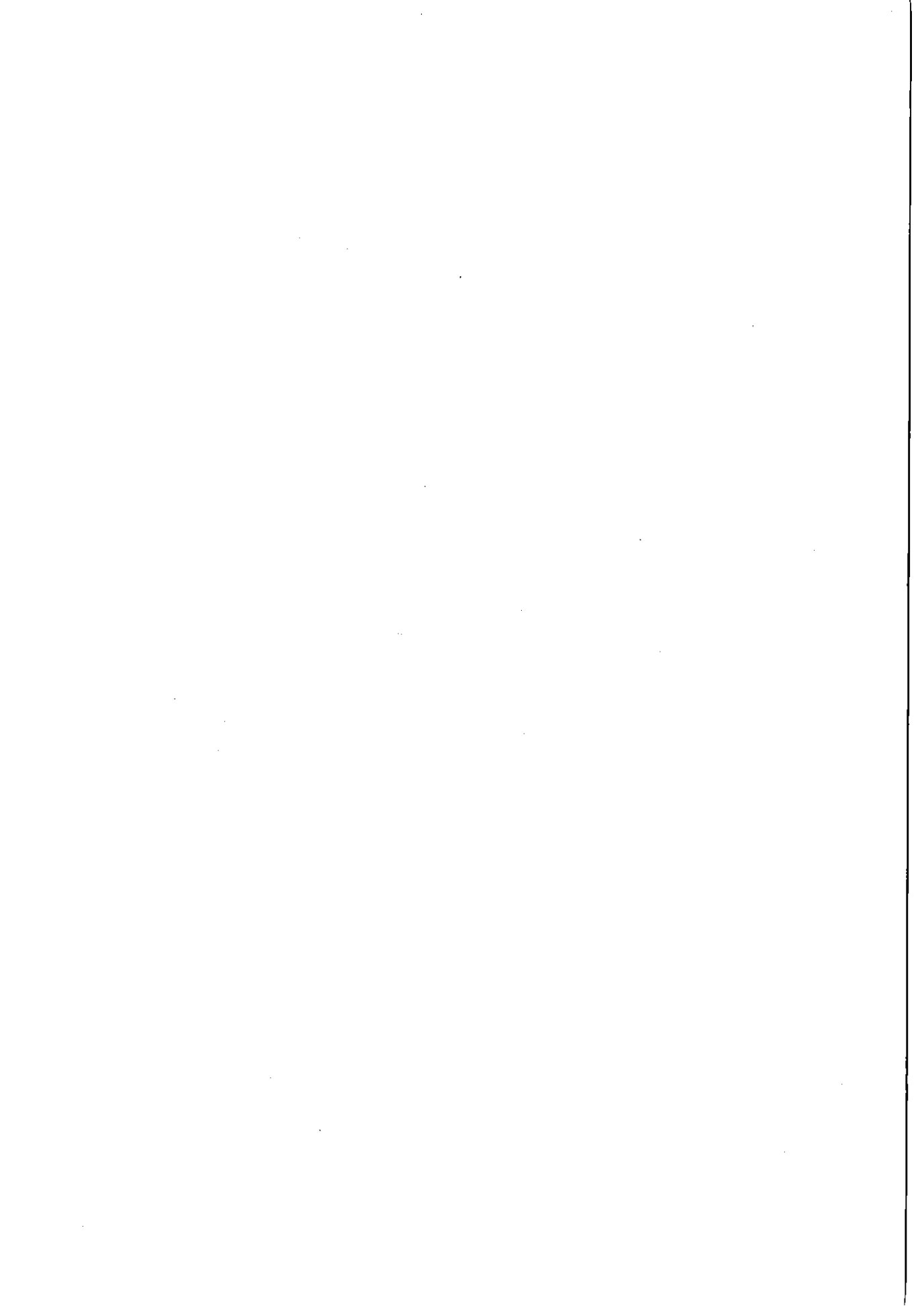
第二次世界大戦が終わって、既に四十七年の歳月が流れて、満州事変や日中戦争、そして第二次世界大戦を直接間接に体験された方々は、年々減少しております。

そこで、これらの大戦から戦後の体験を語り継ぐことによって、一人でも多くの人に戦争の悲惨さを知っていただき、人権尊重と永遠の平和を求め努力してほしいとの願いを込め、この体験記を編集しました。戦争のむごさ、平和の有り難さを後世に語り継ぐことは、現代に生きる者の使命であると考えます。

この度、加西市の高齢者大学の皆様を中心に呼びかけ、この趣旨に賛同いただいた方々から、貴重な体験記をお寄せいただきました。本の題名は、過去を振り返り、その反省を将来に生かし、「前車の轍を踏まず」との思いを込めて轍（わだち）としました。

戦争で大切な家族を失い、貴重な青春を奪われた方々の悲しみのなかに、戦争の本当の姿を感じとり、平和への誓いを新たにして下さることを心から念願しております。

平成五年三月二十五日



# 目次

発刊にあたって

一、姫路海軍航空隊（鶴野飛行場）	鶴野南町	西村幸子	1
二、兄の出征と銃後の守り	両月町	高見敏子	5
三、戦中記（夫の召集と銃後）	山枝町	山田よし子	7
四、空襲の思い出（姫路・新日鉄広畑）	北条町古坂	高井とくゑ	10
五、挺身隊（須鎗航空）	西横田町	古角恵美子	13
六、銃後の守り（夫の召集と兄の戦死）	山枝町	仲井ふみ子	16
七、銃後の守り（農業）	畑町	藤田みつ子	19
八、死ななかつた戦地の思い出	西横田町	古角俊治	20
九、命運	青野町	岡田一雄	22
十、軍隊生活	畑町	高橋賢次	27
十一、日・中戦争記	青野町	岡田正治	30
十二、私の空襲体験	満久町	内藤君子	37
十三、大東亜戦争回顧	国正町	民輪進治	41
十四、報国隊生活（日本毛織会社）	栄町	西村はつ子	44

十五、	阪神大空襲など	.....	田原町	小岩	つる子	.....	46
十六、	第二次世界大戦(終戦直前六カ月)の体験	.....	上宮木町	柿本	高次	.....	48
十七、	私の引揚げ回顧	.....	鴨谷町	定行	記一	.....	52
十八、	日・中戦争	.....	和泉町	伊藤	為市	.....	57
十九、	私の学生生活	.....	鶴野上町	増家	トキコ	.....	61
二十、	飢餓と闘った十万人のレムパン島(恋飯島)	.....	北条町栗田	中島	主一	.....	63
二十一、	私の女学生時代	.....	北条町本町	志方	美津	.....	71
二十二、	銃後の守り	.....	上宮木町	池澤	ふみ子	.....	74
二十三、	徴用工生活	.....	網引町	古川	卓美	.....	76
二十四、	家庭の一断面	.....	北条町横尾	内藤	とし子	.....	81
二十五、	徴用工生活	.....	東剣坂町	中本	光雄	.....	84
二十六、	明石での体験	.....	鴨谷町	岡本	豊子	.....	87
二十七、	支那での思い出	.....	殿原町	村岡	敏子	.....	90
二十八、	私の徴用工生活	.....	窪田町	山下	敏郎	.....	94
二十九、	私の戦争	.....	畑町	嵐倉	富美子	.....	97
三十、	青春の思い出	.....	小印南町	長浜	明子	.....	100
三十一、	私の軍隊生活	.....	桑原田町	菅野	重雄	.....	104
三十二、	白紙(しろがみ)の召集・徴用	.....	北条町栗田	中島	主一	.....	108



三十三、出征と野戦病院開設	青野方原町	浅田	彰
三十四、私の八月十五日前後	別府東町	西村	三郎
三十五、私の八月十五日(撫順高女校長時代)以後	山下東町	名尾	嘉作
三十六、学童集団疎開	北条町横尾	水田	益弘
三十七、戦争と食生活	東劍坂町	藤川	伊佐雄

年 表

あとがき



一、姫路海軍航空隊（鶉野飛行場）

鶉野南町 西村 幸子

第二次世界大戦の末期、今の鶉野中町に飛行場が建設され、姫路海軍航空隊と命名されました。こんな山の中に海軍とは……と不思議でした。建設に当たっては、毎日多くの人が勤労奉仕に出動しました。父は戸主会から母は婦人会、私は女子青年からと、定められた日になると例え田畑が多忙でも草一杯で困っていても出動しないと非国民呼ばわりされました。当時はブルドーザーもダンプもなく、石や土をスコップですくってはトロッコに乗せて運んだり、モッコで運びました。

多くの人の奉仕と犠牲によって出来た飛行場は、滑走路が真中を南北に走り、兵舎やら燃料庫が次々と建てられて、毎日兵隊が飛行の練習をしています。当時私の住所は北田原でしたので、鶉野に隣接しており、飛行機の練習はよく見えました。機は大体滑走路を北から南に飛び立ち、法華口の駅あたりから進路を左に、田原を経て網引あたりから左折北上、<sup>②</sup>九会小学校を過ぎた頃に、着陸体制に入っておりました。時には下手な人がいるのか、機の調子が良くないのか、ヨタヨタして今にも墜落しそうでハラハラさせられました。

あれは昭和十九年頃の或る日、ドカン！と大音響がして、ヒューンと列車の笛が異状を知らせます。間もなく道路を、人が大勢走って行きます。聞けば飛行機が墜落して、運行していた北条線の列車を引っ掛けたとの事、私もついて走って行きますと、網引駅の西で貨物列車が（当時は貨物列車は石炭

① 各町に毎日割当てがありボランテイアで重労働に参加。

② 現在の亀岡産業のところにあった。

を焚いて客車も連結していました)くねくねと線路から田圃へかけて横たわり、飛行機もペタンと落ちています。今なら救急車やら報道陣で大騒ぎですが、当時は皆、黙然と眺めているのみでした。軍隊が一般市民を、側へ寄せ付けません。私が噂に聞いたのは、兵隊が死んだ事だけでした。乗客にも負傷者が出たろうに、ひよっとすると死亡者があつたかも知れないのに新聞やラジオは一切ノーマントでした。

日毎に戦争はますます苛烈になり、日本は連日敵機の空襲を受けました。

遂に我が家でも防空壕が掘られ、警戒警報のサイレンが鳴ると、私は大きな風呂敷包みを壕へ避難させます。包みの中には衣類とか食料品が入っていました。当時父は村会議員とか区長をしていましたので、村の大事な書類を預かっていました。常々父に「わしが留守の時は、一番にこの本箱を避難させてくれ。大事な書類だから、万一の時は本箱ごと縁から庭へ倒すように。丈夫な本箱はびくともせんから頼むぞ。」と言ひ聞かされていました。本箱は縁側を入った部屋に置いてあり、娘の私でも力一杯押すと転がります。私は何回も倒す稽古をしました。

ある日、不意に警戒警報なしに空襲警報のサイレンが鳴り響きました。早くもゴーンと、聞き慣れない爆音がします。その日、父は九会小学校の移転の事で会議に、母は国防婦人会で留守でした。異常を察した私は、急いで荷物を壕に入れ、引き返そうとして立ちすくみました。見慣れぬ大きな機が、飛んでいるではありませんか。それは話に聞いている、アメリカの爆撃機B二九です。爆弾投下され

③ 当時、朗報は報道されましたが、国民の士気にマイナスとなることは、報道がゆるされなかった。

④ 敵機が攻撃してくると身を守るため、地下に穴を掘り、かくれる一時的な避難所。

⑤ 敵機が襲来するので、避難する準備をしないといふ場合。

⑥ 敵機が襲来したので、避難しないといふ場合。

⑦ 現在の婦人会。当時は中年・青年の大部分が兵隊として出兵し、残された婦人が国を守るといふことで、日々活躍した。

⑧ 大型飛行機。大きな爆弾

たらどうしよう……。私は部屋に飛び込んで、本箱を持って身構えました。でも恐しい物見たさにそっと覗くと、それは敵ながら何ともいい恰好です。両翼をぴんと張って、ものすごく大きな図体です。ゴーンと腹にこたえる爆音を残して西の方、姫路方面へと去りました。ほっとすると間もなく、今度は小型機が編隊を組んで現れました。P五一<sup>⑨</sup>です。近くへ来たと思うと、ぐーんと急降下して、バリバリと機銃掃射をしてきました。その時、私は操縦士の姿が見えたような気がしました。後で人づてに聞いた話では、ある人は操縦士の顔を見たそうです。笑っていたそうです。

編隊は次々と攻撃して来ましたが、どれも航空隊を目標にしており、私も本箱も幸い無事でした。もうあんな事はこりごりです。最近湾岸戦争のテレビを見ました。爆弾投下の編隊やら急降下爆撃等、身を切るように痛く感じました。

悪夢の様な体験をしてから約五十年、私は今でも時々当時の夢を見ます。あの痛ましい列車と飛行機の事故、煙をはいて泣く様な汽笛、B二九のゴーンと、P五一のバリバリと機銃の音に、うなされてハッと目覚めます。

これは戦争の後遺症です。もう決して戦争をしてはいけません。戦争で家を失い、肉親を無くした人は数多くいます。私も一人の兄が、数え二十二の若さで戦死しました。一体兄は何の為に短い生を、この世に受けて来たのでしょうか。憐れでなりません。私の孫が間もなく成人します。この子の時代も軍隊などない様に、戦争など知らずに、平和な明るい世の中で、伸び伸びと生活してほしい。世界が

を百発以上も登載した当時最大の飛行機。

⑨ 小型で機銃を搭載し、低空飛行して路上にいる住民を射つ。

永遠に仲良く平和で有ります様に、いつも念願しております。



国防婦人会の慰問袋づくり

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載



食料増産（女性と子供と老人）

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

## 二、兄の出征と銃後の守り

両月町 高見敏子

暗雲たなびく盧溝橋<sup>①</sup>の銃声一発、すぐる日の日支事変に端を発して、第二次世界大戦となりました。戦後は遠くなり、苦しかった戦争は風化され、忘却され、戦争を知らない世代が大半を占めるようになりました。若くして最愛の夫を、頼りにしていた息子、兄、弟を奪われた遺族にとりましては、過ぎ去った歳月は、はかり知れない重みをもった時の流れであり、その思いは肉親にとりましては、何時までも色あせることはないでしょう。

「勝つて来るぞと勇ましく。」再度のお召しを受けまして、ビルマの国へと出征しました兄。私はその妹として銃後の一員となり老いた両親を励ましつつ、あしたに星をいただき、夕べに月を眺め戦地の兄を偲んで、田畑での増産に精出していました。だが、戦況は日一日と深刻になり、本土空襲が激しく、戦地からの音信は不通となりました。前途を案じ手間不足の過労がたたって、父はわずか半カ月の患いにて不帰の客となりました。残されました母と娘は男手なき生活、自給自足の農業に従事しなければならず、女ながらも牛耕を習って田畑を耕し、増産に励んでいました矢先に、兄の戦死の悲報を受けました。その時の歎きは筆舌に尽されません。息子の死も知らず、父の死も知らずに、年忌法要は親子一緒でございます。

平成六年は五十回忌を営みます。青春のすべてを投げうってきました私は、現今は幸せでございま

① 現在の中華人民共和国の地名。北京の南

す。人は一生を通して山あり谷ありです。戦後の農地改革、旧札、新札のお金の切り替え、配給制度等、苦難の道を進んで来ました私達は、どんな事にも打ち勝つ忍耐を培いました。

平和な国となり、自由自在の生活が出来る現在が、勿体ない気持ちでございます。戦争を知らない世代の皆様達、勝利の日を信じ、気候不順な異国の地で散華しました幾多の兵士を忘れないで下さい。誰も好んで戦地へ向かっていません。兵士達の心境をどうぞや、お汲み取り下さいませ。私の歩んできた道を拙い文に綴り、お目を汚しますことお赦しを乞う。

流れ行く月日は早くすぎゆきて

遺族佗しく老いてゆくなり



学徒勤労働員による奉仕

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

② 昭和二十年の終戦後、地主、小作をなくするため、農地を農家に平均化した改革。

③ 旧札を新しい札に切り換えること。

④ 衣・食について政府が決めた分量を住民に配給すること。農家も生産したものは、全部、政府に供出し、配給された。



三 戦 中 記 (夫の召集と銃後)

山枝町 山 田 よし子

昭和十九年十月二十七日、最後の召集令状が来たのは、長男が生まれる二十日前の事でした。私は臨月のお腹を抱えて青野ガ原へ送って行きました。が、今振り返って見ますと、さぞかし見苦しい姿だった事と、恥ずかしく思いますが、その時は全く夢中でした。

① 赤紙にすべてを捨てて出で行くは

神にも勝る姿とぞ想う

主人は必死で「万一わしが戦死しても、この子は亡き父親の事を省みてくれる子になってほしい」と親、三郎の三を取って省三と名前を考えて行きました。丁度家を出てから二十日目に、無事男の子を安産致しました。結婚五年目の初産とあって、大勢の人から大変喜んでいただいた上、写真を送りましたところ「こんな嬉しい事はない。よく気をつけて大きくしておいてくれ」との便りは、中支派②遣軍漢口から来たものでした。

主人はお国に捧げ、銃後は年老いた両親と、義妹と、私と、力のないものばかりで一町歩の百姓をするのですから、収穫は少ないのは勿論、農繁期には泣きたい様な事ばかりで、とても苦しい生活でした。でも私は「兵隊さんの事を思えば弾がとんで来る心配はないんだから」と励まし合って、子育てに夢中になって暮らしている間に、省三が満二才になり、終戦を迎えました。何の便りもなく暑い

① (淡紅色の紙を使ったことから) 召集令状の俗称。

② 中央支那へ派遣され、地名は漢口。(揚子江の上流)

暑い日に主人は、まるで黒人のような顔をして、やせ衰えた体に大きなリュックサックに衛生兵の持物<sup>③</sup>を一杯背負って帰って来ました。そして、私がおんぶしている子の足を握って「これがわしの子か」と言いますと省三は、火がついたように泣きました。それでも不思議なものです。すぐ慣れて「お父さん、お父さん」と楽しい日が来しました。

### 夢に見た、いとし父子の初対面

#### 泣き笑いした永遠の感激

でも、主人の体は正常ではなく「わしは食べるものも食べず、道に溜まっている泥水を、度々飲んだから寿命が短いぞ」と言った時には胸がドキッとしました。でも家に帰って来られた嬉しさに、毎日が夢のように過ぎて行きました。「戦争に負けたら、アメリカ人が来て乱暴をする」とか言って、大変心配していました。が、そんな事もなく、時と共に平和だった元の生活に戻って行ったのは、本当に有り難い事でした。一年経ってもう一人、女の子にも恵まれ、どうにか幸せな生活が十年余り続いた或る日、主人は物凄い腹痛を起こし、即入院、手術との事で九カ月の入院の後、空しく世を去りました。

四十六才の若さで人生を終わるには、どんなにか悔しい思いだったかと、三十年経った今も、ついこの間の事のように思い出され、戦争が恨まれてなりません。今後、何としても戦争だけはイヤです。未来の果の果までも、永遠の平和を祈り続ける者でございます。

③ 病氣負傷の治療、手当をする兵隊。

復員の姿



「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

復員して家族と喜びの再会



「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

#### 四、空襲の思い出（姫路・新日鉄広畑）

北条町古坂 高井 とくゑ

当時、主人は姫路市広畑の現在の新日鉄に勤めておりましたので、その社宅に住んでおりました。訓練、警戒警報、それが終わると空襲警報と毎日一度は隣保毎に訓練をして来ました。世間ではそんな事ばかり。敵の飛行機が来た時の訓練です。上司の方からも厳しく言われておりました。色々な訓練もやって来ました。家にいる時でも警戒警報でも鳴ると、主人は即座に会社に行かねばなりません。私達は空襲警報になると防空壕に入ります。無事済めば又、出ると言うような繰り返し、いつも重苦しい何とも言えない日々が続きました。「いつかひどい事になりはしないか」と、毎日不安な気持ちでいました。それも会社の社宅だっただけに。

ついに、そんな日が近い所に来たのです。あの日B二十九爆撃機が姫路飾磨にやって来たのです。そして、ひどい事になったのです。あの日の事は、今でも忘れる事が出来ません。怖いのは通り越してしまいました。空襲警報が鳴りひびき、防空壕に二人の子供を連れて入りました。下の子供はまだ赤子でしたので泣きますし、必死で長い間、体を固くして耐えていました。中にいても真っ赤になり、「ドカン、ドカン」とすさまじい音、言葉では言いあらわせません。私もあの時は生きた心地がしませんでした。「もう駄目ではないか」と思ったのです。すると、誰かの声がしました。「まだまだ出られない、出てはいけない」と。その時、女の人の泣き声が聞こえます。私は涙どころではありませ

ん。必死でした。それは、それは長い時間耐えぬきました。音も少しやわらぎ、防空壕を出る事が出来ました。外に出ると、まだ辺り一面は真っ赤で、煙が立ちこめていました。私達はお陰で無事どうもなく済みましたが、直接受けた所は「ひどい事になっているだろう」、「死者も出ただろう」と気の毒でなりませんでした。思ったとおり、姫路城だけを残し、全部焼け野原となっていたのです。何ともお気の毒で言葉ありません。

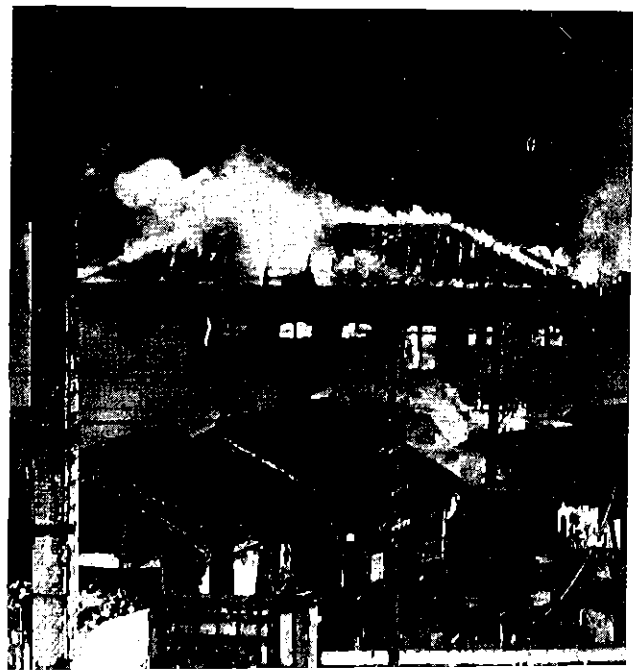
① 又、艦載機がくると、ふとんをかぶり逃げ回った日もありました。ふとんも、赤とか白とかはいけないと、上司から言われ、色の目立たない物をかぶりしました。又食品の事ですが、皆さんもご存じでしょうがひどい物でした。でもその時はどんな物でも、満腹感が味わえさえすれば充分でした。今ご馳走を頂くより、あの時の味はほんとうに忘れられません。食べる物があれば満足でした。でも今だったら、誰も食べてはくれないでしょう。口ほど変わる物はないと、今ではつくづくそう思われます。昭和二十年八月十五日終戦になりましたが、一時は悲しさと悔しさも有りましたが、又残念にも思いました。「もうこれであんな日々を送らなくても」、とも思いました。でも、「やれやれ」となにか思う事が出来ません。これから私達はどうなるのだろう。又「みじめな事になりはしないか」と考えたり、とても案じていましたが、お陰で今では暮らし良くなり有難いことです。

これも国民ひとり一人が耐え忍んで下さった努力の結果だと思えます。ほんとうに有難うございました。子供を片付けるまでは色々有りましたが、今では昔を思う時、勿体ないと毎日感謝しつつ暮ら

① 軍艦に載せて運んでくる飛行機で艦上から離着陸する。

す今日この頃です。もう戦争は二度と起こらないように祈りたいです。

「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載



空襲で燃える街



焼野原と化した街

「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

## 五 挺身隊（須鎗航空）

西横田町 古角 惠美子

今の国民は幸せです。昔の事を思えば食べる物、着る物、日常生活一切に恵まれ、何不自由なく暮らせる毎日はほんとうに幸せですね。

私達の青春時代は、戦争のまったただ中で、食糧もなく芋のつるとか野草など、食べられる物は何でも口の中に入れなければ生きていけない時代でした。その時代、特に昭和十九年頃の古い記憶を思い出して書いてみました。

十九年五月、挺身隊<sup>①</sup>として徴用をうけ、今のマリア病院、昔の須鎗航空に入社致しました。工場内では爆弾の製造をしておりました。

「進め一億火の玉だ、お国のためだ、頑張ろう」の歌い文句の通りに。でも「こんな爆弾を作ったどこで使われるのかな」とか「見命中するかしら」など色々考えながら、作っておりました。大きさは一屯から小さい小型爆弾まで、火薬を入れる前の外の部分を、毎日毎日一生懸命作っておりました。

二十年何月頃かは忘れましたが、空襲警報と同時に、私達工場従業員全員は、西の山に避難致しました。しばらくすると、東の空より艦載機が飛来し、ちょうど播但線の汽車が仁豊野駅を出て行った所で、その汽車めがけて飛行機が急降下し、機銃掃射をしたのです。それを目のあたりに見た私達は、

① 学生、生徒が国の命で軍需工場など戦争に関連する仕事につくこと。

② 飛行機上から機関銃で地上の物体を乱射すること。

恐ろしく生きた心地はしませんでした。ようやく警報も解除になり、再び工場で作業を致しました。

又、姫路が空襲を受けた時は、夜でした。はっきりした日は忘れましたが、警報が鳴ると同時に敵機B二十九、数十機、いや数百機かな、が飛んで来て焼い弾を落としました。③私達は少し離れた所に住んでいましたので、防空ずきんをかぶり座布団などを頭にのせ、山へ逃げて行く途中でした。それはそれは、ものすごいものでした。焼い弾がバラバラと落ちたと思うと、姫路の町全体が火の海と変わり、それはとても口では言えないすごさでした。遠くで見ていると、今の打ち上げ花火の何十倍、何百倍のすごさでした。

米は配給で、私達は田舎ですので、食べる事は、麦ご飯の弁当を持って行って食べておりました。が、町から来る人は、お昼は高梁や団栗で作った給食のおにぎり一個を食べており、私達田舎から来る人のあまった分をもらって食べて、残ると家に持って帰っておられました。

私はある日、お昼の弁当を食べようと思ったら、盗まれてなくなっておりました。それは寮生活をしている生徒が防空壕で食べていて、弁当箱の空だけが壕の中に残っていました。私は大切な弁当箱がそこに置いてあったので、ひと安心いたしました。当時は物が不自由でしたので――。

今では考えられない事でしょうね。

そして、まもなく終戦となりました。

しばらくして姫路へ行くと、京口周辺の町で、もと、川西航空のあった所など、一面焼け野原で鉄

③ 高熱を出して燃える薬剤を入れた爆弾(砲弾)

④ こうりゃん。中国にできるもろこしで家畜のえさにしていたもの。

⑤ どんぐり。かしゃ、ならの実。



骨や瓦礫の山でした。思い出しても身震いが致します。今ではその様な面影などは想像も出来ません。

私達老人、いや国民は今本当に幸せです。こんな時代が来るなんて、その時は思ってもみませんでした。本当に有難いことです。これから一日一日を楽しく暮らせる様、健康に留意し、感謝の気持ちを忘れず余生を送りたいと思います。

今、小学校百周年の記事を新聞で見えましたら、九会小学校に襲撃の弾跡が残っていたとか、あの時の機銃掃射の跡だと思いました。

今は遠い思い出となり、私達の胸より永遠に消えない思い出の一ページとなって残っております。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

軍需工場での挺身隊

## 六、銃後の守り（夫の召集と兄の戦死）

山枝町 仲井 ふみ子

昭和十八年二月十一日、この日、私達は数え年二十二歳と二十歳で建国記念日と同じ日に結婚式。

三日目に実家への花帰りをすませ、翌日には、軍需工場で多忙な神戸川崎造船所の小住宅のアパートへ帰ってきました。その頃は前の年、十二月八日太平洋戦争に突入していましたので、甘い新婚生活も田舎からきた私には、食料品の切符制度で勝手がわからず、毎日が大変で、隣の小母さんにお店へ連れていってもらっていました。同級生の友が尋ねてくれて、その頃は貴重な玉子や色々の物品をもってきては料理をして楽しくすごしました。友達には今でも感謝しています。

そうできたのもわずかな月日で、近くのデパートへいってもアツツ島玉砕のニュース写真が掲げられ、毎日国民服にゲートル姿で出勤する夫を送り出し、私は仕立物と長い袖が廃止されたので短く仕立てる毎日でした。防空演習で勇ましく活躍し、それは農村とは大分違った光景でした。

そうしているうちに赤紙召集令状がきたのです。私の兄は丈夫な身体でしたが、線の細い身体の方が心配でした。すでに私達は結婚後一カ月たらずで、南方へ行っていた兄が戦死して、遺骨が帰ってきました。遺骨箱の中には、巻手紙と石が入っているだけです。遺骨を乗せた船は潜水艦に沈められ、せめてもと、その島の石が入っていたのです。

田舎に帰り大歳神社から、知人や村人に送られて夫は、出征していきました。年の若かったせいか、

① 結婚式、三日後に実家に夫とともに帰ること。現在は「里帰り」という。

② 食糧や衣料は切符があつて、その分だけしか買えない制度。

③ アリュウシャン列島の西南端。千島列島に近い島。

④ 国防色の同じ形の服。

⑤ 膝から足首までの間を仕事でし易いように十cm巾の布を巻くこと。

⑥ 軍隊に行くようにと通知がくること。

割合気楽に私も銃後の花嫁だなんて……考えさせられました。その時は、妊娠していたので小住宅をでて、御蔵通りの方へ引越した五日目の召集でした。出征を見送った私は、一人神戸に帰り、当時の文化住宅を一階は近所の人に貸して、二階で生活し、岡山に入隊した夫の便りを待つ日々でした。突然姑さんの来訪で「引上げて帰るように」といわれた矢先に電報が入り「イエハソノママ、カエリマテ」天の助けの思い。姑さんは「仕様がなない。」と帰られました。その頃は私の両親も健在だったから、実家でお産をすることになり、北条へ帰ってきました。

五月二十五日の予定日が過ぎた夜九時頃に、ひょっこり夫が除隊となり帰ってきたのです。嬉しくて胸がしめつけられ涙一杯……でした。三カ月召集だったのです。神戸へ帰りたい一心から、皆が止めましたのに身重の体で無茶したものです。又、元通り会社へ勤め、六月十五日男子を出産し、平和な暮らしとはいえ燈火管制で黒いカーテンで家も外も暗くなっていました。すぐ召集がきて、こんどは姫路師団に入隊、子供の顔を見て幸福を感じた二人もつかの間、首もすわらぬ幼子をタオルでささえ、山陽電車に乗り救急袋とオシメ袋をかけて、毎日面会に出会える時間を待っていました。赤ちゃんを抱いて可愛ゆくてしようがない夫の姿……六日目には、とうとう会えず「昨夜半、兵隊はでいたらしい」ということ、涙せぬ無情の時代。空襲警報で街は暗くなり、幼子と共に寝床に入っても、モンペのままですぐ飛出させるよう救急袋とオシメ袋を身近に置いていました。

十月中旬、幼子と馴れない田舎に帰ってきました。取り入れの手伝いと気のつかい過ぎで母乳が少

⑦ 夜、室内で電燈をつけるのに規制があること。

なくなり、幼子は泣いてばかりで困ってしまい、実家の方で世話になりました。夫から年明けて一枚のハガキが届き、沖繩にいたことがわかりました。ただ「元気」と「写真がほしい」とのこと、さっそく坊やを抱いた写真を送りましたが、それきり音信不通。四月に入ると沖繩戦で艦砲射撃の報道。節句祭の日から子供はハシカ。肺炎を患い生死をさまよいました。医者も少なく、産婦人科の先生の診察をうけて救われました。長い病床で、すっかり赤ちゃんになってしまいました。

あとでわかったことですが、主人は田植えの手伝いの六月二十日には戦死していたのです。紙上やニュースで、玉碎の報道は知らされてはいましたが、「きつと何処かにいる」、「島の人達と一緒にかもしれない」勝手なことを考えて、生きている望みをつないでいました。八月十五日の終戦後は内地から外地からと、次々帰ってこられたことを耳にするにつれ、夜半、外の足音にきき耳を立てている自分にハッとしました。神戸の引揚者の名簿を知らべてもらっても、ただ、生死不明の通知だけで、二年は過ぎた十一月末に戦死の公報が入り、お葬式をしました。

幼子が草履にアトカケのひもをかけてもらって、何も知らずに位ハイを持って送る姿を見て、決心しました。「この子を成人させるまでは」と固く心に誓い、戦争で何もかも破壊した上での、これらの人生を歩んでいく私でした。

⑧ 軍艦から陸地にむけて砲弾を打つこと。

## 七 銃後の守り（農業）

畑 町 藤 田 みつ子

若い男の子は皆、戦地へ行っていますし、銃後<sup>①</sup>は女や年寄りばかりです。

農家の私の第一に印象に残っております事は、食料不足で困った事です。たくさん収穫致しましても、ほとんど供出<sup>②</sup>してしまって少し配給を貰います。米はキビ混じり、大豆、それで薄いお粥ばかりです。食べますのが足りませんので、山を開墾致しまして甘藷を作って代用食にしています。お腹がすいているのに、肉体労働であんなに疲れた事は忘れられません。砂糖は、少しもなく、お餅を作りましたも、塩で食べました。いりこだしもなく、野菜や何を炊きましてもおいしくありません。芋の蔓も食べました。共同で田を耕して、馬鈴薯を作る支度をしていました。すると、艦載機が澤山低く飛んで来て、どうして、かくれた事でしょう。命から逃げたのです。夜になって空襲警報が鳴りますと、燈火管制で電気を黒の覆いで真っ暗にするのです。昭和二十年八月六日に突如、広島に原子爆弾が投下され、尊い人命を亡くし、悲惨な事でした。続きまして、九日には長崎が爆撃されたのです。それで、八月十五日午後一時に重要放送があるから、全員「ラジオを聞いて下さい」という回覧が回りまして、天皇陛下、自ら終戦を御報告されたのです。もうこれからは、永遠に平和で過ごせませう様に念願致す次第でございます。

① 戦場に行かない一般国民のようすや内地のこと。

② 国から米や麦を「いくら出荷しなさい」と命ぜられて出すこと。

## 八、死ななかつた戦地の思い出

西横田町 古 角 俊 治

昭和五年、私は徴兵検査を受けました。<sup>①</sup>

指一本の傷で乙種補充兵に成った。

「体が大きいのに村の人には恥ずかしい」と思ったが、「戦争には行かなくてもすむ」とも思いました。

昭和十九年三月、戦争がいよいよ深刻になり、私にも召集令状が来た。九十日召集である。朝鮮で訓練が終わったが、又、前線へ出発することになった。

ここは南京<sup>③</sup>、元の缶詰工場である。この一階で部隊は休憩をしていた。突然、ゴトン、ゴトン何階か天井を打ち抜いて一階の天井に穴をあけ、頭を見せたが落ちてこなかった。爆弾だ。みんな外に出たところへ、また舞い戻って来たのか、飛行機の音がする。空からピカピカ、何か落ちて来る。空襲だ。物凄い音と煙の中を、土と石ころが、浴びるように飛んで来た。この時、初めて空襲の恐ろしさを体験した。「これではどうてい生きて日本には帰れない」と思った。

今度は漢口<sup>④</sup>へ移動した。

ある日、ハエ取りもした。又ドラム缶を探し出し、クリークの水を汲み、何かをこわして、湯を沸かし入浴もした。シャツを振れば、シラミの落ちることもある。<sup>⑤</sup>

① 軍人になれるかどうかの検査。二十歳になると国民全員が受けた。

② 検査の結果、甲種・乙種丙種等にわけられ、乙種は補充するための予備兵と考えられた。甲種は全員軍人となって入隊した。

③ 揚子江の下流の都市。

④ 揚子江の中央部の都市

⑤ 溝、中国の溝は巾が四五米もある。

夜、寝床が温もった頃、空襲警報だ。またか、もう慣れていいる。毛布を抱えて防空壕にはいる。直撃さえ受けなければ死なない。死ぬもんか、戦友よ。故郷に親を残し妻子を残してここまで、何をしに来たのだ。国の為か、わからない。

二十年二月武生の病院に行った。

何日もわからなかった。流行性脳脊髄膜炎である。時たまに軍医が来て、脊髄に針を差し込む。痛い、まだ生きている。現住所、階級、名前など言わされた。

その時、看護婦さんが、

「私は神崎郡です。」と言ってくれた。なつかしい隣村の人であったのに、私は目をあけて見ることが出来なかった。きっとやさしい人であったらうに。わたしは死ななかった。

そして、退院、終戦の日を迎えた。

それから、四十六年、やっと落ちついたが、私はまだまだ仕事一杯ある。

「八十路越し、畑よ、田んぼよ、健康よ、

空に大地に明るさ、いっぱい。」

# 九命運

青野町 岡田 一雄

かつて、太平洋戦争に召集され、九死に一生を得て復員した老兵として、生死の岐路に立たされた恐怖の一瞬を、自らの体験に基き、戦争は如何に悲惨なものであるかの一端を紹介し、平和の尊さを強調したい。

その一、サイパン島への初出航。

私は、昭和十九年一月五日、海軍第一補充兵として召集され、呉海兵団に入団一週間後に輸送船の警戒を主任務とする横須賀海軍警備隊付を命ぜられる。新兵教育を受ける傍ら、海軍機雷学校で約一カ月間、当時機密兵器とされた三式水中聴音機の講習を受け、電測兵として、輸送船山珠丸に乗船勤務を命ぜられ、五月十三日南方戦線へ出動する。陸上勤務の守備隊員約千名と、武器弾薬を満載して十五隻の船団を組み、サイパン島に向かって横須賀を出航したのが、初の輸送任務だった。

八日間を要して無事サイパン島に入港、約一週間をかけて兵員と物資を陸揚げして待機中に、かつての、ハワイ奇襲作戦で有名を馳せた南方方面指令長官 南雲忠一中将が、聴音機の視察に来られ、私は中将に直接説明申し上げたが、その感激は今も忘れられない。それから約一週間後の深夜「敵機動部隊接近中、直ちに内地に帰港せよ」との命令が下り、急ぎサイパン島を出航、横須賀に無事帰港したのであるが、恐らく当時南方方面から帰港した船としては、私達が最後であったように思う。次

① 小笠原諸島内の南部に位置する島。

② 軍隊の不足を満たす兵隊。

③ 広島県呉市にある海軍の兵団

④ 船舶警戒隊本部

⑤ 海軍の各種秘密兵器学校

⑥ 軍の秘密で関係者以外には知らされない兵器

⑦ 水中音波をキャッチし、潜水艦の存在、位置を確認する機械



の出航後間もなく、南雲中将以下全員玉砕の報を耳にしたが、これが最初に体験した命運の始まりだった。

その二、大船団に敵潜<sup>⑧</sup>の総攻撃。

二回目の出動は六月下旬横須賀を出航し、佐世保軍港で十三隻の船団を組み、台湾の高雄に入港、高雄で世界に誇る関東軍の精鋭部隊が、大挙して大連から南下中の中陸軍輸送船十四隻と合流、陸海軍の輸送船は合計二十七隻の大船団となり、十隻の護衛艦に護られ、三列縦隊で魔のバシー海峡<sup>⑨</sup>へと南下を始めたのが、十九年七月中旬だったと思う。高雄を出て三日目の深夜、約五百米前方の輸送船が敵潜の雷撃により、大爆発を起こし海上一面が火煙に包まれた。直ちに護衛艦を中心に、見えない敵潜攻撃の火ブタが切られ、広い海面は勿ち戦場と化し、次々と六隻が轟沈する惨状で、対潜攻撃は熾烈を極め、船団は大混乱に陥った。「板子一枚地獄の上」といわれた船上の者としては、運を天に任せ、身を伏せて息をこらし、死を覚悟して戦闘の治まるのを待つ以外、なすすべがなかった。正に生死の境地をさ迷うことしばし、やっと我に返った時には、生き残り船はいずこに退避したのか、広い海面には一隻の船影もなかった。

その三、我、敵潜の雷撃を受け遂に轟沈。

嵐の後の静けさで、夜明けと共に生き残り船団に対し、一時リングアエン湾<sup>⑩</sup>に集結するよう命令が下り、運良く難を逃れた輸送船はマニラに向かって南下、午後マニラに入港したが、翌日には次の目的

⑧ 敵の潜水艦

⑨ 台湾とフィリピンの間の海峡

⑩ ルソン島北西部で東支那海に面し、重要な海軍基地



地へと何時の間にか各船ごとに出航して行った。南方戦線への増援部隊だったに違いない。私の乗った船も最終目的地であるミンダナオ島のダバオに向け出航した。比島群島を通り抜け、ミンダナオ島の南岸沿いにセレベス海を東へ、護衛艦三隻に護られ静かな海を進行中、正午過ぎだった、突然聴音機のレシバーに「グアン」という快音が飛び込んで来た。私は突差にその方向右九十度の海面に丁度敵潜が魚雷を発射した時の起泡を発見し、間髪を入れず「右魚雷」と叫んだ。船長は直ちに取舵一杯を命じ、魚雷を避けようとしたが、敵の魚雷は扇形に広がりつつ、無気味な雷跡を海面に残して迫って来た。船足の遅い輸送船としては、逃れることのできない、絶体絶命の窮地に立たされた。この時乗組んでいた船員を含む将兵全員が、死を覚悟したのではないか。私も覚悟を決め何かを口走った。その瞬間魚雷は船腹に命中し大音響を耳にした。一瞬、気を失い後方に吹き飛ばされ倒れているのに気付いた。直ちに起き上がったが負傷したのか全身鮮血に染まっていた。幸い気は確かであったので、早く船から退避する為、タラップを下甲板へと急ぎ下りて行った。下甲板では多くの將兵が早く脱出する為、一斉に海へ飛び込んでいる最中である。私も思い切って飛び込んだ。しばし海中に沈んだが、何とか海面に浮かび出た時、上空を見て驚いた。私の頭上で被弾した船のスクリーンが、ゆるやかに廻っていたのである。「これは大変だ」と思って必死で泳いでいる時、愛する輸送船は静かに海面から姿を消して行ったのである。数時間、互いに励まし合い乍ら海上を漂い、敵潜攻撃が終わるのを待って救助され、ダバオに上陸して一命を取り留めた。二度と内地には帰れないだろうと覚悟していた

⑪ フィリピン群島の南端の島。

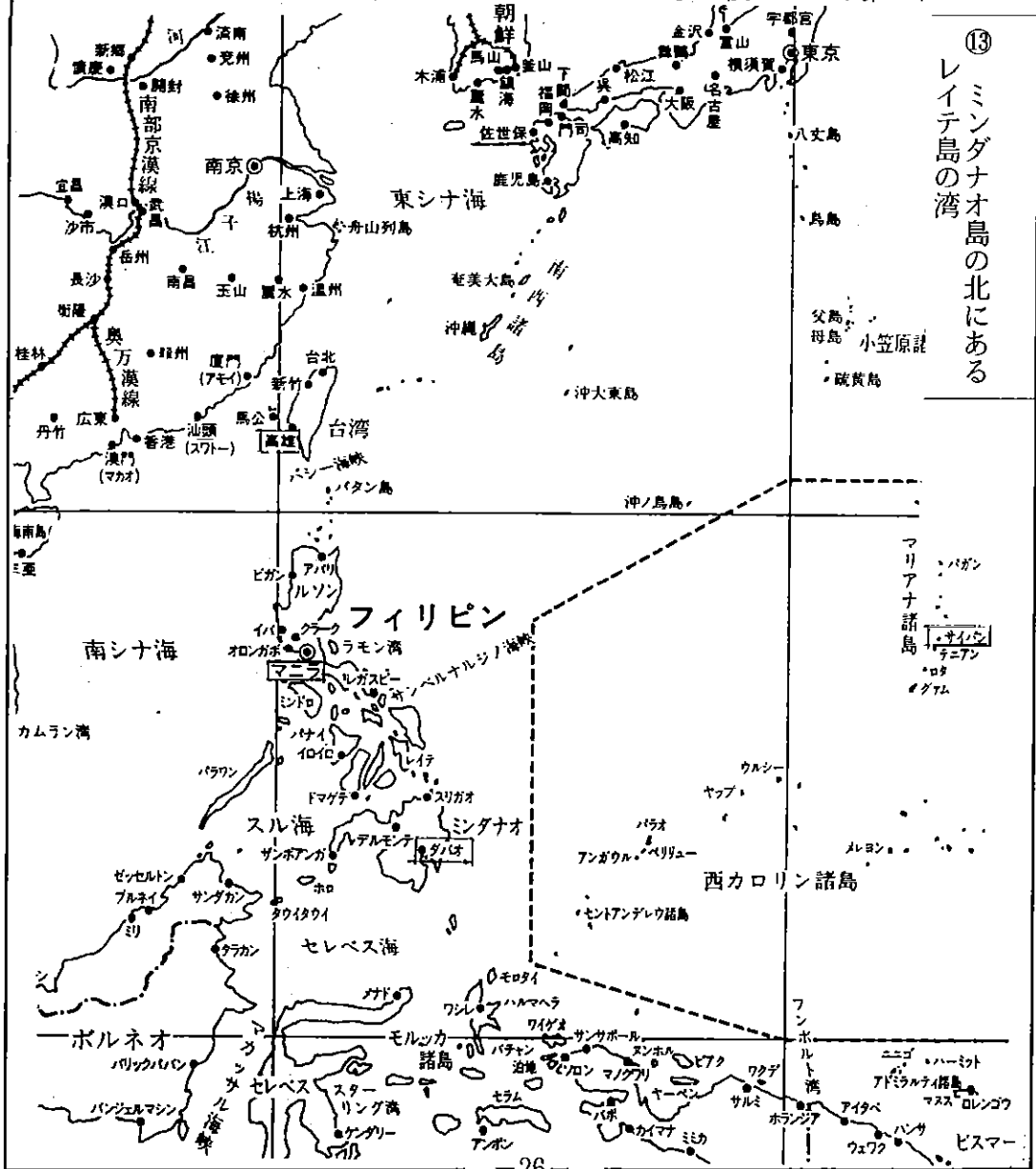
⑫ フィリピンの南、インドネシア領、セレベス島とミンダナオ島との間の海域

が、約二カ月後の十月二十八日、幸い呉に帰港することができた。間もなく敵はミンダナオ島に隣接するレイテ湾に上陸作戦を開始したのである。

以後終戦までの間、幸運に恵まれ復員することができたが、当時は想像もし得なかった。

平和で安定した生活を送れることが夢のようであり、残り少ない人生のエネルギーを、亡き戦友の冥福を祈りつつ、感謝の気持ちで社会の為に使い果たして生きたいと思っている。

⑬ ミンダナオ島の北にあるレイテ島の湾



# 七軍 隊 生 活

畑 町 高 橋 賢 次

昭和十六年七月、海南島<sup>①</sup>三亜港に集結した部隊は、海軍に前後左右を守られて、大船団となり、南支那海を南進した。水平線の彼方まで我が艦船の黒煙がたなびき、空には護衛する戦闘機が哨戒しつつ、七月三十日、輸送船は佛領印度支那サイゴンの岸壁に着く。

以後、飛行場の建設、拡張や軍需品の陸揚げ、糧秣弾薬等昼夜にかけ現地人の労務者の作業が続く。輸送船が入港すれば、部隊は夜間に上陸し、何処かに輸送されていく。サイゴンは南方基地として連日の勤務である。いよいよ十二月八日開戦の午前〇時を期して、一斉にサイゴン市内を占拠、敵性国の大使館、領事館、無線台、港湾施設等、全部撤収し、爆撃機は大編隊で発進する。シンガポール、ビルマ、ラングーン<sup>③</sup>等を爆撃した。八日は開戦の号外で、ハワイの攻撃、イギリス戦艦の撃沈などの記事で、サイゴン市内は騒然としている。同日、我が近衛師団は、タイ国境を突破し、マレー作戦のため南進する。我が隊は第二十五軍に編成され、軍司令官 山下泰文中将の指揮下で、マレー、シンガポールの進攻作戦を開始した。我が一大隊はサイゴンの警備についていたが、翌十七年二月七日、「第一線に向け、前進」の命を受け、カンボジアのプノンペンを出発し、タイのマレー鉄道を利用して、マレー半島の南端、ジョホールバルに向かった。南進中にシンガポール陥落の報を受けた。この世紀の作戦に、でき得れば二月十一日の紀元節当日に「シンガポール占領」という報道で応えたい

① 中国南にある島。ホンコンの南西に位置している。

② 現在のベトナム

③ 現在のミャンマーの首都

願望であった。が、二月十五日に陥落、数日後ジョホール水道一八kmを通過し、昭南島の激戦地に着く。

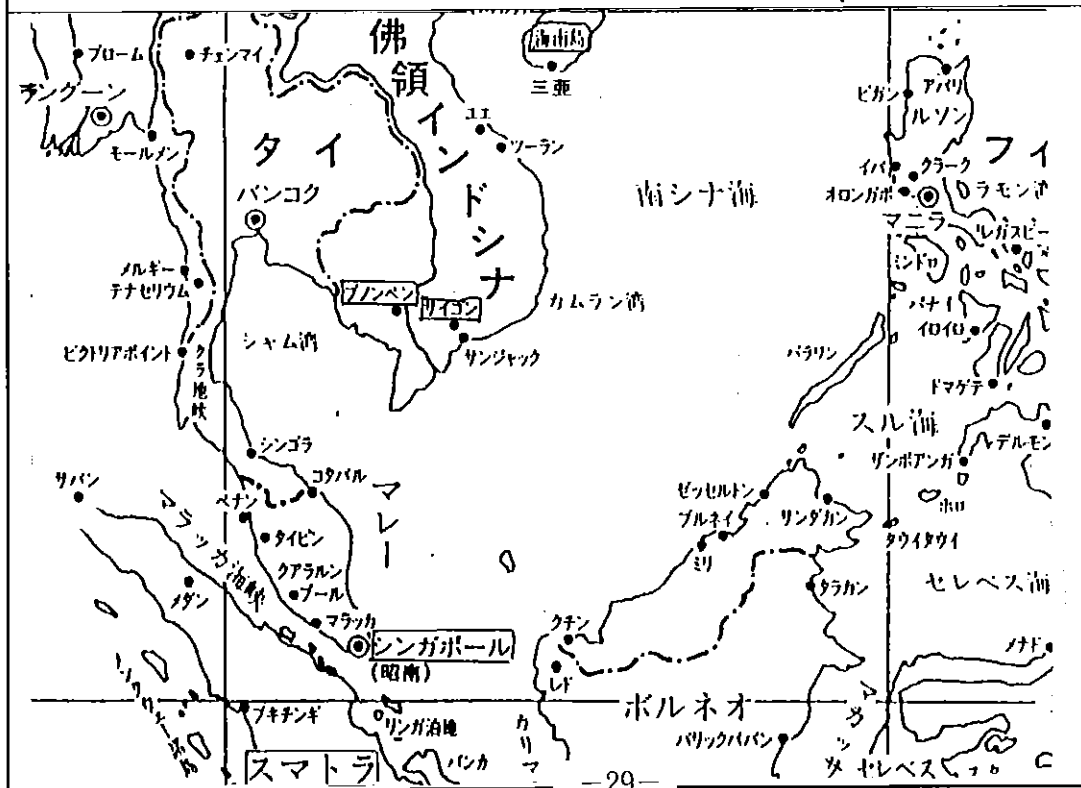
破壊された鉄条網、砲弾の跡、弾丸の莖莖（真ちゅうの円筒に火薬が入り弾丸を発射する）が散乱し、戦陣の生々しさを感じた。それより次期作戦の準備に入り、三月八日、昭南港（シンガポール）を出航し、堂々の船団を組み、海軍に護られて、マラッカ海峡を北航した。十二日未明スマトラ島（インドネシア）西端のコタラジャに奇襲上陸、敵の抵抗を受けることなく、前進する。途中、橋梁を破壊され、修理を待って十九日に高原の町タケゴンを攻撃した。ここオランダ軍が降伏を申出て、敵百数十名を武装解除させるに至った。三月末をもって、北部スマトラの作戦を終わり、主要各地に駐留して、治安の維持及び油田製油施設、鉄道港湾等諸施設の警備に当たる。

我が第一大隊は「南部ビルマ派遣」の命を受け、五月十八日スマトラ、ベラワン港を出港し、在シンガポールの豪州兵、英本国兵の俘虜約千名を同行して、二十五日にビルマ、メルギーに上陸し、飛行場の整備と拡張工事に連合軍俘虜を使用した。このほか道路の補修、埠頭の改修なども行った。が、時あたかも雨期に入り、俘虜の病人が続出し、死者も出るなど作業は難渋を極めた。飛行場設定作業は八月まで続けられ、俘虜は第十五軍に移管して、ラングーンに集結し、十月四日に出港した。

再びスマトラ島ベラワン港の上陸連隊に復帰する。それ以後スマトラにおいて警備、防衛、工事訓練等に従事しつつ、駐留する。敵の上陸もなく、平穏ではあったが、戦況については、内地の空襲、

各地の玉碎、食糧の不足等悪い情報を聞くようになり、開戦当初の快進撃が夢のように感じられた。不安な気はあったが、部隊は健在で長期戦を覚悟し、士気旺盛であった。しかし、二十年八月十五日終戦が数日後に伝達されたが、信じられなかった。将校は「最後まで戦う」と頑張り、兵もその気でいたが、連隊長が内地の状況と天皇陛下の命である事を訓示し、漸く納得するに至った。それ以後は、現地人が白人の上陸をいやり暴動の恐れもあるため、日本兵に治安維持を依頼され、武装解除もなく駐留し、内地帰還を待つ。

翌二十一年七月二十二日に、内地帰還のため、ベラワン港を出港し、八月三日宇品に上陸、検疫事務手続を終え、五日復員する。途中広島島の焼野原に驚く。昭和十五年一月十日東京赤坂近衛歩兵第三連隊に入隊以来、実に六年七カ月の軍隊生活であった。内地の状況は予想以上に厳しく、食糧・衣料の不足、統制配給制度などで激変しているのが当初は戸惑う事も多かった。が、徐々に内地の生活にも慣れてきた。



## 十一日・中戦争記

青野町 岡田正治

昭和二十年八月十五日、無条件降伏、国土は焼野が原、物質は極度に不足し、人情は荒れずさ  
んでいる。あれから四十余年、世界一の長寿国日本、あらゆる物質は市場に流れている。治安が  
良くてお金持の国、世界一の経済大国と言われるようになった現在、私達八十年の生涯が生かさ  
れて来た。再び過根を残さないために、過去の軍国主義の犯した戦争の思い出を後世に語り残し  
たい。

### (1) 赤紙が来た

昭和十三年当時、中国大陆には排日感情が高まり一触即発の状態だった。

七月七日蘆溝橋事件勃発。七月末頃だったか、赤紙が来た。召集礼状である。私は予備役陸軍  
歩兵上等兵である。「八月五日姫路歩兵第三十九連隊に入隊せよ」の通達を受ける。私達の世代  
は明治の教育勅語で育ち「御国の為に滅私奉公は名誉此の上なし」と信じていた。八月五日最愛  
の妻、生後十カ月の子供、両親弟妹を残しての、出征である。村の神社で親戚及び村人多数の見  
送りをうけて「銃後の事は心配せずに健康に気をつけて戦ってこい」と激励を受け懐かしの故郷  
を後にした。八月八日、家族との最後の面会を許される。もう一生の別れとなる覚悟で別れを惜  
しむ。八月九日、白鷺城を後に、熱狂的なる日の丸の旗の波に送られて、姫路駅に向かう。軍用<sup>①</sup>

① 軍隊のことだけに使った  
列車。



列車で神戸駅に着く。同夜は市内で民宿をして大歓迎を受け、内地での最後の一夜を過ごす。十日輸送船に上船、同夜静かに出港した。玄界灘を経て、中国の太沽沖に停泊する。十四日、上陸開始。部隊は天津に集結である。

太沽は緑一つなく殺風景な大陸風景である。戦闘はすでに滄洲<sup>③</sup>、馬廐陣地の攻撃が始まっていた。昼夜の別なく遠くで聞こえる銃声。戦死者、負傷者が後送されて来る様子を見て感慨無量である。次に、我が第三大隊に夜襲攻撃の命令が出た。我が中隊は軍旗に決別し、戦友と水さかずきを交し、敵陣地突破作戦である。敵陣地の壕、鉄条網破壊のため、工兵分隊と共に戦車を先頭に進む。敵弾は戦車の音に集中する。夜襲攻撃は成功したが、夜が明ける頃、一部落に集結する。我が中隊も多数の犠牲者が出た。戦死者、負傷者、落後者等で、健在者は約半数であった。休む間もなく部隊は済南<sup>⑤</sup>に向かって進撃を開始、幾多の戦を経て、十二月黄河の堤防下に集結する。敵前渡河の準備が進められ、十二月二十三日午後十時を期して工兵隊の舟艇に分乗し、渡河作戦を実行し、済南城を占領。休む間もなく、肥城克洲濟寧城の戦いが終わり、ようやく一休み。久しぶりに故郷へ手紙を書いた。陣中日誌の思い出の自作の詩を送る。

どこまで続く戦線ぞ

故郷を出てより早、六月

果てなき廣野をふみわけて

黄河作戦渡河以来

一時も休むひまもなく

明けて輝く元旦も

② 現在のタンクー。

③ そうしゅう。

④ ばしょう

⑤ 現在のチーナン。

塩の汁に芋がめし  
元より奉げた身なれば

濟南肥城克洲と

たちまち奮う敵陣地

護る最後の一線と

時は一月十日の日

天を揺るがせ地を焦がす

砲撃わずか二時間で

堅固を誇る城壁も

弾で作った突撃路

我が歩兵の肉弾は

軍旗の誉、いや高く

南をさして敗走す

濟寧城壁いや高く

萬歳の声天を裂く

襲う寒さは如何にせん

任務は重し身は軽し

強く雄々しく進撃す。

息もつがせぬ突進に

濟寧城は敵軍の

いや頑強に抛杭す。

彼我砲弾の炸烈は

正午を期して我軍の

射った砲弾幾千発。

水深青き水壕も

砲身真赤に焼ける頃

猛射を浴びて突入す。

さすがの敵もかなわじと

赤い夕日の地平線

日の丸の旗、輝やけり。

戦いすんで一休み

想いは遙か故郷の

ありし姿やまぼろしか  
無き戦友の面影や  
音信不通二カ月余  
便り受け取る嬉しさは  
何にたとえて語らんや。

(2) 白衣の凱旋

徐洲戦も終わり漢口作戦に入る。我が部隊は信陽に向かって追撃戦。当時、我が中隊も二百名中、健在者は八十名になっていた。九月八日午前三時、命令受領、五時出発、第十一中隊先兵、我が十二中隊は「本隊光洲に向かって前進せよ。」私は昨夜マラリア熱に侵され四十度の高熱で一睡もできず、朝食も喉を通らない。進撃中、休む事も落後する事も出来ない。午前八時、早くも交戦状態に入る。小河橋附近の戦闘である。敵弾は絶えず頭上をかすめる。敵陣地は河川の堤防にあり、前進不可能となる。私は軽機銃分隊長である。中隊は地物に遮蔽して膠着状態となる。私は敵情観察のため匍匐前進をして進む。その時、敵弾は鉄帽をかすめ同時に右腕に命中した。「あ、やられた」「岡田分隊長がやられた」の声に、合田衛生兵が飛んで来た。敵弾は又しても合田の背中に命中した。二人はその場に伏したまま、動くことも出来ない。次に岸波衛生兵が駆けつけて来て、伏せたまままで仮包帯をしてくれた。日暮れまで動く事は出来ない。夜になってようやく衛生隊に収容される。合田君は十二月正午、ついに靖国の神となる。任務のために危険を知りながら、犠牲になった合田君。故郷の両親はこれを知るよしもない。「あー悲しいかな」御

⑥ 現在のシュイチョウ。

⑦ まだら蚊の媒介による伝染病。熱、発作を起こし、悪寒、せんりつする。

冥福を祈る。

私は九月十六日、第十師団野戦病院に転送。十月十一日盧洲兵站病院、無湖兵站病院を経て上海兵站病院に入る。ここは患者が三千人収容されていると聞き驚く。この病院ではじめて白衣を貰って、患者らしくなる。私の病名は右前骨折貫通銃創である。病床で書いた日記より

はらはらと木の葉の散るや上海の 病の庭に秋風寒し

左手で乱れ散じて書いた跡 右が、きげばと涙こぼる

寝つ起つ故郷如何にと偲ぶ我 異国の空に枯が吹く

後髪引かれる思い大陸の 戦地の友よ我は去り行く

内地帰還

戦地の友の姿を偲びつつ 船は走りて古里近し

山の色、海の水もなつかしい 宇品の空に白衣の姿

広島陸軍病院に転送される

戦いて傷つき帰る益荒男の 白衣の袖口涙がにじむ、

故郷の姫路陸軍病院は満員で鳥取病院に転送。

すそからげ姿うつせるアスファルト 今日も降るかや鳥取の雨

荒武者を心やさしくいたわれる 妻かと思う白衣の天使

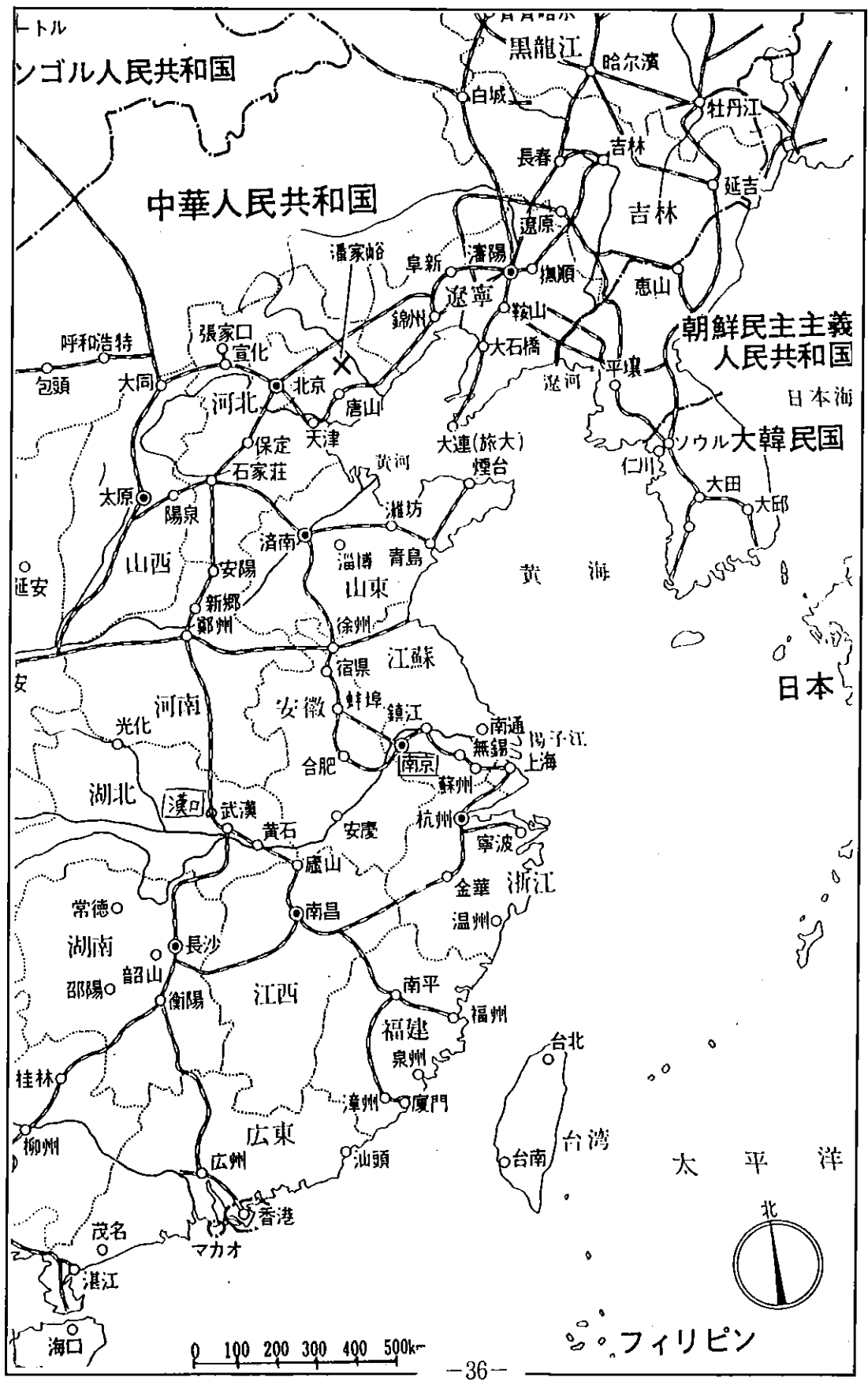
十二月二十三日、臨時大津陸軍病院に転送される。

朝霧や比延の山にこだまする　誰が打つかな三井寺の鐘

朝夕に湖療の窓に祈るなり　早々癒せよ、よろず神々

かくて療養生活一年、種々の思い出を残して退院す。

永久服役免除となり、我家に帰り、再起奉公に努める。戦況は支那事変から太平洋戦争へ進展し、昭和六年満州事変以来十年経過。戦線は大東亜太平洋全域に広がり資源は次第に不足、戦争犠牲者は増加するばかり。作戦計画はついに失敗に終わり、本土は度重なる空襲により、焼土と化す。なお、世界で初めての原爆の攻撃を受け、無条件降伏で終戦となる。幾多の国民は住む家なく、衣料食糧もなく、職もない。塗炭の苦しみに耐えながら国家再建に努めること四十余年、我が国の復興ぶりは世界から注目される程になる。科学文化の発展はめざましく、居ながらにして世界の情勢がただちに茶の間に入る現在の日本、地球上には民族の争い等戦争が絶えない。食糧がなく、飢餓のために尊い命がなくなっていく。恵まれない人々が如何に多い事か。我が国だけの安泰は許されない。人類は共に生きる世界。恒久平和を祈りつつ、かけがえない地球、住みよい地球を後世に引継ぐために、九死に一生を得た我、今想う。



トル

ンゴル人民共和国

中華人民共和国

朝鮮民主主義  
人民共和国

日本海

大韓民国

日本

太平洋

フィリピン

0 100 200 300 400 500km

## 十二、私の空襲体験

満久町 内藤 君子

昭和十六年十二月八日に、昭和天皇陛下が米英両国に宣戦の詔書をご渙発され、日本は太平洋戦争に突入した。

私が住んでいました神戸では、まもなく食料品が統制になり米、砂糖、醤油などが配給になり、何もかも不足し、今日では想像も出来ない様なひどい日々でした。でも、「欲しがりません。勝つまでは」と、日本中の人々が歯を食いしばって耐えしのぎました。

やがて食料品だけでなく、石鹼、ちり紙、マッチなど日常生活必需物資までが、配給制度となりました。私も並んで買溜めました。

「勝って来るぞと勇ましく」の声に送られて、若い人から年配の方まで両親や妻子を残して名誉の応召で出征され、多くの人々が戦死されました。実兄も大学を出てすぐ応召、中支で二年間務めさせていただき、無事帰還して喜んだのも束の間、再度召集でフィリピンで戦死しました。

人生の花である青春を戦争に捧げて亡くなられた人々の事を思います時、今日のこの平和が大きな犠牲を払って得られたものと、あらためて認識し、戦争のむごさをしみじみと感じております。

昭和二十年になり、戦争が益々激しくなりました。私は当時二十六歳で、主人と四歳六カ月になる長男と一歳十カ月の長女と一家四人で、神戸市須磨区磯馴町に住んでいました。空襲が日に日に激し

くなり、長男を一足先に満久に疎開させました。私はよく町で、さつま芋の蔓や葉の入った雑炊など並んで食べ、飢えを凌ぎました。嫁いだ時持ってきた衣類を、さつま芋やお米などに換え、ふかし芋や、すいとん、豆入りご飯を代用食にしました。

昭和二十年一月十九日真昼に、B二十九の四編隊が川崎航空明石工場を爆撃しました。

第一回目、三月十七日深夜、神戸市街地へ空襲爆撃があり、その恐ろしさを身近に感じました。

第二回目は忘れもしません。六月五日の白昼です。敵機B二十九、十数機が神戸、須磨地区を来襲けたたましい空襲警報が鳴り響き、私は長女を背負い、慌てて身ごしらえをしていた所へ、編隊機の先頭の一機から白い煙の様なもの、小さい“の”の字を描いて、ものすごい勢いで、まるで雨、霰の様には澤山落下して来るではありませんか。私は危険を感じ、慌てて防空壕に退避しました。五分程経過したでしょうか。そっと防空壕を開けたところ、そこには爆音と真赤に染った空と火の海。行く先に炎が波の様に地を這い、私の足はがたがた震えて歩けなく、一進一退の状態で、この時はやはりもう終わりと観念しました。その瞬間、疎開して居た長男の顔が浮かび、どうしても生き延びなければと必死でした。多くの人が泣きうめき逃げ迷っていました。道路も家も阿修羅の戦場そのもの。私は猛火の中を逃げ、やっと広い電車道まで出ました。そこには思い出しても身の毛もよだつ様な、息もたえだえの人間の断末魔の姿や死体が散らばり、なかには炭の様に真黒な死体が横たわり、手足の散った死体もありました。髪が焼け縮れてパーマをかけているような子供の死体が、特に痛ましく



て思わず目をそむけ、必死で避難先の若宮小学校へ辿り着きました。この日、主人は疎開先の満久の生家から帰って来て、見渡す限り焦土と化したこの町を、まのあたりにしていたのです。近所の人に私達の安否を尋ねたところ「見かけませんでしたよ」との返事で私達が亡くなったものだと思つたそうです。本当に九死に一生を得て戦火の中を生き延び、私と長女の無事を共に喜び合いました。その晩、私達は神戸の遠縁の家に泊まり、翌日、加古川の駅前の旅館で一泊して、満久に帰宅しました。帰る田舎の家があり、喜んで迎えてくれる家族がいる事を、この時程有難く思つた事はありません。

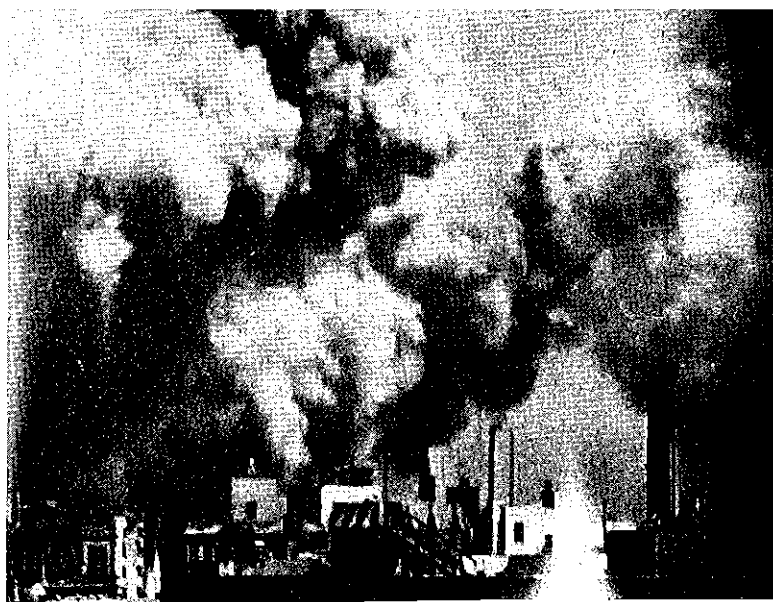
開戦から約半世紀、今年六月、私は久し振りに両親と戦死した兄の眠る須磨寺へ墓参りしました。初夏のやわらかい日射しを浴びて見違える様な美しい町並みを眺めながら歩いていますと、道端で黄色い声を張り上げて、楽しそうに戯れているあどけない幼児に出逢いました。

空襲の地獄絵と、この平和な光景・・・

その時、私は「この子供達がすくすくと無事に成長出来る平和な豊かな日本であってほしい」と祈らずにはおられませんでした。

昨今の政治や世界情勢などを新聞で見るとつけまして、あの戦争の時代に近づいている様な気がしてなりません。二度とこの様な悲惨な戦争は起こさないで下さい。人々の英知と努力によって、今日の平和なひと時が持たれるのではないのでしょうか。私は戦争に負けて初めて、平和の尊さを知りました。戦争を知らない多くの皆さん、どうぞ語り伝えられた話や体験談を、あの恐ろしい空襲、戦争中

の日本を、心に刻み、平和の為、前進努力して頂きたいと思えます。そして、この平和な豊かな日々が永遠に続き、よりよい社会となりますよう、心から念じております。



空襲で燃える街

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載



空襲で黒焦げになった死体

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

## 十三、大東亜戦争回顧

国正町 民 輪

進で子治

戦後五十年を迎えようとする今日、年と共に、折に触れ我が若かりし日々を思い出し筆を取って見ました。

戦後の経済成長により、何不自由ない現在の豊かさにひきかえ、当時は一般庶民に届く物品はなく、僅かな配給制度の品を頼りにし、主食は米麦半々、副食は調味料とてない味気ないものだった。それでも自給自足の出来る農家はまだ良かった。然し、若い男子は戦地に、銃後の男子や学生は徴用として軍需工場に取りられ、残った老人、女、子供に課せられた増産々々の農労働は厳しかった。始めて担いだ下肥の重さ、始めて握った鎌や鍬、手に出来た豆を、暗い電灯の光の下で潰した事もあった。食糧不足に伴い、学校の運動場さえ芋畑になった事も覚えている。朝に夕べに小さな縞縞のモンペに身を包み、銃後の守りと、張りつめ励んだ事も、今思えば懐かしい。お互いに不平不満を言うことなく「撃ちてしまん」の合言葉を胸に、固い絆で結ばれていたように思う。そうこうする内に、あの家、この家にも戦死の公報が届くようになり「千里の外に出てゆきて、君の御為に戦いし」悲しいメロデーと共に村葬が、今日も明日もと繰り返し続く。遺族の者は「御国に捧げた命、名誉の戦死」と唇をかみしめ、涙さえ見せるのものはばかられた時代だった事も、脳裏をかすめる。

そして敗戦、戦いは終わったが、諸々の噂が港に流れ、夫や兄弟の復員を待つ家族の者には今日か

明日か、生か、若しくは死かと不安の日々が続く。当時歌われた「岸壁の母」の歌詞は悲しかった。都会では再三の空襲に家を焼かれ、親や子供を失う悲しい終末である。

一方、戦地では糧秣尽き、飢えと風土病に悩まされながら、物量を誇る優勢な米軍を迎撃した夫達の労苦は、筆舌に尽くし難いものがある。昭和十八年暮、中国大陸に於いて連戦連勝を重ねた精鋭部隊が増援の為、南方に向う時、既に戦況は悪化しており、海軍の水上部隊は潰滅に近く、航行途中、敵の潜水艦からの魚雷に船体は真二つに割れ、僅か数分にして轟沈、千数百人の将兵が戦わずして海の藻屑と消えてゆく僚艦もあり。夫達の乗った特設巡洋艦は空襲を受け航行不能となり、直ちに護衛の巡洋艦に移乗し、かろうじて、ニューブリテン島ラバウル港に上陸した。直ちに千数百軒隔てた同島南端マールカス岬の最前線に急進して、米軍と激戦に激戦を重ね、この事が上聞に達し、御下賜の光栄に浴した。

しかし、遂に、糧秣や医薬品は尽き、草木魚貝を採るも戦死または罹病する者が続出し玉碎寸前となった。其の時、既に後方からの増援、補給は不能となり、戦線縮小の為ラバウルへ陸路集結する事となる。途中は連日、車軸をながすようなスコール、断崖絶壁、鰐の住む河川には渡船や橋などなく、ある時は背を没する大湿地帯を渉る。身体は痩せ衰え、頭髮は赤茶けて細く服は破れ浮腫んだ足は、処どころ梅干の皮を剥いだように擦むけた素足、体重に近い重い兵器を携え、よろめき歩く姿は先に大陸で活躍した勇士の面影もなく、地獄を彷徨う餓飢のようであった。中には「祖国恨日本」「皇軍

万歳」と大木に刻み、死んで行った者もあった。然も、進路上には既に敵が上陸し、待ち構えている。この敵をも突破して集結を終える。その間、六カ月余、道なき道、野宿の連続、死の転進を体験した。終戦直前にはマラリアの高熱の為、網膜が剝離し、失明した事もある。顧りみれば召されて国の為、献身的な死闘も空しく終戦となり九死に一生を得て帰還した。しかし、往時の悲惨さ脳裡から去らず、人生観は変わり、天職を捨てて再び人の上に立たず。又、人の指図を受けない余生を望み、自然を友としている現在である。



8月15日 玉音放送に聞き入る国民  
「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

## 十四、報国隊生活（日本毛織会社）

栄町西村はつ子

戦争で若い男の人は殆ど兵隊や徴用に行つて、銃後の守りは年寄りや女、子供でした。

思い出せば、昭和十八年九会村女子青年四十五名が三カ月報国隊員として、加古川の日本毛織会社に入社しました。戦時中は物が不自由で、特に食糧も不足で米も割当てであり、供出しなければなりません。栄養なんて、考えられなかった。入社するには、先ず着替えの準備をしなければなりません。衣類は、配給制度でしたので、下着やモンペは家のあり合わせの布で縫つて作つて行つた。

日曜日は外泊で家へ帰るのを楽しみにしていた。麦でハッタイ粉を作ってもらい、工場の部屋でみんな一緒に、ハガキですくつて食べた。それに砂糖も塩もなかった。

御飯は大根の干したものの、なんばなど色々混ぜた粗末なもので、お腹一ぱいは食べられなかった。不自由なので、洗濯を干していたら下着がなくなり、大変困つた。

工場は四、五工場とそれぞれ分かれての作業だった。私達十名は工員さんに色々教えてもらつて毛布を織る糸を木管に巻く仕事でした。一日の給料は一円で、風邪を引いて休んだ時もあったので、奉仕を終えて帰る時は、八十三円頂いた。私は働きに出た事がなかったので、初めてお金を手にしてほんとうにうれしかった。その後、半年程経つたある日、親しくしていた工員さんに出会いに行き、工場長さんの許可を得て仕事場へ入り、手伝つたその時、謝礼として三十円を頂いた。そのお金を合

わけて郵便局へ預けた。「十年据置」と言われ、満期日に引出し、副食を買えば、ほんの僅かでした。今から考えると、戦時中の生活状態は悲惨なものでした。着類には、接ぎを当てる着たり、何でも廃物利用をしました。不自由な時代に暮らしてきたので、汚くなったり、古い物は捨てようと思っても勿体ないと思う気持ちが今だに頭に残って去りません。戦時中の事を若い物に話しても、何も分かりません。品物は豊富にあるし、金さえ出せば何でも手に入る結構な世の中です。機械化は進み、便利で最高によい暮らしになりました。高齢化社会になり、趣味をもって、長生きして楽しい生涯を送りたいものです。

報国隊員 45名 帰校後 小学校にて(西村はつ子氏提供)



## 十五、阪神大空襲など

田原町 小岩 つる子

日支事変勃発が学生の最後の年であったため、それ以来、出征兵士の見送り、慰問、戦没者の慰霊祭、祈願祭、勉強と、忙しい日々でした。

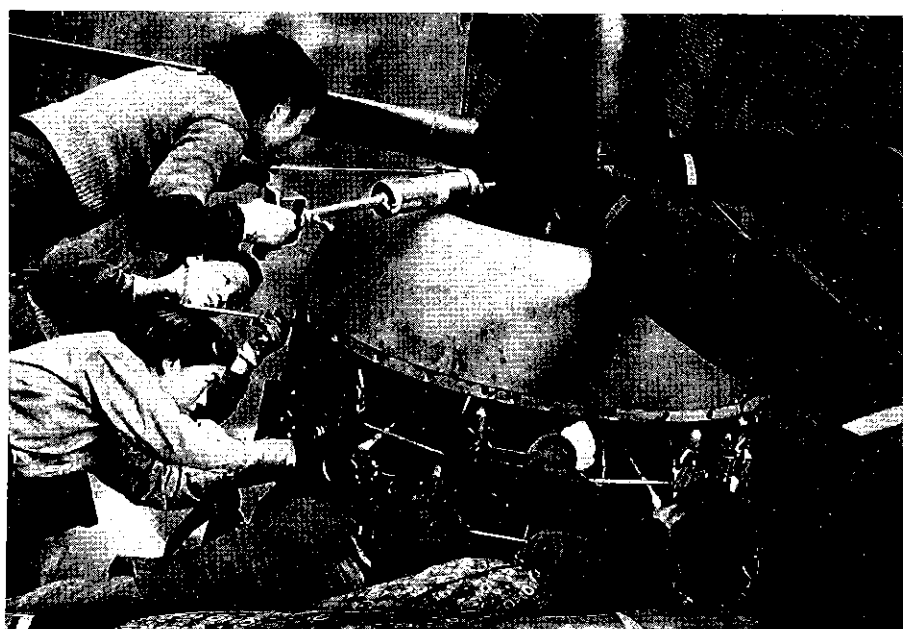
世の中も戦争のニュースばかりの不安な中に日中戦争となり、男子の働き手は皆、戦場へと送られた。後に残されたのは、老人と女性と、子どもでした。私も農繁期以外は、女子挺身隊として、軍需工場へと動員されました。西脇の成田神社で神主さんにお祓いをして清めて頂き、町長さんや皆の見送りをうけて、阪神の会社へと行きました。農家で、食生活は不自由なく暮らしておりました。が、入社した当日の食事は、赤飯で迎えて頂いたと思つて箸をとると、それは見たことも、口にした事もない高粱が大部分の飯。又、翌日からは美しい卵飯と思えばとうもろこしが大部分のとうもろこし飯、麦飯、玄米飯とそれはそれは粗食ばかりでした。朝礼はラジオで東条内閣の訓示や「見よ東海の空明けて」の行進曲で始まる一日の作業でした。一期間の任期を終え、帰ることが出来た時は嬉しかったものです。

戦争も日毎に厳しくなり、本土の空襲も毎日ありました。不安でしたが、姉が阪神地方へ嫁いでいるので、「少しでも家具を持って帰ってやろう」と汽車の切符をやっと手に入れ、姉の家にも出て出ました。三の宮まで来ると、汽車は立往生し、空を見ると、夜の如く真黒、行く姉の家の方角で



す。田舎にいと空襲といっても不気味なB二十九の爆音を聞く程度で恐ろしいと思っていました。今、目前に大空襲の悲惨な姿が迫り、といって帰ることも出来ず、途方に暮れていると、汽車も動き出し、姉の家の近くの駅で下車しました。目前は一面火の海、ビルの窓という窓からは火が吹き出して消す者もなく不発弾があちこちでドカンドカンと爆発しています。歩く道は熱くてホコホコ気持ちの悪いこと、被災者、火傷の方々がどんどんと避難されています。こんな有様で戦争を続けて行かねばならぬとは、ただ呆然となりました。姉の家は、その日の空襲は助かったものの、次の空襲に合い、命からがら帰ってきました。事変以来七年余月、私は卒業から結婚まで、今の様な華やかな青春時代も無く「国民一億火の玉、勝つまでは」とただ一筋に頑張り、生きてきました。

五十年前の出来事を思い浮かべながら筆をとると、悲惨な思い出ばかりです。永久に平和な国であります様にと祈らずにはおれません。



「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

軍需工場での挺身隊

## 六、第二次世界大戦（終戦直前六カ月間）の体験

上宮木町 柿 本 高 次

昭和十九年六月マリアナ海域での決戦で、残念ながら完敗した我が海軍は、空母も航空機もそのほとんどもを失い、制空権が完全に彼等の手に帰したことは、致命的でした。もちろん、私もこの海戦には参加し、悲惨な体験を経ましたが、この事を詳述する心境ではないので省略します。

翌二十年に入って硫黄島を基地とする敵機の本土空襲が本格化しつつある時、千葉県香取の基地で次々と出て行く特攻隊の出撃業務に従事していました。若い学生の再び帰る事のない出撃を見送る心苦しさに耐えかねていた時、この苦痛を救ってくれたのが、二月十六日付、呉鎮長官の「補海軍、氣象学校教官兼分隊長」この辞令でした。

同校は土浦に在り、比較的平穏だと思って赴任しました。しかし、ここも敵機の来襲が次第に熾烈となり、学校でも対策として高等科練習生はすぐ卒業させ、普通科練習生は各鎮守府毎に分散疎開する事に決定しました。呉鎮の練習生二個分隊、百五十名（十六・七歳の少年兵）は、松山海軍航空隊に移転して学習する事になり、その重責を負わされました。私の悲劇がこの時に始まったのでした。分隊士十三名、下士官教員二十名の大世帯での移動は、大変なものでした。先ず松山空との打合せを終え、準備の為、先任分隊士と教員数名を先遣しました。続いて全員列車移動を実施したのですが、当時列車の運行は甚だしく不規則で、翌日の夕刻高松に着いた時は、もう松山への便が無く、無理や

① 呉海軍鎮守府の略。

② 松山海軍航空隊の略。

り旅館に分宿しました。ところが、丁度その夜、松山が空襲を受け、航空隊は壊滅しました。

翌日、松山に着いた我々を待っていたのは先遣隊員の労苦も空しくすべてが無に帰した航空隊でした。しかし、人員に異状の無かった事がせめてもの幸いでした。非常事態の中で駆けずり廻って、何とか食事でありつき横穴壕で一枚の毛布に一夜を托す有様でした。そのうち、航空隊の機能も正常に回復したが、壕内は湿度が高く、虫が無数に繁殖して居て、若年兵には無理な環境でした。パラチフス患者が続発する様になり、穴倉生活を断念し、許可を得て収容力の有りそうな公共施設を訪ね歩きました。ついに市の東端にある和気小学校のご厚意で、その一部の使用を認められ移転しました。

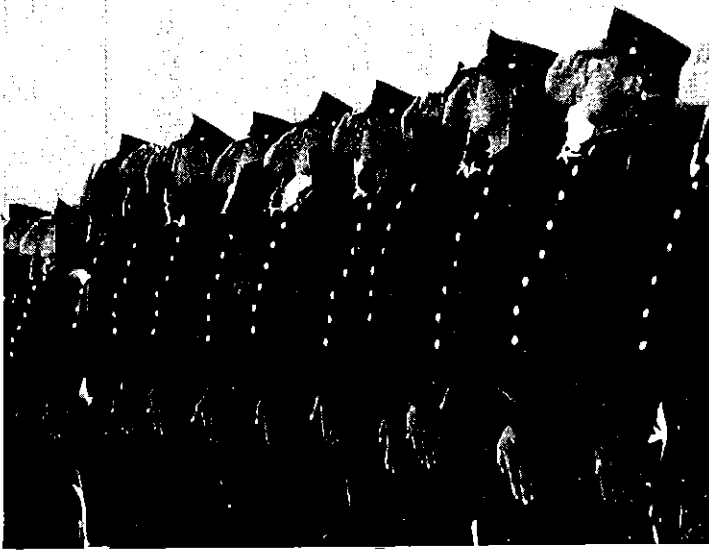
しかし、本部と離れ過ぎていて居住も賄も本部から別れ、独立せざるを得ず、主計科より下士官と兵、各一名の配属を得て、自給体制に入りました。ところが、既に市中は物質不足で耐乏生活を強いられている時であり、百八十名近い隊員の生活を確保する事は非常に困難で、全職員が食糧確保に全力を注ぐと共に、市民の暖かい協力を得なければ飢えを免れる事は出来ない状態でした。また、入浴にしても公共浴場は無く、農家十数軒の全のご厚意に甘える外ありませんでした。散髪の手も、排泄物の処理の手も、すべて自分で始末する有様で、更に医療の手もあり、多様な雑用で心身共に疲労困憊の状態が暫く続きました。そのうち、陽気も良くなり、小川で体を拭える様になりました。運動にも努めた結果、衛生面も好転し、物質の調達も漸く軌道に乗る様になりました。そのため、患者も遂次快復して一人の事故者も出ず、事なく難関を突破し得たのは幸運でした。全員が示した不倒の精

神力に、強い感動を覚えたことです。殊に主計科員の真摯な努力は、特筆すべき功績であったと信じています。

更に、この苦難を乗り切り得た要因に和氣小学校の職員を始め市役所和氣出張所の方々、ならびに市民挙げての暖かいご支援を挙げねばなりません。心からの深い感銘でした。私は本部の当直勤務が多く、留守勝ちでしたが、先任分隊長の統率のもと、一致協力、困苦に耐え克くその任を果したことを、誇りに思っております。生活に汲々として授業らしい授業も出来ないまま、六月下旬には練習生も卒業となる。指定部隊へ送り出し、苦しかった仮住居に別れを告げた時の感謝と喜びは生涯の思い出であり、顧みて感激で一杯です。職員は一樣に痩せ衰え、眼を渥ませていたのとは対象的に、練習生はさすが少年兵だけに僅かの期間だったとはいえ、皆見違える程逞ましく成長していたのが印象的で、せめてもの慰めでした。

六月二十五日付で内海海軍航空隊付に補された私は、残務整理を終え、松山基地に移り、休養中、七月五日高知基地勤務を命ぜられた。南端第一線の逼迫した状勢を想像して赴任したところ、使用できる航空機が一機あるでなし、行き場の無い連中が、食料も乏しく粥はおろかコーリヤンや芋の蔓で細々と飢えを凌いでいるさまには泣けました。高知は土佐鎌の産地で、鍛冶屋が多く、刀剣や槍の穂先等を作り、敵の上陸に備え「沖繩の二の舞を踏むまい」とする市民の旺盛な精神力には頭の下る思いでした。しょせん「とうろうの斧」に等しくとも、それなりに立派なものだと心を打たれました。

そのうち、広島に次いで長崎にも原爆の悲劇が相次ぎ、遂に八月十五日の終戦を迎えたのでした。以上、戦斗とはまた別な体験で、銃後の人達からは取るに足りない事かも知れませんが、丸裸の大世帯が設備も物質も乏しい中で、生活した心労がどんなものかを知りました。魚雷や爆弾の飛び交う戦場とはまた別な戦争体験で、人の命の尊厳を教えられました。最大の罪悪である戦争こそ、繰り返すことの許されない事を、永く伝えたい思いで一杯です。最後に散華された幾多の英霊の御冥福を祈りながら、拙文を終わります。



予科練習生（15才から航空隊に志願し出征した若者達）

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

## 十七 私の引揚げ回顧

鴨谷町 定行記 一

私達の年代の者には、誰も思い出したくない戦中戦後のどん底を乗り越えてきた生活があります。現在の平和と自由に生きる若い人達には、理解できないでしょう。

満州地区にソ連軍が進軍の限りをつくした地獄の惨状とは、比較にならぬと思いますが、それでも私達の終戦後の混乱、収容所での希望のない毎日、引揚げ行動中の悲惨な想いは、忘れることはできません。私は山東省溜川<sup>①</sup>の勤務地に家族を残し、昭和二十年七月初旬現地召集を受け、済南地区防衛部隊に入隊しました。兵員のはほとんどは現地応募、中隊長A中尉は会社での直属課長、私は指揮班に編入され、伝令事務の多い毎日でした。

黄河を眺望できる丘陵地帯で、駐屯警備につく。当時、済南周辺を制圧した共産八路軍は、毎夜接近し、無気味な銃声が多くなった。

八月十五日正午「部隊全員集合」の命令があり、整列し正午の玉音放送で終戦を知る。茫然自失。落胆虚脱。滂沱の涙が全員の頬に流れていた。その時、誰も頭をよぎったのは残してきた家族がどうなっているか。飛んで行きたい。日本はどうなるのか。自分はこれからどうしたらよいのか。無力な自分に泣いたものだ。当時の済南部隊には三会戦分の爆薬、物質が保有されていたとか。早速、午後から部隊の籠城に必要な爆薬、糧食の確保に奔走した。然し、家族が気になる兵隊達には戦斗力は

① 中国の省の一つの名。

低い。八月三十日現地応召兵に召集解除が下令され、家族と合流することになった。勤務地から二人の子供も連れ、八路軍に拳銃で追い立てられ荷物も捨てた。妻達は領事館員に引率されて、やっと済南まで辿り着き駅頭で再会でき、お互いの無事を喜びあった。私が残念に思うのは何故奥地の済南に集結させたのか。領事の縄張り争いの犠牲になったのではないか。もし、直接青島に集結させていたら、家族達に引揚げの犠牲はなかったのに。

私達は、済南日本人小学校に收容された。女達は幼児を抱えて共同炊事に苦勞が多い。男達は使役（食糧調達、掃除）以外は手暇なあまり自暴自棄ともなり、賭博にうつ積を重ねる救いようもない毎日である。これを取り越える精神的な支えになるものは何もない。パニック状態に置かれた人間とは弱い無力なものだ。正確な情報もない混乱状態では、流言飛語に迷い半信半疑になる。

一．天皇処刑流罪。日本焼土化。

二．連合軍の日本分割領有。憲法、旧制度抹殺。

三．在友日本人男子、武装解除の軍人の南方苦役

信ずるものが何もないとき、人はわれ勝ちに保身を考え、恥ずかしい言行が多くなる。哀しいことだ。私は「家族を青島まで送れば八路軍に投降したい」と思った時もあった。

連銀券の通用価値は日々低下するので收容所の食糧確保は窮屈になり、秋から冬へ栄養失調が進み、冬衣類も少なく薄着から抵抗力のない二・三歳児は、風邪ひきが多くなった。そして、ジフテリアが

流行し、最後は急性肺炎で次々死んで逝った。私の次男も例に洩れず、同仁会病院の看護婦さん達は酸素吸入、注射、交代勤務で尽してくれました。声も出なくなったこの児は、付添う私を小さな拳で叩きながら逝った。友人達も見守るなかで児を抱き、詫びながら振り廻す。私は涙が止まりませんでした。妻は私よりも無情を怨んだらうと思います。

今から五十年近くの昔だが「愛別離苦」は悲しく、私の生きる限り消えることなくつづいている。望郷の念、いよいよ募る私達に一月六日出発が伝えられた。誰の顔も生き返ったようだ。五百人程の梯団で有蓋車に寿司詰めだ。雪も舞い暖炉のない車中は零下だろう。章邱駅で軍用に機関車を切離され、三日間だったか貨車生活、食事配給は容易でない。やっと機関車が繋がれ一月十日張店に到着、ここからは徒歩だ。一月十五日には日本軍の武装解除だ。それまでに、できるだけ青島に近づかなくてはならない。一月十三日張店を出発したが、すでに周辺は八路軍が制圧、私達は検問を受け、貴重な毛布などを提供して通過した。わずかに残った荷物を牛車に積み、病人、疲労者、婦女子を乗せ敗残の行進だった。

坊子までの三日間の野宿は、身を切られるような寒さに毛布など少なく、幼児を抱いて星空を震えながら眺めた体験は忘れられない。途中、日本の炭砒から帰る新服姿の連中に逢う。彼等は集まってきた附近の住民に「搶吧、搶吧」（掠奪しろ）と連呼する。坊子近くで米式装備の第八軍にも逢う。彼等も「好人不当兵」だ。金、物を要求する。自動小銃で威嚇するから不安であった。坊子駅の近く



の丘陵地で列車の煙を遠くに眺める。迎えの無蓋車だ。「地獄で佛」、有難く涙が出た。

翌朝青島着、一日も速い日本帰還を夢見たが、長女の発熱で梯団と別れ青島陸軍病院に収容された。当時陸軍病院は引揚邦人、帰還兵の病弱者の治療に活躍されていた。最終引揚げまで残られるそうだが、献身的な看護で長女も元氣を取戻し、私達も病院給与のお陰で疲労を回復した。その間、私達の作業と言えば、病棟外の掃除と死者の葬送でした。

奥地からせっかく青島までたどり着き、故郷を想いながら家族の手を握りつつ往く。こんな悲しいことがあるだろうか。残った家族はどう暮らして行くだろう。私達は幸せだとも言える。

盤底の米軍エレスチー艦に詰められ、厳寒の「玄海灘」に殆どの人が船酔で苦しむも、佐世保に無事第一歩を印したときの感激はひとしおでした。

大村収容所で二千円と米少々を受領した。安心もあつたのか北条迄どう帰ったか、印象は薄い。帰国後は皆さんと大同小異の苦勞でした。

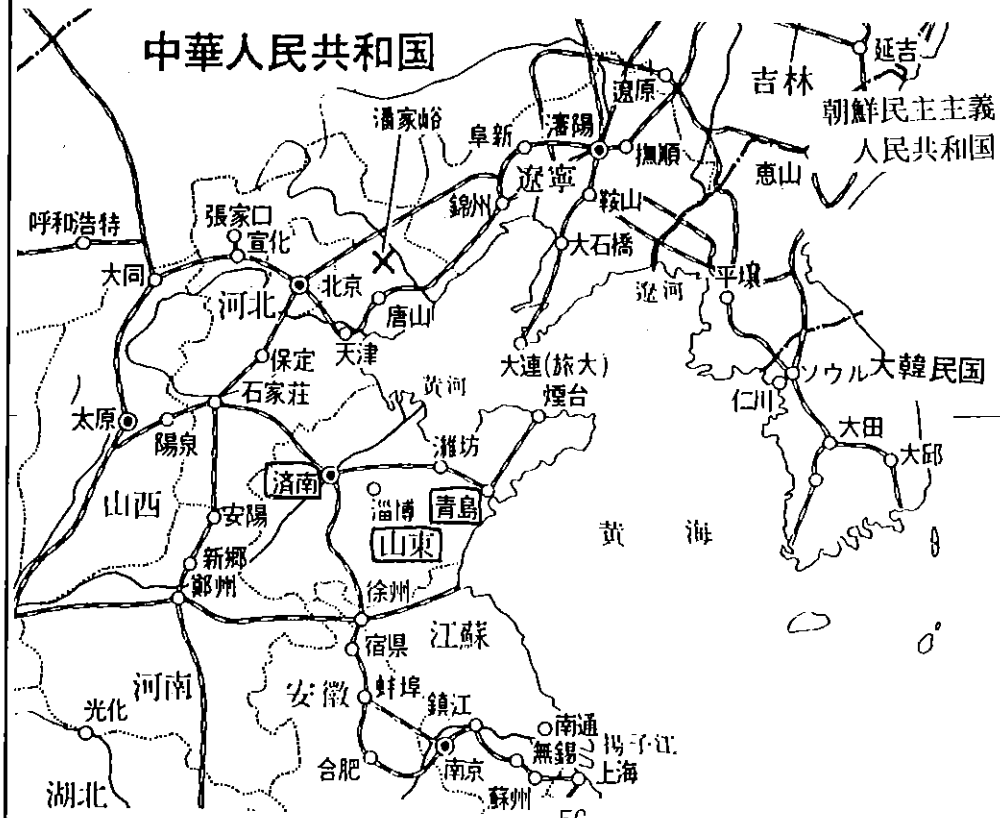
私は、六年前済南、青島へ追憶の旅をした。済南同仁会は、済南医科大学と変わるも、旧病棟は昔のままでした。次男の往った病室も訪ねました。立ち尽くす私を病院の人達は、不思議そうに見ていました。

青島陸軍病院も今は青島医大病院に変わり、旧病棟は昔のままながら裏山は新病棟が林立していて、現在の中国の医療設備の充実を心強く思いました。逝った次男はもう帰ることはありません。妻も逝



「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載  
引き揚げ風景

つたし、私の逝く期も近い。逝くときは兒と妻と一緒に手を取り合って西岸したいものです。



# 六日・中戦争

和泉町 伊藤 為市

## 出征

昭和十二年七月二十日、召集令状を受取り、七月三十日、姫路第三十九連隊入隊。兵舎満員に付民家に宿泊。同年八月十日神戸港出航、十四日太沽に上陸する。十五日朝四時起床、暗闇の中で釜を徴発して飯の支度、薪木は隣の家を壊して作る。支那人は飯を炊かない。雑炊の故に鍋蓋がない。ふたなしでは焦つくばかりで飯にならない。最初は焦ついて駄目。やむを得ず吠を鍋蓋代わりに使おうやく飯となる。隊員は「不衛生だ」と言うが、然し、蓋なしではお粥かおじやしか出来ない。戦争とはこんなものだ。適当に機転をきかし臨機応変に対処し、衛生とか人道等は全くなし。十日も風呂に入らないと、朝も顔を洗わなくなる。馴れるより慣らされる。平気で土間に転がって寝られるようになるのに十日も掛らない。戦争の惨さを味わったのは二、三日だけだった。

## 战友

十二年九月に入って滄州の戦斗に参加。敵は砲弾、機関銃弾を山の上から雲霞の如く射て来る。味方は平地で応戦するのだから堪えられない。「進め、進め」の号令で、死骸の山を築く。战友の屍が夜の闇に紛れて連隊本部へ続々と送られて来る。薪木のない所だけに、その遺体を附近の家を壊し焼く。夜の歩哨は唯一人弾の音を聞きつつ、火の番をする寂しさと恐ろしさ、同級生の屍もその中にあ

った。「国の為に名譽の戦死を遂げられました」と故郷へ知らせた。十四年十月末に凱旋し、友の墓前にぬかずいた。歳月が過ぎ、友の五十年忌に招かれ参列した。老いた母は、我が子の如く手を取って喜んでくれた。それから三カ月、その母もあの世へ旅立たれた。極楽浄土へ、親子手をつないで参っておられることでしょう。息子が戦死して五十年、我が子の位牌に合掌し、教育勅語と軍人勅諭をスラスラと誦する老母の姿も哀れであった。

#### 敵 襲

昭和十四年四月中旬、彰徳附近せん滅の為、一小隊を残し出動した。その留守を見破られたか満月の皓皓と冴渡る夕、「敵襲、敵襲」の声に城壁に機関銃を据付け応戦する。敵は人梯子を作り、悠悠と城壁を登り、木の葉が舞うが如く、踊り込んで来る。撃てども討てども雲霞の如く、ラッパを吹いて押し寄せる敵に、小隊長は部下を叱咤し、城壁の上に仁王立となって軽機関銃を小脇にいだき、城壁の真下に発射する。見る見る内に死人の山を築く。大勢を力に襲撃する敵の大軍も遂に力尽きて退却する。激戦四時間、九死に一生をえられたのは彼、小隊長のお陰です。城内に乱入した支那正規軍の死骸の後片付けに一週間も掛かった。人が人を殺す。憎しみ合ってもいない、顔も知らない人と人とが、何故に殺しあうのか。国の為だ、真実お国の為なのだろうか。でも御国の為だとは言え愚かな事だと思ふ。自己の依怙の為に、我欲の為に、死んで往った友や戦争の犠牲者の冥福を祈るのみ。

#### 徴 用 令

昭和十八年七月二十五日付を以て、「川西航空K・K入社を命ず。」一枚のはがきにより、工場の門内に整列、夜業までして一日一円三十銭。其頃流行した歌に「嫌じゃありませんか川西は、金の食器に竹の箸、仏様でもあるまいし、一膳飯とは情けない」と歌った。二週間毎に我家に帰る。加古川駅乗替が大変で、列車の窓から乱入する。厄神を過ぎ、加古川鉄橋を渡る頃、ようやく足がつく。それまで体は宙に浮いたまま。作業服も汗と垢で汚れ、人様の暖かさに虱がそっと首筋を這う。一年程経て、鶴野に転勤となり、飛行機整備をする。私は姫工生（学校動員）の分隊長と成り、B二十九追撃戦闘機の整備をおこなう。飛行機の試運転もした。不器用な私は度々に失敗もあった。その姫路工業学校生の中で一番背の低い生徒が一人居た。彼は二言目に腹が減ったと言う。大きな目をクルクルと廻す。彼の為に我が家の珍しい混飯の弁当と、会社のナンバ豆入飯とを換えて食った事も度々あった。そして遂に八月十五日が来た。

### 終 戦

終戦とは信じられない。ラジオから流れる陛下のお言葉を聞き入る内に五体の力が抜け落ちた。土の上に座り込んで前後不覚になり、涙が涌いた。不可思議な姿だ。気がついたら人影もなく、散々に我家に帰る。次の日から仕事もなく、食物もなし。不安の続く中に、民主主義と自己主義の我欲が流れて、人道のすたれと共に家庭が分裂し、平和のようには見えているが、損や得で阿鼻叫喚の時節と成った様に思われる。されど、世の中の移り変わりに従い、年金を貰って現況に満足して暮らすこ

とを考えた。生涯学習として公民館にも出入りし、「釈迦に学ぶ会」にも参加して、仏とも縁を結ぶ。南無の本を読んで寺詣。ある寺で「あなたは結構な人だ」と言われ、「私は余り幸せではありません」と反論。和尚曰く「この寺に参りたいと心に決め、早速に実行でき、この大雨に單車で参れる頑強な身体と、往復に必要なお金と、安心して参るその留守を守ってくれる息子があるでしょう。」と解き諭される。暫くしてから「ハイ」と答える。「続けられ無事に暮せる喜びを奉仕に心掛け花を作り、生かされている。生きていく故に、年金が戴ける。あたりまえに有難いと感じ謝して、一日一善を行ずると生きている中に仏となる。そのように心掛けて下さい。あなたならきっと出来ますよ」と、何となく心あたたまるお話を聞くうちに雨もあがり辞去す。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
行進する軍隊

## 十九 私 の 学 生 生 活

鶉野上町 増 家 トキコ

若くして夢多かつた時代に学業を半ば投げうち、学徒動員という異例の体験をした私達は、その体験が人生觀の基をなしていると考えられます。

昭和十九年五月二十九日より、薪炭採取作業奉仕に行きました。太平洋戦争が苛烈深刻な段階に入り、都市の燃料不足を補うため、薪の採取、木炭の製造、炭焼きに動員されることになりました。採取地は、現在の小野市下来住町の国有林である。山に入れば、木に印がついていました。木を探し最初は切口をつけ今度は反対の方から、二人掛かりで切り、伐採します。鋸も使った事のない私。帰る時は手に豆が出来ると言う悲惨な姿。又、台風で近くの大住橋が流れてしまつて、川を渡し舟で、皆で学校まで運んだ想い出などの数々。次は、農事勤労作業を引続き実施。出征兵士の家族の稲刈り、今も粟生町を通れば想い出ばかり。学習方面は第二義的となりました。

三年生に進級すると四月より学校工場で学徒動員がかかり、腕に腕章をはめて電波兵器：雲母と、錫箔を重ねてテープで止める。部品の数も学校から指令され、私たちは未成年者であるが、その製品が何処に使われるのか企業秘密とのことであった。大東亞戦争もいよいよたけなわと成つて来た。その中、「警報だから学校に居るように」と先生の指示があったが、押し切つて帰る途中、ちょうど粟生の橋の上を歩いていました時です。「鑑載機」が急降下して機上からバリバリと機銃掃射をしてきま

した。こわくて橋の下に逃げ込んで、しばらく震えていました。橋の上へ上がりました。大きな穴があいて居ました。鶉野の飛行場への襲撃のコースです。近くの山の中には、飛行機の格納庫がいたる所に有りました。今考えれば九死に一生を得ると申しましようか。

昭和二十年八月十五日、戦争終結、学校生活に入り、三年生二期から学業にはげみました。高等女学校の外国語科が随意科となり、音楽も戦時中はイロハニホヘトが、また、ドレミファに変わり、教科の変更もたくさんありました。四年生に進級し、全員卒業しました。五年生は希望者だけが進み、研究科となりました。非常時統制でお裁縫の材料もなくなり、リフォーム。手芸は「自然の物を使って」と、先生に言われ、木にぶら下がっている「みのむし」を百十匹も取ってきて、はさみで虫を取り、石で重石をして平らにし、草履の表に、底は自転車のタイヤを切ってつけました。一針、一針今のパッチワークの様に市松につなぎます。片方に五十五匹取るのが大変です。毎日、毎日、探し求めて歩く事が大変です。十年一昔とはよく申しますが、戦後も早や五十年近く過ぎましたが、戦争はなく、こんな平和な時代に生まれ育った現代っ子達は幸福そのものと言えましよう。今の子供は衣食住すべてにおいて、何一つ不自由なく、私達には到底味わえなかった学校生活を送っています。時々、子供に私達の体験した時代を聞かせてやりますと、「ぴんとこない」と子供達は不思議そうな顔をしております。



## 二十、飢餓と闘った十万人のレムパン島（恋飯島）

北条町栗田 中島 主 一

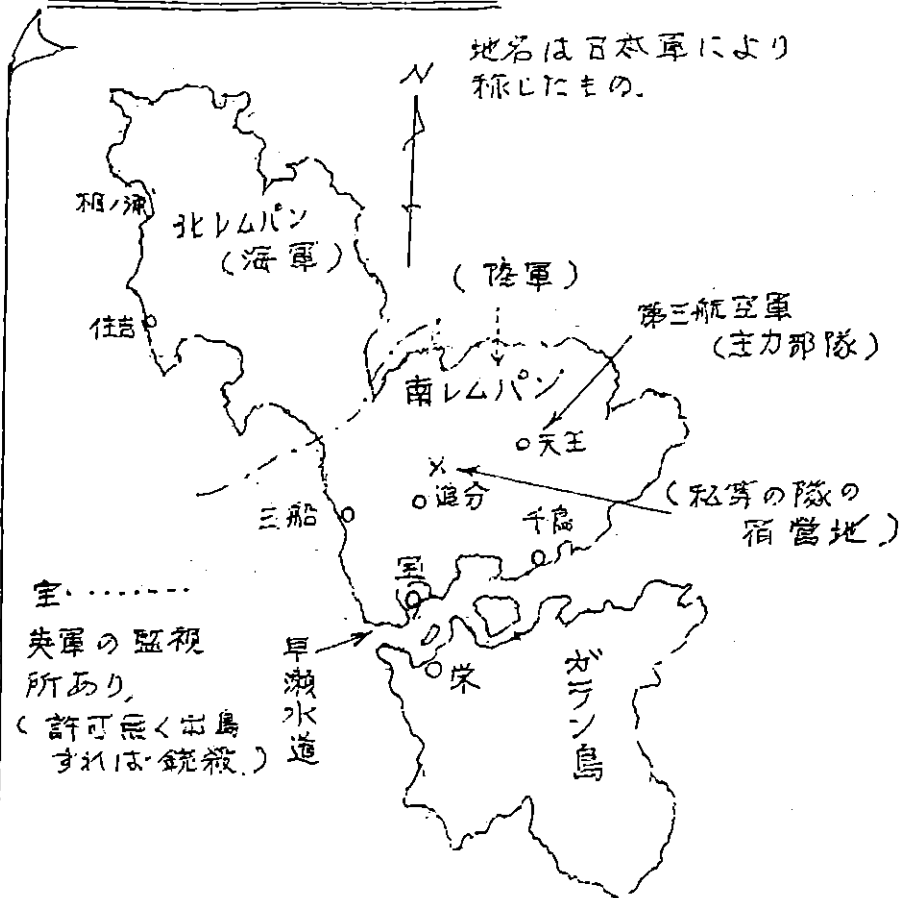
シンガポール（占領期間中 昭南島、昭南市と呼称）第三航空軍司令部で戦争終結。昭南神社焼却をはじめ、市内道路清掃作業等、英軍による身辺一切の「日の丸」抹殺命令で総てを返還、マレー半島ジョホール州のゴム林内での抑留生活を転々と徒歩移動、二十年十月に入り英軍の一方的な指示で遂に、旧日本マレー派遣軍約八万人が、地図上に名も無い赤道直下の「レムパン島」（現・インドネシア領リオ州）にあり、シンガポールの南約六十km、マラッカ海峡に浮かぶリオ諸島のうち、面積約百四十平方km、全島が密林に覆われた未開の無人島）で、三〇五年間自給生活（島流し）と決定。

このレムパン島移駐に伴い、マレー半島中央部に近い「クルアン飛行場」で二日間にわたり、英軍による日本軍一人ひとりの検問と持物検査が行われ、衛生兵の私は担架作製用ナイフ、懐中電灯、時計、雑用鋏等を没収された。

検問の結果、黒テントに戦犯、灰色に同容疑者、白色に無罪者（英語でパスと書いた証明書を交付）と分類、二世将校による鋭い尋問でした。合格者千名単位で梯団を組み、マレー縦貫鉄道でシンガポール港へ返送、英軍に鉄剣を突きつけられ、ケッペル埠頭から機帆船での島送り。時は十月末でした。夕方、レムパン島着。早瀬水道入江のマングローブ密生地帯に先発隊が丸木で作った宝港棧橋に上陸。この時期同島は雨期で、葉の多そうな木の下で個人用天幕をかぶり野宿。

# レムパン島及びガラン島 (拡大図)

地名は日本軍により  
称したものの。



室.....  
英軍の監視  
所あり  
(許可無く出島  
すれば銃殺)

ガラン島にはジャワ方面軍(現・インドネシア)一部  
が入島し、最盛期には両島併せて  
約10万人が柳営生活した。



翌朝、草木が倒れた人の足跡をたどりながら、やっと二・三軒の古びた無人民家がある追分に、たどりつく。その先の雑木林が部隊の宿营地である。

早々に雑木林の草刈り、宝港への部隊附属荷物受領等に忙しい。その内、道路敷設、幕舎設営、農地開墾等部隊を三分し明方から夕方まで作業。英軍からの食糧支給は一人一日当たり米一合程、副食の支給は無く、野草のみ。調味料は塩（自給）製塩班が三船港で海水を平釜で煮き岩塩を作り部隊毎に配給という状態でした。

入島後、約一週間で全員が極度の空腹感と栄養不足のため、加速的に栄養失調が増加し「飢餓浮腫」の「むくみ」が出た。目はおちくぼみ、皮膚は薄黒い。これを「レムパン浮腫」と名づけ、行動もにぶり誰もが杖に頼らなければ歩行できない。衛生兵もどうすることもできません。お手上げです。

耕地に出て鍬を持ったまま倒れるもの。道につまづいて倒れるものも珍しくない。倒れたらそのまま動かない。それでも朝起きて杖にすがって、裸足で、袋を腰に野草取り。食用野草で「とけい草」「しだ類」「春菊に似た葉の草」（南方春菊と名づけた。）これが一番よい。

多数の草探して周辺の食用野草が延びる間が無く、雑木の新葉を摘んで食用とした。

他の部隊では、毒茸を知らずに食用し中毒死した人も数名あったと聞く。又、海岸まで出向き干潮時にマングローブの新根を摘んで来て「海牛旁」と名づけ食用にしたが固いばかりで食べられない。

椰子等食用植物は一本も無い。

桐の木の伐採

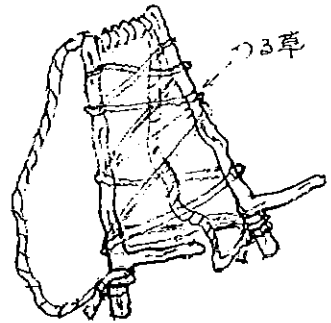
のこ  
2スガき鋸を使用

伐採・農耕作業の際  
は、全員禪一ツ。  
裸足で、衣服の  
保存につとめた。



背負い子

島での生活は、安全がみ  
そりまで"取上られ、日本  
に帰るまで、頭髪、  
かげ共、延びたままの  
乞食同様の姿です。



食糧受領で週一・二回追分を経て三船港又は宝港まで（片道五〜六軒）裸、裸足で背負い子（帰りに米袋又は塩袋を乗せる）杖を頼りに、行きは平均二時間、帰りは三時間が普通でした。此の米も一人一日平均四十グラムに減量され、朝夕二回飯盒中蓋に塩汁、草に点々と米が付着した程度のもを流し込むだけ。ついに人々が「恋飯島」と名づけた。

人間として生きる最低限度を確保するため、飢餓線上を彷徨しながら苦境を抜け出すための血みどろの生活が続いた。

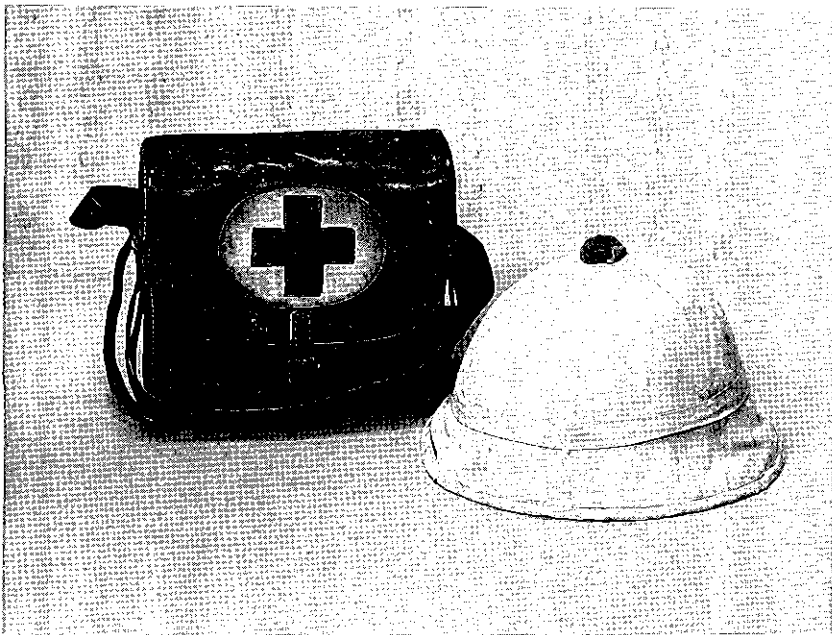
やがて二十一年に入り英軍から時折、携行食糧（「レーション」と呼ぶビスケット、肉又は魚缶詰、チョコレート、飴、煙草等缶に入組したもの）が支給され唯一の救いとなり、栄養バランスは回復へ向かった。尚、空腹感は免れない。

戦後に使用の天幕の損傷は甚だしく、私も含め軍人、軍属等六名で、更に四・五km離れた密林に潜入、孤立生活を続けながら屋根材として桐を探し伐採、これを三十cm程に切断し、なたで薄く割り、木瓦を作り数十枚を背負い夕陽照る山道を部隊本部への運搬という重労働を一カ月余、空腹と蚊・害虫に悩まされながら続けた。

部隊耕地は、やっとタピオカ（芋）胡瓜等が成長をはじめ、それを狙って野猿の群れが横行し、猿対人間の闘いに苦慮を重ねた。

四月頃島内主要道路が順次開通し、トラック一台が支給され、バス代用として運行を始め輸送、連

昭和20年当時のシンガポール郊外の風景（中島氏画）



衛生兵のカバンと 南方での帽子（中島氏所蔵）

絡移動が便利になった。

四月中旬、夢にまで見た日本送還の実現。アメリカ軍貨与の復員船（アメリカ貨物船、三千五百名乗船可能）が入港し全島人歓呼。・・・万歳。

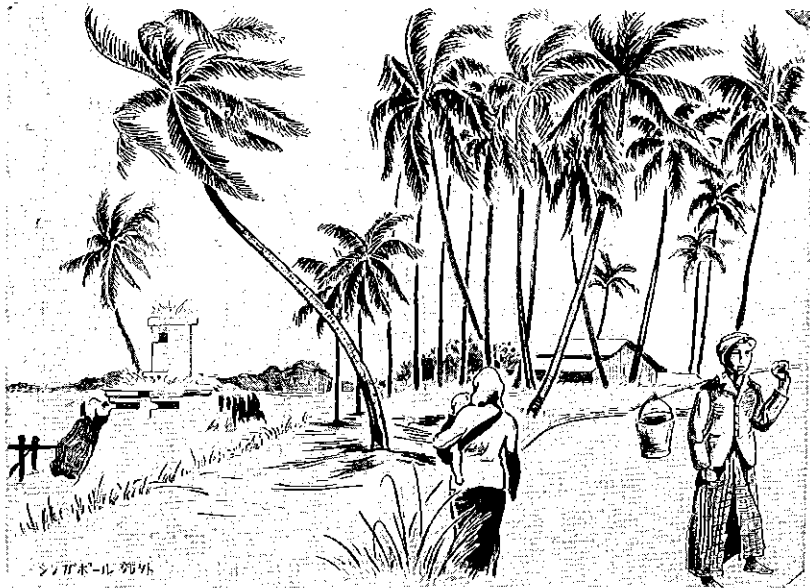
高年齢者、長期間外地勤務者を優先に輸送開始。五月四日、病弱者送還。私の部隊内、伝染病患者二十数名の看護輸送で、「千鳥」港より乗船、直航し五月十七日紀伊田辺港着、嚴重な船内検疫期間を経て二十三日、レムパン島内病死者百三十名の霊安らかれと祈り、更に祖国日本再建を誓い、上陸第一歩を踏みしめた。

このレムパン島からの引揚げは昭和二十二年末を以て完了した。

自然の恐怖と食糧の危機に直面しながらの作業を続けた事は、一人ひとりが体験した生涯の苦しみでした。

この悪条件を突破出来たのは、軍隊編成を続けた組織の力と全体の為にする捨身の行であったと言える。

田辺港で復員式と共に、下士官・兵一律に敗戦――復員迄の俸給金二百円が支給され、二十三歳の青年に返った。



昭和20年当時のシンガポール郊外の風景（中島氏画）



大道芸人の蛇使い（中島氏画）



## 二十一、私の女学生時代

北条町本町 志方美津

私は、大正十四年十月に生を受けました。出生地は、武庫郡山田村原野（現、神戸市北区山田町原野）でございます。丁度神戸電鉄箕谷駅から二kmの所で神戸は東、有馬は北東、三木は西にあたりまして、今は交通の便もよく道路も整備され、便利になりましたが、その当時は自然の環境には恵まれておりますものの、学校も小学校しかなくて、大変不便な所でございます。

十二歳から神戸の学校へ通いましたが、一日数回のバスも廃止になり、往復四kmの道を歩きまして、箕谷駅から神戸電鉄で通いました。（あちらの方では、女の人が自転車で乗ることを嫌いましたので、歩くことしかできなかったのです。）電車の回数も一時間毎にしかなく、乗りおけると遅刻しますので、汗だくになって走ったものです。また数人しか乗り降りする人がなかったのですから、冬は電車を降りると真っ暗で、大滝と言ううす気味悪い所にかかるので、一人で歌を歌って帰りました。一緒に通った旧友に出会いますと、一番にその話がでて参ります。今では懐かしい思い出となりましたが、  
.....

丁度、日支事変から第二次世界大戦にかけての頃でしたので、学校の行事も、一週間に一度は節約の日で代用食持参でした。梅干弁当の日もありました。戦時色がひどくなるにつれ、勉強だけでなく、軍隊もどきの行進をしたり、勤労奉仕に行ったり、薙刀の稽古をする等、すべて緊張した生活でした。

また淡路の岩屋にある陸軍病院へ慰問に行きまして、歌を歌ったり、花束を贈った事もありました。千人針もよくしたものです。どんなに寒くても、オーバーも着用しては駄目、何事も「頑張りましょう勝つまでは、」の合言葉のもとに行動致しました。不思議な事に緊張していたせいか、風邪も一度もひいた事はありません。

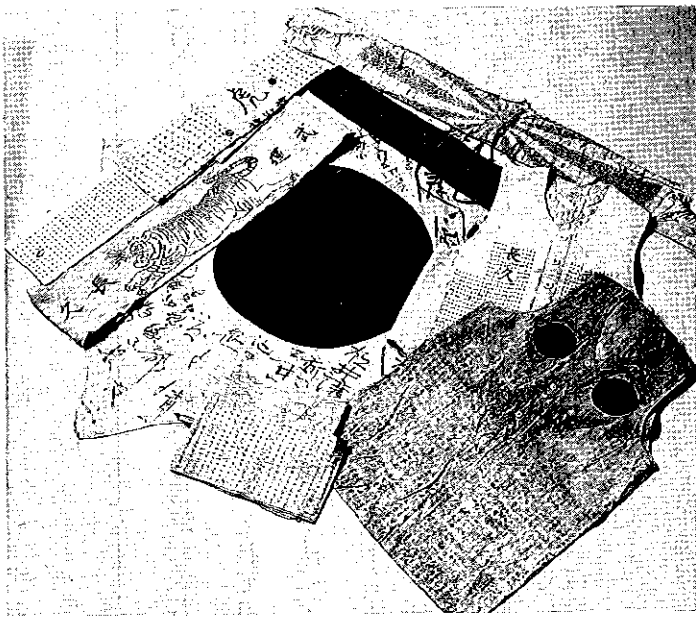
もちろん男子学生とつきあいますと、不良でした。映画館、喫茶店、スケート等禁止で、何事も父兄同伴でないと駄目。補導連盟の監視が厳しかった時代です。しかし、一番残念に思いました事は、東京への修学旅行に行かなくなったことです。代わりに青年道場宿泊錬成会に行く有様でした。

卒業後、食べるものも着るものも物々交換で、衣料も切符制となりました。どこへ行くのも、防空頭巾にモンペ姿、夜は燈火管制をする等、だんだんきびしくなりました。

昭和二十年三月十七日、神戸に空襲があった時、東の空が真っ赤になった後、赤黒くなり、異様な空になりました。暫くして行って見ると、焼野が原になっていて、あまりにも悲惨な有様でした。幸い私の家は少し離れておりましたので、のがれる事が出来まして有難かったです。また親戚の人、知り合いの人等、三世帯の人が、疎開して来られ生活した事も、思い出しております。

現在は、ものは豊富、贅沢でありすぎまして、空おそろしい感じが致します。旅行も、世界各国へ行ける恵まれた時代となりました。

けれども私は、今でも一枚の包装紙、箱、布切れなど、勿体なくてすぐ捨てられず、一度活用しな



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
願いを込めて千人の手によって縫った  
チョッキ等（千人針）

くとはと取って置きます。家族に文句を言われ乍らも・・・。  
世界の中には、飢えで苦しんでいる国、ものが不足して困っている国など、沢山あります。そういう人たちに思いを馳せ、ものをもっと大切にしていかなければならないと思います。今一度、反省しなくてはならないのではないのでしょうか。

そしてあんな時代は二度と繰り返してはいけません。」と痛切に感じている次第でございます。

## 二十二、銃後の守り

上宮木町 池澤 ふみ子

田舎育ちでありながら農業が一番嫌いでした。でも太平洋戦争の真っ最中です。召集令状を受ける人、徴用工に取られる人、挺身隊・予科練とそれぞれ男と言う男は全部教育勅語の通り「一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉シ、以ッテ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」でございました。

花と散りいく君、友人、兄弟、夫、息子、「子を思う心に優る親心」つらい別れの見送りでございます。「天皇陛下バンザイ」と、日の丸の小旗を振って「生きて帰ると思うなよ、白木の箱で帰ってくれ」大和魂と忠義の二字があればこそでした。国防婦人会、千人針、千社参り、慰問袋等、あらゆる事に気を配っているにもかかわらず、B二十九が毎日のように空襲して来ます。B二十九独特のエンジン音で畑にも道にも人影はなく、防空壕に入る事で必死でした。

毎日毎日モンペ姿で銃後の守り、奉仕、奉仕でございました。学生はほとんど勉強せず、親と別れて疎開します。預かる者も、食物不足の中、大家族となります。米麦作り、じゃがいも、大根と芋の蔓まで食べて、米はほとんど供出され戦場へ送られます。砂糖、石ケン、ほんのわずかの割当で配分されます。が、甘い物の味はなかなか口に入る事は、ありませんでした。神戸の方を見れば星が降るように焼夷弾が落ちておりました。疎開者は牛小屋、鶏小屋での生活でした。まだまだこんなやさしい事ではありませんが、無我夢中の銃後でした。

広島へ原子爆弾が投下され、つづいて、長崎と多勢の人を犠牲にして、一九四五年八月十五日、戦争が終わりました。翌日十六日からB二十九の機体も鑑載機の音もなく空は晴れておりましたが、人のうわさも恐ろしく、物品もなく、みじめな戦後となりました。  
この平和が何時何時までも続く事を願いつつ――。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

戦地に送られ兵士を慰めた慰問袋

## 二十三、徴用工生活

網引町 古川卓美

太平洋戦争が始まって三回目の春を迎えた昭和十九年三月、「軍事上特に必要なる総動員物資の生産に関する業務に従事するため、三月三十一日に武庫郡良元村仁川に所在する川西航空機株式会社宝塚製作所に出頭すべし」との徴用令書を受けました。加西地方事務所で雇員として働いていたので「ひよっとすれば」と予想はしていたが、令書を受けたときは少なからず動揺を覚えました。その年、徴兵検査の適齢が十九歳に繰上げられたので、四月に検査を受けることとなったため、少し早くお召しになったのだと腹を決めて任地に赴きました。

会社の規模、内容など確かなことは分らないが、ただ「大きな工場だなあ」との印象を受けました。長さ百m、巾五十mもあるうかと思われる工場が幾棟もあり、工場の隣接地に宿舎が建っていました。一棟に五百人も収容できる寮が十数棟も並んでいます。その日から入寮し徴用工としての寮生活が始まりました。一室十畳の部屋の両側が二段の蚕棚式になっていて、八人が入室していました。早速歓迎してくれたのは、蚤と虱です。南京虫もでてきて、これらの昆虫とは退寮まで仲良くつき合いをさせられました。

日課は五時三十分起床、点呼、洗面、清掃、六時三十分朝食をとり出勤です。勤務は七時三十分から十八時まで。作業が終わると、すぐ会社で夕食を済ませて帰寮し、入浴、二十時点呼、二十時三

十分消灯です。作業現場は飛行機の油圧ポンプの部品を作る補機部で、旋盤工として配属されました。終日立ちどおしで足が棒のようになり、随分と苦痛を覚えました。そのうちだんだんと慣れてきました。

四月二十三日から夜勤をすることになりました。十九時三十分から翌朝六時までの作業で、一週間続きます。隔週ごとに昼勤と夜勤が交互に繰返されます。夜勤は睡魔にも襲われ疲労も重なって、昼勤とは比較にならない苦痛です。夜半〇時に食事をとってわずかの休憩の時間に、星空を見上げながら故郷を離れて知らぬ土地で一人働く淋しさを感じつつ思いに耽っていると、飛んで帰りたいような気持ちになります。「ここで働いている若い養成工達も皆同じ思いをしているだろうなあ」と思いつつまた作業に掛かりました。

寮生活の中での楽しみは、食事と外出、それに待たれる便りです。無芸大食の私にとって、食事以外に歯ブラシと湯茶しか口にするのでできない寮生活では、満腹感を味わうことはなく、家から送ってもらった<sup>①</sup>はったいを、消灯後に布団の中で部屋の者に知られないようこっそりと食べ、空腹をまぎらわしたこともありました。

日曜日には外出が許されます。毎回でも家に帰りたいが、汽車の切符が自由に買えないので帰ることもできません。阪急電車は切符が自由に買えるので、三宮までよく出掛けました。

駅前にある阪急会館は二階が食堂、三階が映画館になっています。奮発して一円のランチを食べ、

① 大麦、裸麦など煎って粉末にしたもの、砂糖をまぜてそのまま、または湯で練って食べる。

八十六銭で映画を楽しんで自由な一日を過ごしました。仁川、三宮間往復一円の電車賃と合わせて二円八十六銭の散財は、一時間十五銭の徴用工にとっては二日分の賃金の出費ですが、一週間の体と心の疲れを癒してくれる唯一の慰みには換えられません。

父母兄弟や友達からの便りも一番に待ち焦がれました。その人を睨みながら何回も繰返して読んで、早速に返信を認めるときも楽しい一時です。六月になって中学時代同級だった友から「特別幹部候補生として入隊した」との便りや、中学五年に在学している弟から「船舶部候補生を志願し、九月に入隊することになった」との知らせなどがあつた。これらの便りは四月に徴兵検査を受け甲種合格で十二月の入隊を待っている私の心を掻き立てました。「一日も早く軍隊に行きたいなあ」そのことばかりで頭を離れない日が何日も続きました。

たまたま街頭で甲種飛行予科練習生の募集広告を見たとき、「そうだ十二月まで待つことはない」と心に決めました。夜勤明けの六月十日の日記は次のように記しています。「遂に意は決した。予科練を受験せんことを。徴用工生活七十三日にはもう辛棒しきれない。幾ら眠ろうと思っても寝付かれない。寝付かれないのが当然だ。昼間に寝ようとするのが間違いだ。つらい身上になったものだ。死にたいような気持ちだ。然し死んだら故郷の父母がどんなになげき悲しむことだろう。同じ死ぬなら立派に死のう。行こう予科練へ！いや行く予科練へ」十時三十分記。

七月になって職場に女子挺身隊員の姿を見るようになり、時局の重大性と予科練への憧れがますます



す高まってきました。作業のかたわら受験手続を取り、準備の勉強を始めました。八月二・三日加古川中学校で第一次試験を受けました。いまか、いまかと待っていた二次試験の通知を受けたのは八月二十九日で、入隊準備を整えて「九月六日三重海軍航空隊に集合せよ」とのこと。二次試験に合格すれば、そのまま入隊するわけで、一時の猶予もありません。晴れて入隊できる喜びを胸に秘めて、苦しみと楽しみを堪能するほど味わい経験した青春の百五十六日間、徴用工の寮生活は九月二日に終わりました。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
列車に乗り込む風景



## 二十四、家庭の一断面

北条町横尾 内藤 とし子

兄に召集令状が来て、支那事変を知りました。それからの姉の苦勞を身近に見て、何度泣いたことでしょう。次は弟が召集になり、アチコチの神社参りをして、武運長久を祈り上げました。私の夫は戦争には行かなかったが、家庭の一断面を少々書いてみます。

私は長男の嫁ではありませんが、姑さんと一緒に住んでおりました。主人の妹が大阪から疎開して来ました。親子四人が家の二階で生活します。食事と一緒に助け合ってと思っても物の不自由な時ですから気まずい思いをする事もありましたが、「勝つまでは・・・」と頑張りました。子供も同じ年頃ばかりで一年生から三歳迄六人です。腕白盛りで例えば、私の大切な時計を大阪の長男（一年生）が持ち出して近所の子供に渡したり。もう毎日が戦争です。私の里の山を開墾してサイマイモやら野菜を作って、その時の辛かった事。私は田舎に生まれ育って田んぼ行きが苦になっていたので、何もなくともサラリーマンがよいと思っただけに罰が当たりました。しばらくは理想の生活をしましたが、主人は昔の北条の役場へ勤めていました。又、役場の仕事も戸籍係から兵事も担当しました。戦時中の事とて大変でした。召集が来る度に住所の分からない人もいて、主人の悩みを聞いてもどうする事も出来ません。そうしている間に下の妹が神戸から帰ると言います。上の姉は本家の裏座敷に移り、下の妹と交代しました。下の妹の方は子供はなかったが妊娠中でした。夫婦二人ですが、身体の

事もあってこれも大変でした。何しろ配給、配給で食物から衣類、砂糖、タバコ等配給のある度にもめ事がありました。或る日タバコの配給に大勢の人が並んでいた時、一人のおばさんが列の中へ割り込みました。後の方の男の人が怒って大喧嘩になりました。ほんとうにあさましい情景でした。

お米は玄米を一升瓶に入れ、木の棒でつついて白米にします。でも、私の家は里に米つき臼があって妹等と一緒に米つきによく行きました。又、平素付合もしていない従姉妹の家まで訪ねて薪木やいろんな物を分けて貰いました。自分とこの物だけでなく疎開して来ている家族の分がほしい為、行った時の恥ずかしかった事。やさしくして頂きましたが、結婚して初めて涙をこぼしました。

又、空襲、空襲で警報のある度に当座の必需品をつめ込んだ大きな袋を背負い、両手にも持てるだけ持って、防空壕を目指して一目散に我先にと入ります。昔の揚武館①の中にありました。小さい子供等は「B来る、B来る」（BとはB二十九爆撃飛行機を指す）と押入れに入ったり、小さいながらオロオロしていました。防空頭巾を着せたり、大人はモンペ姿で何時でも避難出来る様に夜もゆっくりねまき等着てねた事はないのです。また家財道具も疎開させました。お姑さんの縦兄の家がすばらしく大きなお家だったので、近所の方の分も預かって持って行きました。そんなにまでしなくても思っただけですが。でも家から見える所が空襲で真赤に燃えて、すぐそこに見えたんですもの。怖くて、怖くて、あの燃えている様子は一生忘れられません。そして家財道具の火鉢や花器、指輪等は皆供出しました。後でお姑さんに叱られました。でも負ける等思った事もないから、「勝つまでは、勝つま

① 現在の市営駐車場（さくら銀行前）大正十二年加西実業学校を設立。この講堂として揚武館を建てる。

では」と頑張ったのにととうとう負けました。あの八月十五日のお盆の日です。何も詳しい事は分かりませんが、その夜の怖かった事、どんな事されるのか、アメリカ人は恐ろしい人ばかりだと思っていたから。でも空襲がなくなった事だけはホッとしました。こんな北条くらいで家の必要な物を疎開させた事が馬鹿馬鹿しく思いました。書きたい事は一杯ありましたが、もっともつと苦しい目に合っている方があります。お友達にも親戚にも——。そして今は幸せ一杯ですから、苦労した甲斐がありました。誰に感謝してよいやら——。毎日楽しくある事を家族の者に手を合わせて何時迄も祈り上げております。来年のお正月は私も喜寿を迎え、皆子供を呼んでお祝いをするつもりです。どうかもうしばらく元気で過ごしたく頑張っております。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
集団疎開出発風景

## 二五、徴用工生活

東劍坂町 中 本 光 雄

私は昭和十八年八月十七日、川西航空機株式会社の姫路製作所に入社した。給料は時給で、一時間二十二銭五厘です。私の家から会社のある天神町まで、約十七kmのそれも今と違ってデコボコの悪道路を、自転車通勤した。ところが、十二月一日武庫郡鳴尾村の川西会社に出張することになる。ここでは寮生活をせねばならない。寮の食事は米の御飯ではなく、ナンバの御飯です。

ここは鳴尾整備工場で、仕事は艦載戦闘機の油圧系統に配属された。フラップ揚降作動不良の調整をしている時、実習工が後向で左右一人ずつ尾翼をつかまえて浮かぬようにするので、寒い時期にエンジンの風がきつく当たり身にしました。このようにして油まみれになる二カ月の実習が終わり帰宅した。

昭和十九年二月一日より川西鶴野工場の勤務となった。そこでの社宅寮は今の新生町<sup>①</sup>です。

工員、挺身隊男女、養成工と共に勤務する。姫路工場からエンジン、主翼、尾翼をそれぞれ大型輸送馬車で鶴野工場へ送ってくる。機体関係は九分隊の編成で、ゼロ工程から五工程まででエンジンを搭載して組立が出来る。社検は検査工と搭乗員とする。

作動するのは高圧油でフラップ、脚、揚降とブレーキ、方向舵、昇降舵、計器です。手直しとなれば、胴体の内にパイプの配管と、いろいろの器具が取付けてある。会社では整備するのが始めてだが、

① 現在の加西市新生町

専門の技術者が居らず、主任が技術者兼任のありさまで、手直しは自分等で残業なり徹夜をしていると勉強をする。直れば相模原航空隊に譲渡する。

航空隊では更に官検を受ける。手直しは航空隊と会社側とで一緒にする。下士官も整備は始めてです。共に覚えるのに時間がかかる。直れば空輸する。

四月八日に私一人だけ鶴野工場で川西会社生産担当者所長から、表彰状と賞金拾圓を頂き光栄だった。その賞金拾圓は大阪朝日新聞社経由で国防献金とした。

その後、鳴尾整備工場から鶴野工場に転勤があり、工員も増えてきた。又航空隊の下士官も異動で多くなった。こうして軌道に乗り格納庫で二列の流れ作業となった。

会社の階級は主任、班長、組長、伍長です。私は六月十四日付で伍長に命じられた。

戦況も深刻となり、九月一日より川西会社は、航空隊の現役、今津中尉が班長に配属された。毎日残業は七時か又は十一時までになった。油圧系統は度々徹夜もした。

ただ一度だけ、こんなことがあった。笠日空輸の飛行機の手直しがあるのに、私は家に用があり、阿部下士官と養成工二人に頼んで定時に帰った。翌朝工場に行くと、その三人で十一時まで調べても原因がわからず、下士官が帰られ、後の二人も家に帰ったと聞いた。そこへ赤い腕章を付け、バットを持った下士官が五名で私をとり囲み、「手直しができていない」と荒いけんまくで怒りますので、「家に急用ができ、阿部下士官に頼んで帰りました」と答えても、なかなか怒りはきつく、バットを

振り上げる下士官もあった。そこに今津班長が居られ「管制器を取替えましょう」と言われ、取替える事にした。だから、下士官の怒りがおさまった。取替えるとすぐに直り、空輸が出来た。昼の休憩に阿部下士官が「迷惑をかけました」と言って喜んで礼にこられた。

戦況も悪化し、五月から、毎日は作業が出来なくなった。

或る日、空襲警報が出たので疎開命令があった。格納庫から西へ百五十米ほど出た所で、西の山の方からグラマン戦闘機が二機飛んで来るのに気付いた。皆が見ているうちに、真上だ。早や九会の学校の上くらいだと見て居ると、機首を逆に西に向けた。すると、機銃掃射のシャシャと言う音と共に、急降下で自分等の頭の上を飛び去る。その騒音で全員が自然に伏せ状態となった。恐ろしくてしばらくは誰からも声が出なかった。幸いにして怪我人はなかった。

八月十五日に終戦となる。誰一人として負ける戦争とは思ってもいなかったでしょう。大きなショックでした。思えば私の部下十八名全員が真面目で、健康で、油まみれで残業なり徹夜もし、よく頑張ってくれたことを感謝している。

十八日に酒一人一合の割当てがあつたが、肴はスコップで炒った大豆でした。寮の生活も食糧難で、養成工はかわいそうにやせ衰えていた。だから、杯一杯の酒を飲んだだけで皆がぐたぐたに酔った。高橋組長が泣き出すと、大声で泣いた者も何人か居た。酔ったまま養成工は淡路島、四国へと帰っていった。



## 二六、明石での体験

鴨谷町 岡本豊子

太平洋戦争に突入する以前、東京で2年程過ごした。この時は食べ物も焼き鳥、あんみつ等が食べられて余り不自由はなく過ごせた。「B二十九を撃墜せり」と靖国神社に機体が飾られたりして日本軍は勝つと信じていた。

世相が苦しく変わりゆくうちに、田舎へ帰った。次々に若者が戦争に行き「討ちてしまん」の精神のもと、必勝を願って見送りました。私達が結婚した当時は、夜から朝にかけ賑やかに祝福の宴が催され、翌日は近所の人を招いて寝ずに続いたものでした。新婚旅行などは、出来ませんでした。しかし、川崎造船所の近くだった関係で敵機の襲来を度々受け、防空壕へ逃げました。食糧はすべて配給制度で住居が海辺だったおかげで、浜へ買いに行けたのが幸いでした。だんだんと空襲が激しくなり、簞笥や重要な品物は全部義父に加西から荷車で明石へ来て、積んで帰ってもらった。現在からは想像もできない事です。其のおかげで衣類は焼失せず不自由なく過ごせました。感謝をしております。当時は月給五十円でした。

それから程なく空襲が激しくなり、明石の人丸公園に爆弾が投下されました。避難していた人達、無数が見るも無残な姿でした。手をとばされた人、胴体だけの人、筆舌に尽くし難いむごいものでした。それでも「負けられません勝つまでは」と田舎では、米、いも類ほとんどを供出して、たくさん

耕作しながらおかゆをすすする生活でした。麦秋を終わり、私が里帰りをしていた時です。明石川崎造船所一帯が爆破され、焼野原となりました。夜、主人等は逃げる所がなく海へ飛び込んだのですが、油が流れ込み海上も燃えていたようです。そこで、持ち物すべてを捨て、命からがら藤江の友人の家にたどりついた。「友人に焼けただれた皮膚を夜通し冷やして頂いて助かった」と顔中真黒になって草履ばきで私の所へ着きました。よくも生命があったものと助けて頂いた事に感謝したものでした。

そして、姫路が爆撃された後、原爆を受け終戦となったのでした。列車で帰省するのに満員の人々で道路は動けず、窓から乗り降りをしたものです。さとうきびを搾って飴を作って食べられたら良い方で、栄養失調で行き倒れの人があったりしました。衣類も点数制です。肉類は家で鶏を飼って自給自足です。子供を育てるのも母乳の出ない人は大変だった事でしょう。かゆをすすりながらの生活、田舎も薬仕事を捨て、女もミシン工場など外に出て収入を求めるようになりました。

昭和四十五年頃より給料も上がり、収入が増えて農家の反当収量も増して現在に至りました。物も不自由なく、総てに満たされている現在です。しかし、一粒の米も疎かに出来ない時代に育った私は今も変わりなく惜しげもなく食べ物捨てている時、勿体ない事だといいつい口にして、いらぬ脂肪をつけています。豊かな時こそ、心を引き締めて、総てに感謝して暮らす心を大切にしたいと思えます。今日生かして頂いている命を大切に、胃袋を満たす食物を作る楽しみに心をこめます。

## 短歌

「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載



サイサイの祭り花火に原爆の、当時を思い心おこれず  
終戦後やせにし息子帰りきて、間もなく死せりと媪は語る  
肉体も心もばらばら空爆の、無残さ常に忘れえもせず  
今日ひと日命を頂き有難し、足らう心を外にむけたし

空襲夜景

「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載



空襲での死者

## 二十七、支那での思い出

殿原町 村岡敏子

昭和十六年四月中旬に、私は「そんな所へ行くのか」と泣きすがる祖母や両親に見送られて、海州に居る主人を追って、唯一人で渡支致しました。

神戸港出発の日には晴天でしたが、明朝青島へ着くと言う日の夕方から、時化になり船酔を致しました。青島へ着きますと、主人が迎えに着て居り、青島市内を見物し、又船で海州の社宅へと到着致しました。

外堀りの有る広い社宅で、別所町から行って居られるA様S様の御家族がすぐお隣で、見知らぬ中国迄きても淋しくはなく楽しい毎日でした。買物等は皆ボーイがしてくれますし、日本語の少しわかるボーイで助かりました。堀の外側には「用タイタイ」と言う人の大きな果樹園が有り、杏、桃、梨と次々に花が咲き実がなりました。城壁の彼方に沈む赤い夕日を眺めつつ、遠い内地の父母を偲んだものです。

丁度一カ年余り居て、又Aさん御一家の後を追って、博山へと出発致しました。海州から徐州へと目もはるか見渡す限りの麦畑、六月でしたので美しいとりどりの芥子の花が広い広い田に咲いて、とても美しくあきず眺めつつ徐州へ着きました。済南、張店、そして目指す目的地博山に着きました。

四十む地に有る産哨会社の社宅に着き、ここでも又Aさん御一家のお世話になりました。やっと下

の社宅が出来上がり、門を入れて正面の社宅の玄関前にコンクリートの囲いが有り、その中に黒いピカピカと光る大きなのが三個置いて有ります。尋ねると石炭なのです。それを小さくこわしてかまどに入れて焚くのです。朝一杯いれると夕方まで、夕方一杯入れると朝まで、燃え続いて消える事もなく何時でもお湯はわいていますし、その頃としては最高でした。山東鉱業、産硝会社と社宅には日本の方がたくさん居られて、いろんな方と親しくして頂きました。

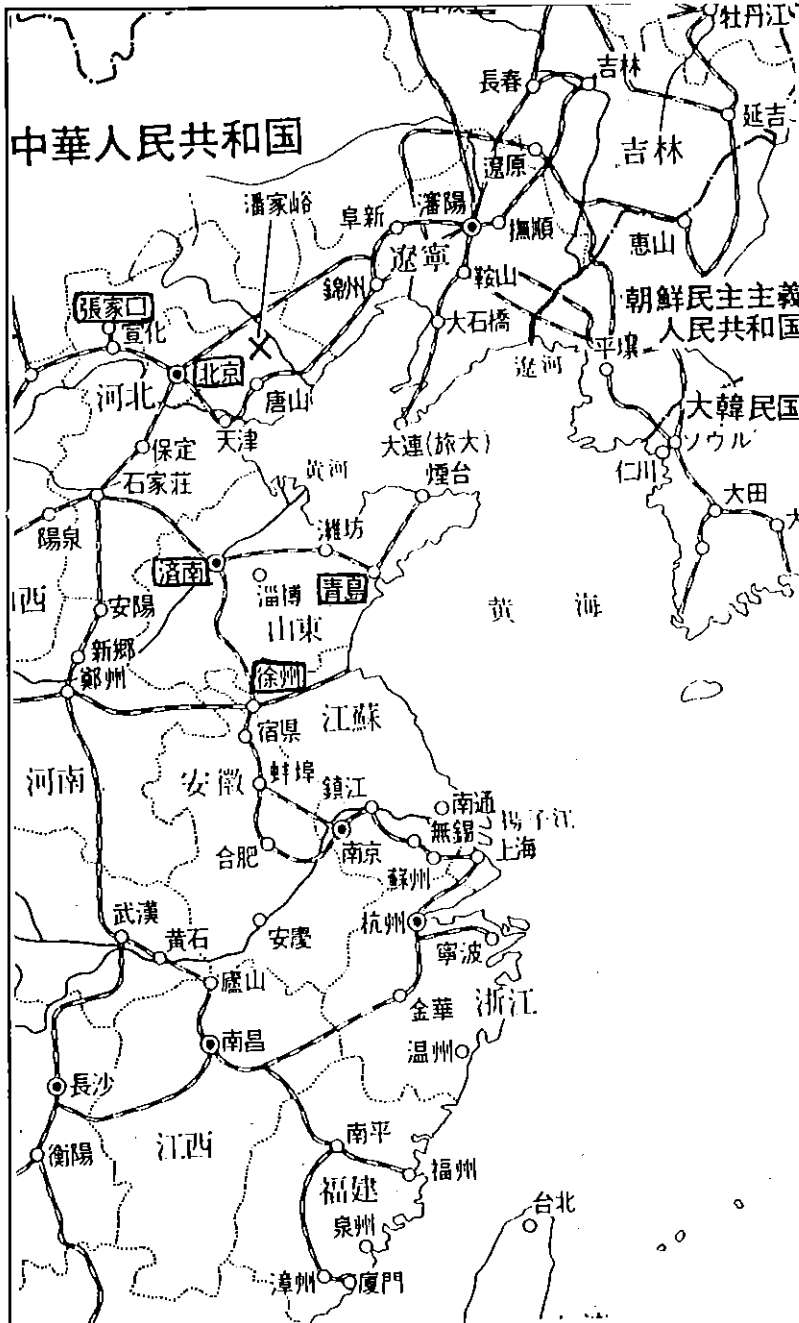
それからは何カ月か経った或る日、主人に召集令状が来て入隊致しました。私のお隣もその隣も二階に居る家にも会社からは帰れと言いませんし、給料は頂けるし、御主人の居られる家もたくさん有りますし、そんなに淋しいとも思わず暮らして居りました。近所の奥さんのお産のお手伝いもしてあげたり、山東鉱業の社長さんに頼まれて済南の部隊の部隊長さん達の浴衣も三枚縫ってあげたり、隣の奥さんのシンシ張りをしてあげたり致しました。或る日、社宅のボーイが「タイタイはいろんな事をするから他のボーイ達が笑っている」と言うのです。それで私がボーイ達を呼んで七・八人並べてその前で「日本と中国とは違うのだ。なんでも出来る者、知っている者が偉いんだ。私は文字も皆知っている。」と言ってやりました。それから一週間後に毎朝のラジオ体操で親しくなった済南銀行博山出張所の所長さんに頼まれて、銀行員として使って頂きました。すると、吾が家のボーイが「私の宅の奥さんは銀行に行ってる」と言って喜んで鼻を高くしました。所長さんには良くして頂き、他の行員さんと中華料理店へも度々連れて行って頂きました。女子行員は三人居りましたが、お昼休みに

なると出納係の二人の中国人が私に「村岡さん、日本負けてるよ、早く日本へ帰りなさいよ」と言うのです。新聞を読みながら、私は「日本負けたりしませんよ」と言っただけで平気でした。それから一週間後に二人の中国人の行員は転勤致しました。四、五日した頃に会社から「出征家族は内地に帰る様にと命令が出ました。

出発の日迄一週間有りましたので、「主人に出逢って帰ろう」と思い、済南、北京、万里の長城を眺めつつ張化口へと着き部隊をたずねて行きました。その部隊は討伐に出て居りましたが、主人は居りまして面会出来ました。主人はびっくり致して居りました。こんな所迄一人で来るとは思わなかったのでしょうか。

会社の留守家族の奥さん達と一緒に列車で陸地を朝鮮へ、そして内地迄会社から送って頂き、無事加西の家まで帰りました。

家に四・五日居て里へ行きましたが、翌日女学校時代、毎日一緒に通学していた友達に出逢いました。友達が「これからどうするの」と聞きますが、私はまだ考えていないと言うと「そんなら私が今勤めていると頼んであげる。」と言って鶴野の飛行場のすぐ近くに有る内務省に世話して頂き、早速勤めました。里からはそんなに遠くないし自転車で通勤致しました。そこも皆さんに良くして頂きました。或る日総務課に居る若い男の子が私の側によって来て「村岡さんの側によると僕の亡くなったお母さんと同じ香がする」と言っただけで少しも離れませんでした。それから私に「おふくろ。おふくろ



。」「と言いました。子供もない私は、彼が可愛いくて、里の母が麦芽で水飴を作り、はったいを引いてそれで昔のげんこつとかおらんぼとか、いろいろな物を作ってくれました。これを持って行って食べさせたり、茶布しぼり等も度々持って行きました。喜んで食べてくれました。

いろいろな時代を生きて来た私には、思い出はまだまだ一杯有ります。

## 二八、私の徴用工生活

窪田町 山下 敏郎

私は、当時大阪地方専売局播磨北条煙草販売所雇を拜命、勤務していた。働ける若者達は、次々と戦地に軍需工場にと徴兵、徴用され、若者達は日増しに減少していった。国家総動員令により、国家が必要とするという理由のもとに、どんどん徴用された。

官庁徴用と称して、私も昭和十九年三月三十一日に、仁川の川西航空機宝塚工場へ出頭した。各地から集まった者は、係官の指示で配属先や寮が決められ入所した。私は、会社の第一特高圧変電所の配電盤の記録係として勤務した。ゴウーゴウーと七万ボルトの変圧機のうなる音、触れると感電死すると言ふ三千三百ボルトの高圧電流回路等、初めての仕事でビクビクの勤務だった。加西の方から来ている人達は、どうしているのだろうか。大勢の人でわからない。寮では蚤、虱、だにが下着にわきかゆくて夜も眠れない。食事は大きな食堂だが、なんば、こうりゃん、うどんの混じった飯、水菜の浮いた汁で腹の調子が悪い。昼食も時には、じゃがいもが五個という日もあった。こんな時、腹が減るし夜はよく眠れないし、日々大変であった。五月二十五日「無事長女を出産」との朗報が届いた。初産で心配していたが、「妻も長女も無事」との事でひと安心。神様や御先祖様に手を合わせて喜び、今後の無事を祈った。

七月一日の転勤命令で宝塚工場から姫路工場へ、そして同日鶴野の工場へと移った。やっと家から



通勤が出来る様になった。一応食事や蚤・虱・だに等から解放されて、やれやれと喜んだ。鶉野工場では紫電の飛行機、組立作業の電気係に配属となり、工藤班長さんの指導を受けた。養成工の皆さんと共に勉強し、流れ作業にそって各班それぞれ分担、組立、検査を受けて完成へと汗を流した。今津少尉の話では空戦フラップが、一番優秀な性能を持っているという事であった。空中戦では、素速く敵の後方から機銃掃射が出来る優秀な飛行機で、「一日も早く一機でも多く作って、第一線へ送ることが急務だ」と話され、工員皆、汗を流して頑張った。昭和二十年の正月が終わると状況はぐんと悪くなった。

ラジオだけが国民の闘志を燃やす情報手段の為、あちらでもこちらでも「勝った勝った」と放送しつづけた。しかし、タバコや酒、砂糖、糸まで日常生活物資は少なくなった。切符の割当制が益々厳しくなってきた。村には老人や子供や女ばかりで若い者の姿は、見られなくなった。隣保が出来て奉仕や訓練や婦人会の消防防火訓練、銃後の慰問袋作り、千人針や氏神様に戦勝と従軍兵士の無事祈願にと皆々必死であった。飛行機作りも残業や徹夜と言う日々が続く、増産に増産にと工場全員一丸と成って取り組んだ。日常、新聞、ラジオでは勝った様な戦況を報道し続けている。しかし、五月頃南方から飛行機を引き取りに帰って来た兵隊さんの話では、「状況は悪く、潜水艦や飛行機による空襲でやられて負けている」という生の情報が伝わってきた。心配な事だ。六月五日、神戸や大阪が空襲を受け焼けた。グラマンやB二十九がゴンゴンと音をたてて空襲にかけた。六月二十二日姫路の川

西航空隊の工場も空襲で焼けた。

鷯野飛行場や工場にもとうとう空襲や爆弾が落ちて来た。空襲警報が鳴ると防空壕へ避難した。

幸い工場に落ちた爆弾は小型で屋根を貫いたが不発であったので、被害は少なかった。七月九日和歌山が空襲を受けた。アメリカのグラマンが毎日の様に来て、空襲警報がなると防空壕へ避難する。空を見ているとグラマンがこちらを向くと同時に、ピュンピュンと弾が飛んで来た。幸い撃たれた者はいなかったが仕事にはならない。組立工場も分かれて、私達は八月に段下町の分工場へ疎開することになった。八月六日広島にピカードンと言う大型爆弾が落ち広島がやられた。九日、長崎にも広島と同型の爆弾が落ちた。工場内においても皆、沈痛な気持ちで作業にならない。十五日正午に「重大な発表があるから全員ラジオを聞くように」と指示があった。天皇陛下の終戦のお言葉であった。皆一様にびっくりした。

戦争はこれで終わった。徴用もこれで終わった。

張りつめて頑張ったものは何だったんだろう。疎開工場から家に帰ると二三日寝こんでしまった。終わりに、この戦争でなくなられた多くの方々の御冥福を祈り、二度と戦争をくり返さないよう祈願しながら筆をおきます。

## 二十九、私の戦争

畑 町 嵐 倉 富美子

昭和十九年三月十八日、私にとってはこの日が戦争の始まりだった。五歳、三歳、一歳の三人の子供を残して夫は戦地に旅立った。

生木を裂くとは、この事だろうか。夫は汽車の窓を始めから開けなかった。顔を見せなかった。

溢れる男の涙を、誰にも見せたくなかったのだろう。その心根を思うと、居ても立っても居られない。

私には子供が三人いる。両親もいる。友達もいる。けれど、夫には苛酷な新参兵と言う運命が待っている。「おそい」といっては殴られる、「早い」といっては殴られる。何一つ自分の意志は殺して、ついていくしかない。

あの時程、日本の兵隊制度を恨んだ事はなかった。戦地から時たまよこす葉書には検閲の印が押さされていて、愛する妻子にさえ、本音を訴える事が出来ない。私が心を込めて編んだセーター、靴下、手袋などは全部、上の人が取ってしまって、本人には渡っていない。あの時分の兵隊の上官なんか今どうしているのでしょうか。

戦地はどうあろうとも、子供は元気に育った。空襲警報が鳴り響けば、夜中に着替えをさせて、少々の米、水、着替えを持たせて防空壕に連れ出す。寒い時など四人一緒に死のうと思つた事もあった。隣の人は、子供達の目前で焼夷弾がはね返り、全身火だるまになり、とても人間の顔とは思えない程

で、恐怖に足がすくんでしまった。「この世の地獄とは正にこの事なんだ」と思った。何とか四苦八苦しても明日の生命の保障はありません。

たまりかねて夏の暑い日、三人の子供を連れて両親のいる田舎へ引越しました。自動車はなくて、大八車に最少限の家具と、幼い子に乗せ、野越え、山越え四里（十六km）の道を歩いた。あの辛さは生涯忘れられない。みんな戦争が招いた罪悪です。

そして、ついには最愛の夫、最愛の親を戦死させて、帝国は私達に報いてくれたのです。私は心から戦争を、軍部を憎みます。

でも、子供達はそんな中でも元気に育ち、田舎に帰っても都会育ちと、田舎育ちの差もあるらしく、忽ちリーダーシップを取るようになった。或る時はクラスの英雄になり、或る時はトップをつづけた。今は或る大企業の重役となり、幹部となって、私に何一つ心配をかけないようになった。

あらゆる地獄を見て来たものにとって、人に対する思いやり、困った時には助けてもらった人に対する有難み、最底辺を歩んで来た者に取って、人生の貴重な経験が今、役立っているのではなからうか。

その昔、幼年時代「学校の勉強がつまらない」と言っては山遊びしたり、川遊びしたり、いたずらの限りを尽くしたが、それを許し温かく見守って下さった先生にも大恩があると思う。父親のいない子どもに「今日は宿直だから泊まりに来い」といって同じふとんで寝させて下さった先生、今も感謝

の気持ちがかみ上げてくる。

八十年の生涯を振り返ると、今にも死のうとした日もあり、又うれしくて涙のこぼれるような日もあった。人の本音は一目見て心の奥底が解る。私はこの特技を身につけたように思う。

戦争なんて二度としてはならない。

私の孫子にあの辛さ、悲しさ、苦しみを二度とさせない。

今、孫や子どもに囲まれて、平凡ではあるが、細やかな幸せに満ちた暮らしをしているが、この平和が夫や多くの名もない人々の犠牲の上に築かれていることを想い、大切にしなければならぬと思う。

八十年の生涯、いろいろあったが、あの世で夫に再会した時、「お父さん、あなたの分まで精一杯生きたよ」と、これだけは胸を張って言えると思う。

「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載



空襲後辛うじて生き延びた人々

## 三十、青春の思い出

小印南町 長 浜 明 子

戦争体験記と言えば、終戦後四十七年たった今、青春時代を戦争中で終わった事が、一番心に刻まれており、たまらなくなつかしい思いで筆をとりました。

昭和十二年四月、北条女学校に入学、七月に支那事変が勃発し、授業中はたえず戦地の兵隊さんに送ってあげる千人針が、廻って来て、一針、一針、戦勝を祈りながら、真心こめて縫ったものです。又、慰問文を書き、グループで慰問袋を作って戦地へ送りました。よく神社にお参りしては、武運長久をお祈りしたものです。

「戦勝万歳」と喜ぶ日も度々でしたが、その蔭では戦死されて公報が、あちらこちらにもはいり、村葬が行われるので、部落全員が参列していました。家族の人達の心中を思う時、よく涙し悲しい思いをしたものです。

毎年秋の稲刈時期になると、勤労奉仕に全員揃って、自分の部落の出征兵士の家へ行き、一生懸命お手伝いしました。

昭和十六年三月、卒業して研究科に進んでいましたが、戦局は次第に厳しくなり、遂に十二月八日、大東亜戦争に突入し、戦地に行かれない者は挺身隊に、軍需工場にと、唯働きの時代となりました。

その頃、私は母校である九会小学校の校長先生が「若い先生が出征して、職員がたりないので是非来

てくれ」と、何度も頼みにこられました。仕方なく若輩ながら教壇に立つ決意をしたのです。

十七年から教壇に立った頃、我が家では鶉野に飛行場が出来ると言うので、家は法華口駅の近くへ立ち退き、田もすっかりとられてしまいました。飛行場が完成し、沢山の海軍の兵隊さんがこられ、日曜日には四・五人の人が昼食を食べに下りてこられるのです。お偉い方も二人、二階で泊まっておられました。お米がないのに母は、どこかで手に入れて来て、御馳走をしてあげるのに、生き生きとしていました。

私も、この人達がお国の為に戦場へ行かれるのだと思って、何とも言えない気持ちで、優しく接した事を思い出します。飛行場の近くだから敵機が来たら恐ろしい。と、夜はあかりが外に洩れないように、電燈の傘に黒い布をかぶせ、家の前に防空壕を掘りました。又、通勤する服装も、目立たないように、国防色に染めて着用したものです。学校にも兵隊さんが大勢こられていて、異様な感じでした。戦局は次第に激しくなり、警戒警報が鳴れば子供達は下校、私達は川向こうの松林へ逃げかくれたり、落ちていて勉強など出来ません。解除になればやれやれ。夜、空襲警報が鳴れば防空壕へ飛んで入り、姫路、神戸の爆撃に、真赤になった空を仰ぎながら身震いしたものです。

遂に九会小学校も昭和二十年、爆撃を受け、校舎に大きな穴があき、ガラスは全部壊れ、悲惨な状態でした。幸い子供達は家にいたし、私達は防空壕の中にいた為、命をとりとめる事が出来ました。けれども小使室で、逃げ遅れられた兵隊さんが一人死んでおられた。その時悲惨な姿を見て、皆手を

あわせました。講堂で私達も参列し、葬儀がありました。

八月十五日終戦、二度と戦争等おこってはならないと思います。緊張と恐怖の中に戦争は終わった。国民全部が一体となり、勝抜く日まで、親は「国の為の為に働いてこい」と息子を戦地に送り、妻子を残して戦死された兵隊さん。一家で三人の子を亡くされた親が、半狂乱のようになられた事も聞き、どんなに悲しい思いだったでしょう。又、自ら進んで、「国の為、天皇陛下の御為に」と、特攻隊に出陣された、多くの犠牲者を思うと、胸のつまる思いがします。

私も終戦後は子供達と、春の遠足に、学芸会にと楽しい学校生活が出来、恐怖から安らぎの授業が出来、可愛い子供達といつまでも暮らしたいと思っていました。二十二年結婚を機に、子供達との別れを淋しく思いながら退職致しました。私にとって五年間半の九会校奉職当時が、一番脳裏に刻まれています。

文化の発展によって総てが機械化し、物資は豊富で、何不自由ない平和な現在の暮らしです。私も野菜作り、花作りを楽しみながら、健康である事に感謝し、平和に慣れてとかく忘れがちな、戦死者家族達にも、敬意と感謝の気持ちを忘れてはならないと心にいい聞かせながら暮らしています。今の若い人、子供達には戦争の恐ろしさはわからないでしょう。それだけに私達が、戦争のおこらないよう祈るのみです。

高齢化社会を迎えても、子供達と同じように伸び伸びと、生涯学習教室や、趣味の勉強の出来ませ



事を有難く思います。

最後に、テレビ、新聞ニュースで、経済の不況、交通事故、犯罪の多いのに、不安を覚えます。「何とか人情味あふれる世の中になってほしい」と願うこの頃です。



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
授業風景



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
千人針をする子供

## 三十一、私の軍隊生活

桑原田町 菅野重雄

一、

私が二度目の召集令状を受け取ったのは、五月半ばだった。一回目は旧青野原大門廠舎に、二回目は旧加古川高射砲隊に入隊した。一カ月余りで守口（大阪府、今では市）に仮設陣地を設営した。自分分は通信関係におり、同輩と共に軍務や機器の取り扱いを勉強した。

任務は防空態勢と、その他の秩序の維持に当たった。一・二カ月を限度に目標物（地）に出向いた。生駒山、伊吹山の連山、四国の劔山などで、民防空要員と共に前進基地の警戒に当たった。B二十九のサイパン発進をリーダーで傍信すれば、大阪侵入に約六時間半を要した。伊吹山、または琵琶湖を空襲の道しるべとする偵察機は、必ずと言ってよいほど、昼夜の別なく大阪上空に侵入していた。警報は私達の任務で、早速各位に通報する。リーダー報告があれば警戒警報をおろし、のち空襲警報に切り換える。響くサイレンの音は気味悪く、市民の不安をかきたて神経をいらだたせた。

サイパン陥落迄はさ程でもなかったが、一九四五年六月以後B二十九は、中小都市を無差別爆撃に移行し、多方面同時空襲という最悪事態に見舞われる時は免かれようもなかった。

二、

当時、私達は京橋近くに居たが、ここの軍事工場がやられた。区民は防空壕に避難した。二十機は

かりの波状攻撃、警報があつて、その瞬間、大きな音と地響きがしてあたり一面火の海になった。「バリ、バリ、ゴー」と見る間に火と煙、焼夷弾、爆弾が落下する。悲鳴が聞こえ、泣き叫ぶ声、逃げまどう人、見渡す限り地獄に来ているような錯覚をおぼえた。私もその中に混じっていた。

数分後に爆撃は終わった。工場を中心に近傍は容赦なく全滅し、黒煙は十日以上も燻っていた。防空壕入口辺は逃げ遅れた人の黒こげ死体が転っていた。道路には電線や焼け落ちた家屋がちらばり、防毒面をかぶつての巡邏は容易でなかった。

最初は一日に、二、三回の爆撃が、後には十回を下らなかった。我々の任務も多忙を極めた。毎日間断なく入る情報の整理には、手をやく程忙しかった。間違ひなく情報を伝達するのが、我々の責務である。警報をおろす度ごとに、市民の動揺を気づかわずには居られなかった。程なく私はここから生駒山に、または江洲（滋賀県）の水口に転じて交信した。

水口は近江街道の要衝で小高い山頂に陣地を築いた。時たまF十七の低空飛行を見る程度だった。

「こわされなければよいが」と心に念じて勤務した。しかし、毎日入る情報はよくない。（中部管区）

大阪にB二十九、百二十機が二時間位置きに波状攻撃、大阪、神戸、尼崎の軍需工場や施設を狙い、のち、岡山方面へ抜けるのである。何言う間もなく焼夷弾の雨を降らし、この後五十kg爆弾（昭和二十年四月～六月から先は百五十kgを使った）を投下した。爆撃通過後は、その道筋を火災の黒煙があたりを覆う。路上は警戒要員のみで、人影は余り見当たらない。（昼間）

サイレンが鳴り響く。夜の爆撃行は、花火を打ち上げるように照明弾をまき散らし、町は明るくなる。「ザー」という音とともに雨のように降りかかる焼夷弾、一回に百個から百五十個はざらだった。市民は「これにはまいった」と神経をとがらせ、ただ漠然として呆気に取られていた。昼のように明るく家々は燃えあがり、見るも無惨であった。子女は夜でも防空壕に退避したが、あたりは熱風でどうすることもできなかった。私等は猿飼野から市内警備に移り、警報の合間を縫って舗道の整備、死骸の処理（民防空の要員、隣組の役員、焼家の人たち）にあたった。

### 三、

一帯の焼野が原に散らばる死骸、防空壕内のすしづめ死体（通風が悪く殆どが窒息死）の掘り起こしなど、終生忘れることのできない思い出で、今の世ではウソのような本当の話だった。

真夏のこととて、鼻を突く臭気と、悪ガスの臭いで阿鼻叫喚の様相を呈した。この有様を見て空襲の恐ろしさを身をもってつくづくと感じた。

敵機は軍需施設を目標に来るので日頃「わが町でも爆撃に遭っていないか」と心配であった。

この任務は二カ月余り続いた。八月十五日重大放送があるので野外で整列し、重大放送を聞いた。終戦だ。

### 四、

終戦成って満四十八年、旧軍隊生活の中に在って、一般庶民を思う時、銃後の民衆が受けた災害（

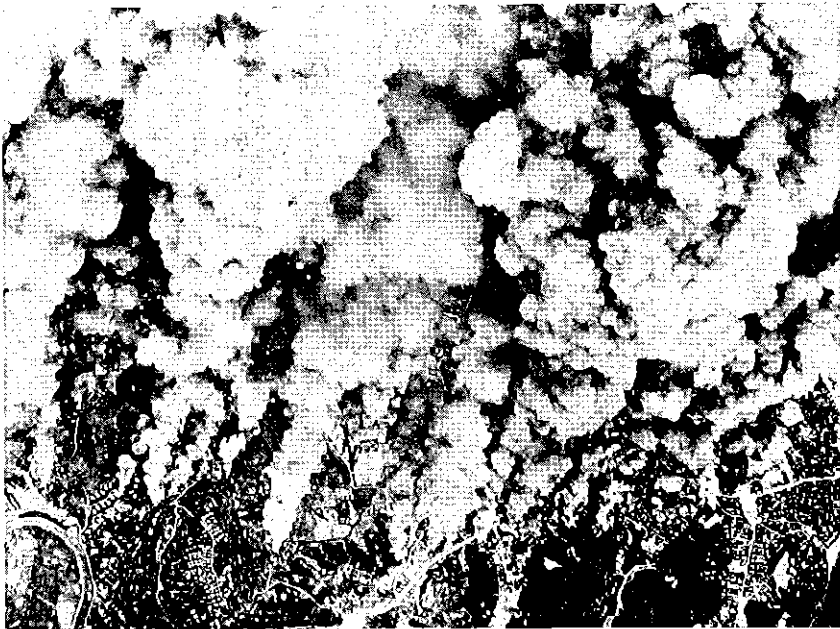


「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
空襲で燃える街

戦災」と苦痛は終生忘れることは出来ない。

昔の人の誇りに「地震、雷、火事、おやじ」というのがある。私はこれに空襲を加えたいと思う。「おやじ」を除けば「予告なしの災害で、今日の「おやじ」は昔のような頑固な人はないだろう。

（語弊があるかも知れないが・・・）



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

## 三十二、白紙（しろがみ）の召集・徴用

北条町栗田 中島 圭一

徴用……敗戦と同時に死語。戦後既に五十年近い今日、この言葉、意味の通じるのは老人層であらう。明治時代中期以来敗戦まで、軍人（補充兵）の召集は赤色紙（あかがみ）の命令状が使われ、日中戦を経て太平洋戦争に突入し、国を挙げての総力戦、遂に「国家総動員法」が制定され、商、農業・平和産業従事者を軍需産業部門へ強制的に集団で転職させたのが、白色紙（しろがみ）命令状で「応援徴士」と美名をつけて動員したのが「徴用」である。

① 加西郡は社町勤労働員署管轄内で（※当時は、警察と同程度の権力があつた。）私は昭和十七年八月中旬に出頭命令を受け、健康診断・個人面接を行い、否応無しに九月二日、武庫郡良元村「川西航空機（株）宝塚製作所」入所と決定。当年十八歳の日本綿スフ工連・織物検査員（助手）で加西出張所勤務でした。

加古川駅集合 — 三の宮 — 阪神宝塚線「仁川」（北条から約三・四時間）下車、仁川駅附近に民家点在、松林の堤防上を歩き武庫川堤防を背に草原、畠跡の広大な一隅、川西航空第一工誠寮に入寮。③ 周囲は松林ばかりで民家は無く淋しい田舎。④ 国防色の作業服、戦闘帽、「徴用工」文字入り赤腕章（現場配属まで毎日出勤時、数カ月間使用）巻脚絆、布製編上げ作業靴を支給。クレペリン反応（性格判断）検査の結果、職種「検査工」に選定、基本動作に仕上げ工程の習得となった。

① 現、西脇公共職業安定所  
② 現 宝塚市・阪神競馬場  
周辺住宅密集地、更に宝塚市役所附近まで

③ 木造モルタル張り二階建、  
約三百名収容

④ 黄土色

この時期、宝塚製作所は、草原の中に事務所、所内青年学校（二階建）数棟の養成工場がポツンと建った程度。朝八時、私達はバイス台が並んだ仕上げ工場に入り、ハンマー打ち、鑢掛けの練習を毎日繰り返す事になる。

「ピーツ、ガチャ、ガチャ、ガツチャーン。」

台上に立つ若い指導員の笛に合わせ右手一杯振り上げ、一封度片手ハンマーを握り、萬力に挟んだ鋼板を左手に握った。たがねを打ち、切断の練習。三十名程の新米工員が一斉に打つが全然揃わない。

「恐ろしそうにせず、思い切つて力強く。」何度注意されても初めての経験で手許が定まらない。あせる程たがねを握った左手親指、人差指、三角部皮膚に当たり痛い。「あかん。あかん。」何回となく連続反覆。やがて左手首の皮が破れ、血がにじみ出る。骨までしびれ痛い。

遂に総指導員が模範動作、タオルで両眼隠をしてハンマー打ち、「カーン。カーン。」と、冴えた音と共に鮮やかに鋼板が切れて行く。「さすが。」と驚いた。次に鑢掛け、十四吋角鑢で笛のリズムに合わせ鉄片をすり落とす。削り屑（粉）が手の平、爪に入り込み真っ黒になる。休憩時、皆寄って「どっちもやが、ピーガツチャンは傷だらけで情けない。」と泣き言しきり。午後は青年学校教育で、一般教養・工作機械の機能知識・図面の読み方・最重点に軍事教練で夕方五時までの一日でした。

寮生活は一室に八名、加西郡内出身者（養成期間中、郡市単位に）で一人畳一枚の居寝所の二段床式。中央部に共用机一、腰掛け八個だけ。食事は別棟食堂へ行列し、金属製面子（食器）一杯の飯、

(外米・麦・高粱混合) 見た感じは赤飯、食べてガツカリ、味無いこと、これでも飛びつく思いでかき込む。然し夜、消燈後、空腹感に耐えられず、同室者交替で二階の窓から闇にまぎれて雨といを伝って降下脱出し、巡回守衛の眼をかすめて電車に乗り、宝塚へ食物買いに走るが、商店も配給制度で空。何とか入手出来るのは闇値の干バナナ(これはよい方)程度で、部屋で皆で分けて食べた。

日曜休みは寮長に外泊許可を貰い、土曜勤務終了と同時に仁川駅へ走り、電車、汽車を乗り継いでの終列車で帰郷、自宅で腹一杯の食事が目的、更に足を伸ばし眠りたい。この願望でした。

日曜夕方、非農家である両親が頼み廻り買い集めた菓子、白米の握り飯を抱え、殺風景な寮へ持ち帰り同室者で分食し、翌日への活力とした。狭い蒲団の中で両親の有難さを痛感し、枕をぬらす事も幾度か。やがて仕事に大分慣れ、ジュラルミン材料での野書き、練習を積重ねたハンマー、鑪を使用しスコヤを当てて定盤上で摺り合わせを行い立方体、直方体等が作れる様になり、左手首のハンマー傷は絶え間無く痛いが何とか仕上工に。

この間約三カ月(?) 私は兵器部(機関銃砲関係)検査工として現場配属となった。

周囲は鉄アングルが林立し、溶接火花が舞い、昼夜兼行で生産工場が建設稼動し、併行して工誠寮も第一、第九と増築、同時に新規徴用工が寮室をうずめて行く。見る見る内に工場地帯に変容した。

「一機でも多く、一刻も早く前線へ」を合言葉に昼夜二交替、更に徹夜作業等前線將兵に負けじと全力を傾注し働いた。十九年四月応召。



之が私達の年代の「青春」として心に残る思い出です。



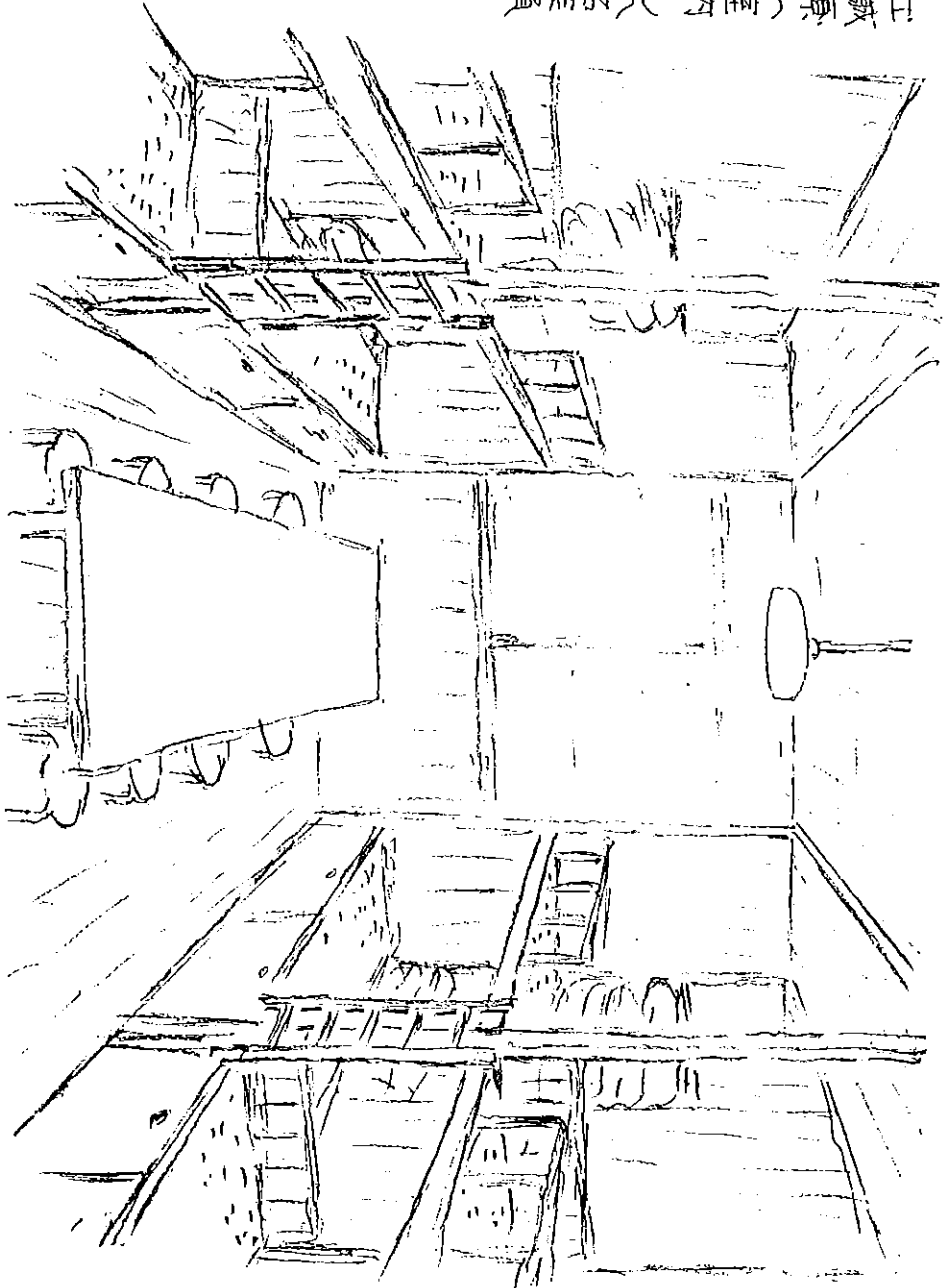
<中島主一氏提供>

## ハンマー打ち

- ① --- 木がね
- ② --- ハンマー
- ③ --- 万力
- ④ --- 徴用工の腕章
- ⑤ --- テッキ (所属, 番号, 姓が記入されている。)



王城寮（室内）八名座置



<中島王一氏提供>

昭和十九年 六月 二十日

佐 田 主 一 殿

除 籍 通 知 ニ 關 ス ル 件

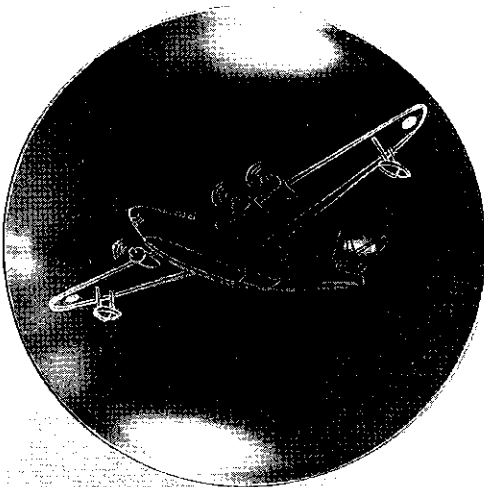
拜啓貴殿後而、  
昭和十九年 四月 十日付ヲ以テ、  
規則ニ基キ當所ニ在籍シ得ザルコトニ相成候  
依而解除令、  
尙被保險者證、  
未返却ノ向ハ至急御返戻相成度申添候

川西航空機株式会社製機製作所

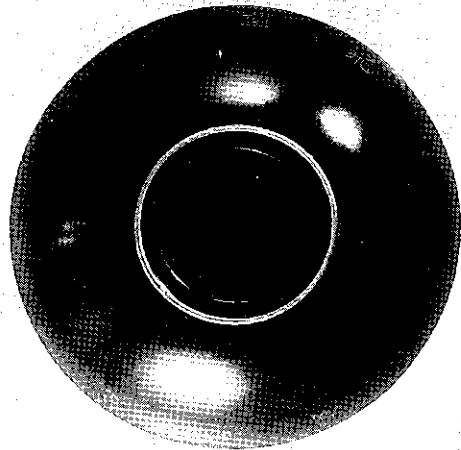
勞務部 勸 勞



<中島主一氏提供>



川西大型飛行艇竣工記念



川航第一〇四二四號

昭和十九年九月三十日

佐 港 主 股

徵用解除令書ノ件傳達

川西航空機株式會社  
鳴尾製作所長 中 村 正



一 徵用解除令書 第 一 號

首領ノ件別紙ニ依リ傳達ス

但シ左記ヲ心得ベシ

(一) 徵用解除令書受領者ハ直ニ該令書ニ添付セル受領証ニ受領年月日時及記名捺印ノ上受領証ノミ切實勤勞態度第一人事係解僱班宛迄急聲留便ヲ以テ返送スベシ

(二) 本人願者等ノ事情ニヨリ受領遺延致ス場合ハ近親者ニ於テ代領受領シ記名代印ノ上受領証ノミ切實返シ替留便ヲ以テ返送セシレ

(終)

(西大 519 金保納)

川西航空機株式會社

<中島主一氏提供> 卍

### 三十三、出征と野戦病院開設

青野原町 浅田 彰

一九三八（昭和十三）年五月二十日に赤紙の切端の一枚を、九会村役場の用務員が私宅に届けた。父は二年前脳内出血に倒れ、天国に、母一人留守していた。これが本当の赤の召集令状かと。村内には未だ誰も赤紙は来ていない。私は結婚して二年余、未だ子供がない。戦死したら相続人がない。政府の偉い人はそんなこと頓着なし。「兵役軍人を片端から狩り出すのか」と頭が混乱している。

五月二十日に神戸の自宅に赤紙が転送された。私は川崎重工業会社に勤務していた。現役当時の友人から手紙が来た。現役除隊の際に「今度皆と顔合わす時は、戦争の時やなあ」と笑って現役を去った。そして、七年振りにいよいよ「戦地にて花を咲かせるかね。」と戦友と交わした言葉であった。世はまさに国防婦人会が肩からたすきを掛けて堂々と、町に、駅頭に「万歳、万歳」の声を高々と鳴り轟かせていた時代で、日毎にその数が増していく時代であった。川崎会社関係者、友人等の送別会等に「元気で帰国するんだ」と言う人あれば、また、「戦死して国の為に働いて来なさい」と言う人、誰一人として戦争経験者はいない。日清、日露戦争出征者なし。神戸市町内会の有志の方、国防婦人会の見送りを受けた。故郷繁昌町、氏神社での出陣式は、多数の人達に綱引駅まで送ってもらい、別れのあいさつをした。「戦場に行つて参ります。国の為一身を捧げ、生きて帰国する覚悟はありません。」と決心しました。

姫路三十九連隊入隊は、五月三十日、身体検査合格決定、三十九連隊隊内居住は出来ず、姫路市花影町の民宿に三名ないし四名の割当分宿でした。朝夕の点呼は井上部隊長軍医少佐以下六十名余りである。その内訳は軍医見習士官五名、中尉、少尉各一名、下士官五名、医科器具搬送のため軽重隊十名余、馬五頭編成である。野戦病院開設軍装調達が十日余り続く。被服倉庫から毎日一品程度の支給がある。シャツ、帽子、ゲートル、背のう、靴などである。

六月十五日に神戸港より出発予定のところ、六月十三日神戸地区は大洪水に見舞われ、六甲山より鉄砲水が急流宇治川を下り神戸港に到る。大水害は岩石を流し、通行は不能となる。このような事態が発生した為、一週間程度の延長となる。民宿に二十日余り世話になる。軍の命令とはいえ、兵士達は気がねし、気苦労である。早々戦地に出発したい気持ちでした。

いよいよ六月二十日に出発、夜行列車で西方面に進行した。何処で停車するかと不安である。広島で停車し、いよいよ宇品港より乗船が決定した。夕方から各部隊が終結し、乗船を開始した。副寿丸（八千トン級）は千名程度を乗船、軍馬も十五頭をクレーンで吊り挙げて船倉に乗せた。馬も可哀想だし、兵隊も四段階で直立出来ず、中腰で各階に二百名程度が居住した。六月の炎天では甲板上は歩けない。甲板が焼きついて中腰で移動出来ない有様である。船内に五分もおれば汗だくだった。甲板が冷たくないと寝れない。風呂はもちろんなし。食事は各自が飯盒を持って取りに行く。夜中までは眠る事が出来ない。暑くて暑くて「海に飛び込もうか」、「死んだ方が良い」と行ってばやく者も沢

① 神戸大風水害といわれ、大被害をうける。

山いた。戦地に行くまで身がもたない。愚痴ばかり言い続けながら、ようやく三日後にやっと中国のターク港に到着した。

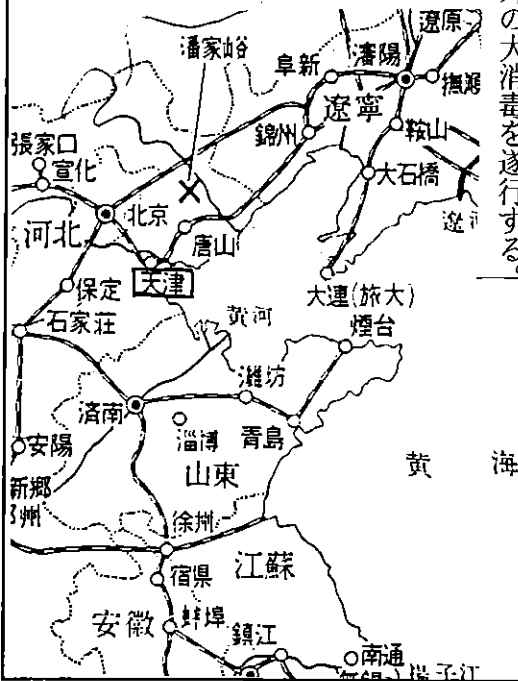
真夜中の暗い内に上陸命令が出た。沖合三キロ程のところに中国の木造船が多数いた。「夜が明けると敵に見られる」と上官はどなる。タラップはなく下船は大変である。船の中央部に縄梯子を吊るしているのでブラブラと動く。八m下の木造船まで軍装しているから、かなり重量がある。縄梯子から落ちれば一コロだ。やっと夜明けまでに下船は完了した。夜が明けて初めての中国の地を四方眺めて驚いた。山一つない。北支地は水平線だ。タークの駅も立派なものである。輸送隊には昼間に折弁当が支給された。中国の子供が沢山取り巻いた。折の飯を取り勝ちにし食べた。「食糧難の北支だなあ」と直感した。内地ではまだ食料事情は悪くない時代であった。上陸第一日は、附近の学校の一部に野宿した。「夜間は充分な警戒を要する」とのこと各自交替で初めての歩哨立した。遠くで銃声が耳にはいる。靴のままゴロ寝であるため、蚊に泣かされ眠れない。網の面をかぶって寝ることにした。なかなか眠れない。いよいよ戦地だと感じた。

明日は天津の地において病院を開設するが、天津にむかう汽車がなかなか回されてこない。夕方にやっと汽車で天津に向かった。汽車の中は一等国人と二等国人に区別されている。乗車駅に止まると二時間も三時間も止まって動かないのが、中国の汽車と、昔から決まっているとのこと。十三時間汽車にゆられて、やっと天津の駅に到着する。郊外の南海中学校に野戦病院を開設する。校舎は立派な



繩梯子で下船する兵士  
「決定版 昭和史」  
(毎日新聞社刊)より転載

### 中華人民共和国



コンクリート建物で講堂を兵舎とする。部屋が沢山あり立派で、病院としては最適の建物である。地下室の一部は水がいっぱい入り、使用不可能である。兵隊は皆喜んでいた。この風呂で全員が「人間としての勤務が出来る」と大喜びだ。兵舎にアンペラを敷いて、やっと一週間振りに靴を脱いで寝られることは至上の喜びだ。明日は良い風呂にはいれる。故国の夢と風呂の夢にと、アンペラの上に横になる。夜が明けた。いよいよ病室の開設部隊長の命令で診断室、手術室、病室と各部屋を決定する。患者の搬入、軍医の診断、第一号の病床日誌を発行する。次に負傷者の治療である。大腿部貫通銃創の処置をする。軍医の任務は重大である。マラリヤ患者が多数出る。長期療養を要する患者の場合は、軍医の判断で内地還送を命ずる。その場合でも兵隊は「第一線に復帰したい」と懇願する。また、天津市長よりの要請で、市内のコレラ発生地に緊急に防疫班を出動させ、家屋内外の大消毒を遂行する。家の中は薬水でベタベタになり、気の毒であった。



## 三十四、私の八月十五日前後

別府東町 西村三郎

昭和二十年八月十五日、当日は日本人なら誰でもどこかで涙を流し、決して忘れる事は出来ない日である筈だ。

私は当時、東京の東部憲兵隊司令部政経班に憲兵として勤務していた。玉音放送はすんなり行われたわけでなく、有為の将校の自決騒ぎ、その他種々の事件があった。我が郷土、滝野町出身の田中静彦陸軍大将、また当時東部司令官陸軍大臣阿南大将等々の自決。また、宇都宮航空通信隊生が宮城に押入り、「我々が警護する」と意気込み、憲兵隊に説得され引き上げた。とか、また畑少佐の率いる一団は本土決戦を決意、「国体を守る」と宮内庁に保管されている玉音盤の奮取を計画して宮城に乱入した。が、各方面の反対にあつて、畑少佐は自決。その他種々の事件があつて後、やっと玉音放送に至つた次第だ。

明けて十六日には右翼と思われる約四十名の男性が、宮城前に一列に正座して、日本刀で首を切り、また切腹した。中にはうら若い女性も混じつていて、全くみられたものではない惨状であつた。敗戦とは本当に惨めなものだ。

九月九日、横浜港に停泊中のミズリー号上で行われた降伏調印式に重光外務大臣、参謀次長川辺中将、その随員として小田徳四郎中尉以下七名が決死の護衛を行った。当時は米兵の海兵隊が上陸して

時計を取られたり、本当に物騒な世の中であった。

思い起こせば三月十日の空襲警報三十分後、十二時頃B二十九が一千メートル上空から焼夷弾の雨、見る見る麹町、神田方面が一面の火の海、当時自分達は近衛隊と協力して宮城・靖国神社の護衛にあっていた。靖国神社の屋根も燃え上がったけれど、必死の作業で焼失をまぬがれ、参謀総長から感謝状をもらった。

この空襲で小石川の自宅は全焼した。空襲の翌朝、自転車で我が家に向かったが、途中道端で子供を抱いたまま死んでいる母親、橋が焼け落ちドブ川の中で折重なって死んでいる者、焼けただれて助けを求める者：目も当てられぬ惨状の中を、我が家の焼けあとに立つ。家内は上京して三カ月で地理にもうとく、「この大火の中ではとものがれなかったであろう」と半分あきらめつつも、「万が一にも」とあちらこちら探した。すると、近所の娘さんと高射砲陣地に避難して助かっていた。着のみ着のまま衣服が火の粉で燃えるのを水をかぶって消しながらも、生き延び、再び出合うことが出来た。当世テレビで見る小金治の涙の対面に感動したものです。家内は焼失をまぬがれた官舎でしばらく過ごし、五月に帰郷。私は残務整理で九月三日に復員し、幸いにも親・兄一家の家族に加えてもらって、十五人の大家族となった時もあったが、食料難と戦いつつも有難い日々であった。公職追放となり、丸裸で帰った時のみじめさは、終生忘れる事は出来ない。でも、自決した同僚、刑死した先輩等に思いを駆せる時、分家ももらえ、四男一女に恵まれて細々ながら親子力を合わせてすごせた日々



「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載  
空襲後辛うじて生き延びた人々は  
住み家を求めて移住した



空襲で焼け出され帰る家のない子供が 電車内で眠っている  
「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より転載

をふり返ると感謝あるのみ。

現在は脳梗塞となり二年余りになるが、親切な友達、親戚、知己等に励まされ、また、温かい福祉行政に感謝しつつ、家族達の温かい看護に看とられつつの日々を送るこの頃です。

三十五 私の八月十五日（撫順高女校長時代）以後

山下東町 名 尾 嘉 作

昭和二十年八月十五日陛下の終戦を告げられる悲痛な玉音をラジオを通して耳にした時、肩の力が一瞬にして抜け、張りつめた気力も一気に吹っこんだ。一時は失望落胆、茫然自失、暗い気持ちに包まれたが、一方で「これで地上に平和が蘇ったのだ」という安心感に救われてほっとした。しかし、それも一時の糠喜び、軍隊と警察を失った撫順は一変して混乱の巷と化した。学校は暴徒に襲われ、窓硝子は破壊され、めぼしい機器は奪い去られた。

近き将来学校は再開されるものと、当なき当を当として、せめてグランドピアノだけでもと、通りがかりの若い満鉄社員に助力を求め、門前の路上まで運び出したが、折りあしくこれも通りがかりのソ連軍將校のために奪い去られた。

ソ連進駐軍が漁色あさりをほしのままにし、戦略残虐の限りを尽して引き揚げた後、毛沢東の卒いる八路軍が蒋介石の国民軍を追って入撫した。<sup>①</sup>これもソ連軍に劣らぬ横暴振りを遺憾なく発揮した。わが命の綱と頼む米を始めとし、これとめぼしをつけた財界人を満人・日本人の差別なく拉致して、拷問にかけ金品を巻きあげた。不幸にして僕も商業会議所の一室に監禁される身となった。夕闇迫る頃となれば近くの空家になった歯科医の診察室に連行し、着衣を剥がし全裸とし、臀部を力の限り棍棒で痛打し、気を失わんばかりになった頃を見計らって「教育勅語を奉載し、帝国主義の教育に荷担

① 撫順に入ること。

した科により、罰金三十万円を課す。」と宣う。大義名分は誠に立派だが、裏を返せば軍用資金調達  
のゆすりかたりに過ぎない。満州名物馬賊のやり方と何ら変りはない。同室に拉致された劇場主の満  
人は、教育勸語は勿論のこと帝国主義が何であるか寸毫も知らないからである。

三週間に亘る過酷な拷問に、悲憤やり方なく毛沢東の非人道的残虐行為に「これで僕の生涯も終り  
か」と思うと無念骨髓に徹した。自虐的卑屈な思想にとらわれ、大和魂を喪失した現代日本人は、毛  
沢東を不出世の英雄と称えるが、僕をして言わしむれば中国独特の土壌が産んだ一介の風運児にすぎ  
ない。

僕の恐怖心をそそるためか古新聞の一片が監禁室の一隅に落ちていた。見るともなしに見ると、上  
海の近郊に住むある豪農が鼻を削られ耳を切り落とされた揚げ句の果てに、全財産を没収された悲惨  
な記事が載っていた。

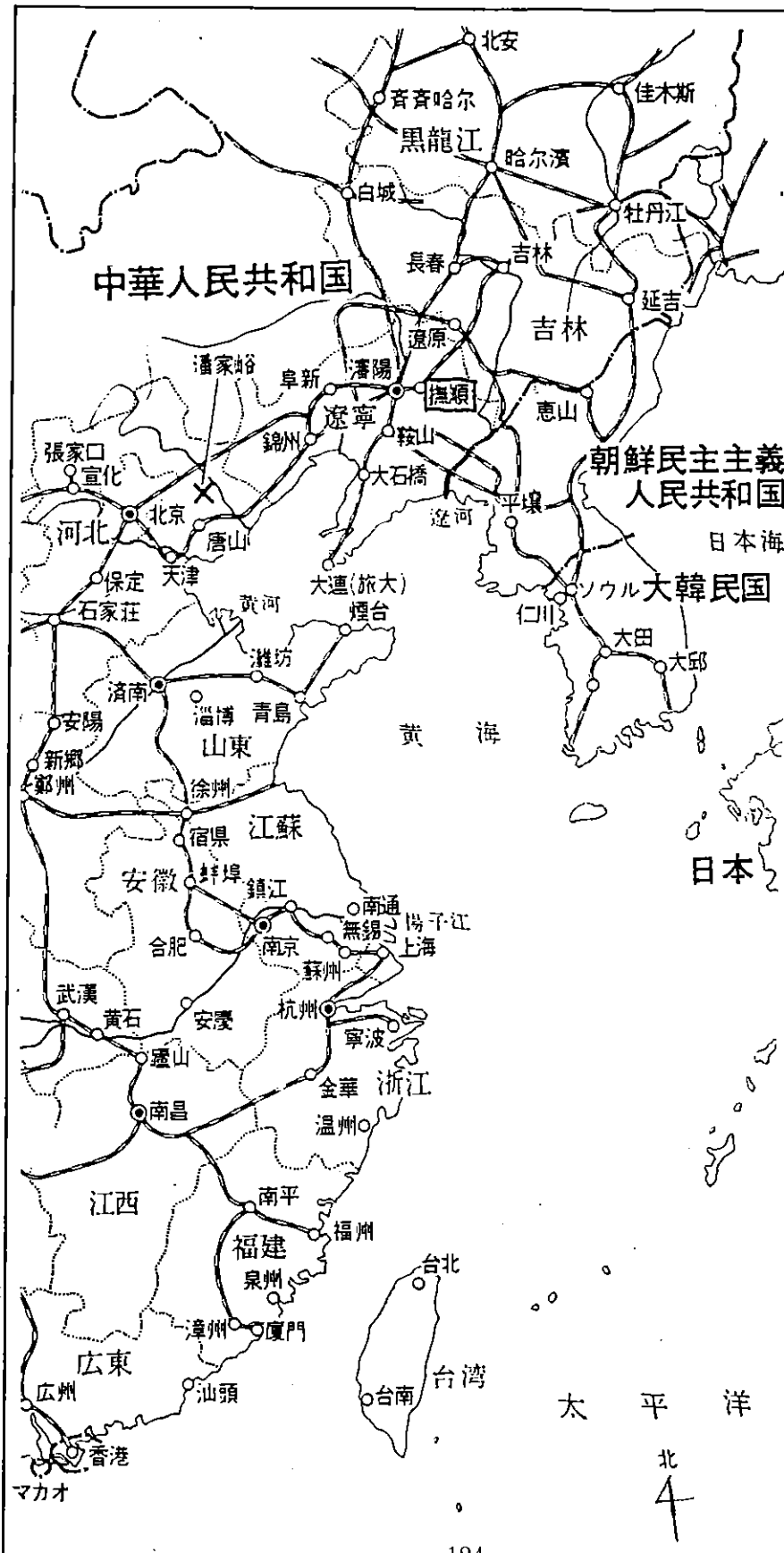
遂に僕にとって「臨終の日か」と思われる最後の日がやってきた。ローソクの炎で腋の下を焙ると  
いうこれまでとは違った拷問の手口である。じりじりと皮が焼け血が滲む。刻一刻死期が迫ってくる。  
しかし苦しいとも熱いとも思わない。「心頭滅却すれば火も亦涼しい」快川禅師の喝破壊がここでも  
見事に実証された。

絶対絶命の淵に追いこめられた瞬間、突如として解放の朗報に接したのである。

これは撫高女九回生波田君の救命嘆願に依るものであることを後で知った。同君がたまたま彼らの

治療に当たっていたことが奇縁となり僕の命拾いとなったわけである。

(著書「白寿を記念して」より転載)



## 三六、学童集団疎開

北条町横尾 水田益弘

満州事変から上海事変、さらに日華事変へと、戦禍はエスカレートして、とうとう昭和十六年十二月八日、英米に対して開戦し、大東亜戦争に突入した。戦火は我が国の本土にまで及ぶようになり、学校でも正常な状態で教育が出来なくなってきた。昭和十九年九月「疎開学童に関する措置要領」という法律が出され、学童の強制疎開へと発展して行った。

昭和二十年三月十三日、大阪は大空襲をうけた。これにより我が校でも学童疎開が決定した。行き先は福井県である。私達は現地へ疎開準備と調査の為、急遽福井県へ出発した。

そして、四月十九日、福井県下に学童集団疎開を実施したのである。両親から片時も離れることのない様な小さな子供までも引離して、悲痛な気持ちで涙の別れをして、あわただしい出発であった。輸送計画も充分でないままの出発であり混雑を極めた。しかし目的地の新平野駅に午後三時頃無事到着した。駅前は歓迎の大きなアーチがあり、総出の出迎えてくれた。子供達は遠足にでも来た様で大変喜んでくれた。私も「これなら心配はない、戦争に勝つまでは頑張ろう」と決意をあらたにした。三百余りの子供はそれぞれ六つの寺へ分かれて行った。私は明通寺寮の責任者として、職員四名と共に約五十名の子供を引率して、四kmの道を元気に、勇んで明通寺寮へ参りました。又ここでも区長さんをはじめ大勢の村人の歓迎せめにあつた。それからは疎開先小阪国民学校として、地域の国民学校の

世話にならないで、寮長の福井清次教頭を中心として頑張ることになった。

龍泉寺寮 主任 笠岡訓導（宮川村）

満月寺寮 主任 中島訓導（野木村）

万徳寺寮 主任 大橋訓導（遠敷村）

神通寺寮 主任 鶴田訓導（遠敷村）

明通寺寮 主任 水田訓導（松永村）

盛運寺寮 主任 相田訓導（宮川村）

以上六つの寮と、その生活を記したが、横の連絡をとりながら「欲しがりません、勝つまでは」と我慢の毎日をすごしたのでした。

明通寺寮は平安時代の初期に建設され、丁度法華山一乗寺の様に、国宝の建物で、仏像も国宝のものが数多くある立派なお寺でした。そこでこの寺へは女の子のみを入れ立派な、大切なものにキズをつけない様に配慮した。

子供達は到着後一週間は、元気にしていたが、だんだん淋しくなり、しくしくと泣き出す者が、伝染病の如く続出し、手のつけられない日が何日かつづいた。歌をうたいながら、皆で連れだって、散歩に出たりしているうちになれて来た。然し食糧不足には困りはてた。私は食糧を集める為、農協や、地方事務所へ日参して、お願いにまわった。疎開の先生は丸公価格だからなあーといわれるのに一番



困った。朝食は毎日お粥ですが、それも朝早くから炊き、ほんとうに糊状になったものに、野草をまぜて食べさせたのです。或る晩のことですが、女の先生が炊事場の方でコトコトという音がするので、目をさまされた。そっと行って見られると、四年生の子供の一人が、流しに捨ててある出しじゃこを拾って食べているのです。その姿を見た時は「お腹がひもじいのだなと思ひ、涙せずにはいられなかった」。とのことでした。然し皆よく頑張りました。「欲しがりません、勝つまでは」と。小さなたいけない子供達に、おやつなど勿論ありません。時々米のかわりに配給になる大豆を煎ってあたえる程度です。辛抱させるより方法がなかったのです。本当に我慢の毎日を過ごしたのでした。

だんだん暑くなってきました。夏の間は冬ごもりの準備をしなければなりません。冬中に使う薪木の拾集、炭焼きの手伝い、いも類をはじめ食糧の貯蔵等大変でした。その中、本土各地の大空襲の話、八月六日広島、八月九日長崎へ新型爆弾が投下された。これにつづきソ連の参戦のニュース。福井県庁より、「もう皆さんをお預りすることは出来ない。もっと安全な処へ、再疎開をして下さい」と通達をうけた時は、「どうしようか」と心配で夜もねむれない毎日でした。

八月十五日、終戦の詔勅が下され、戦争は終わった。私は寮を出ていて、夕方帰ると「先生、戦争負けてしまった」と、皆の者が泣きながら私に抱きついて来ました。「皆よく頑張ったのに残念だね。しかし、しかたがないことだ、そんなに泣くな、これでお父さん、お母さんの処へ帰れるのだ、それまで元気で頑張ろう」と力付けた。

本校からの連絡を待ったが、「交通事情が悪いので、今しばらく待つ様に」とのこと、子供達も戦争に負けた悲しみは忘れて一日も早く親元へ帰れる日を待ちわびる毎日でした。こうしてやっとのこと、十月二日大阪へ帰ることが出来た。

☆ 疎開児童の同窓会の開催

昭和四十七年九月二十七日、本校（小阪小学校）において、二十七年ぶりに、当時集団疎開での引率の先生達と児童（現在は立派な社会人として活躍されている方々）にお集まり頂き、苦しかった時代の思い出を語っていただいた。（Tは当時の先生、Cは児童）

T 福井の疎開地といえば食料は非常に貧困であった、節約に節約をして命をつないできた、村の人々は親切だった。しかし情に甘えておれる時代ではなく、雑魚とりに行ったり、荒地を耕して、畑にしたり、毎日精一杯にくらした。みんな苦勞をして、戦争の残酷さをいやという程味わわされた、苦痛が楽しさ変わって、当時の様子が思い出される。

T 終戦の時は、教師も、子供もみんながっかりした。同時に戦争が終わった以上、「子供達を親の手元へ一刻も早く帰さなくてはならない」と思った。しかしなかなか思う様にはならず、やっと十月二日に貨車で帰阪した。

C 最初は遠足にでも行くような気持ちで来たが、日がたつにつれて淋しくなり、ふとんの中へ頭を突っ込んで、涙を見せないようにして泣いた。

C 当時手紙は先生の検閲を受けなくてはならず、目を盗んで、「親に一日も早く迎えに来て欲しい」と書いて、ポストに入れに行った。

C 先生と米を引き取りに行ったり、食料品を取りに遠方まで出かけ、晩おそく歩いて帰ったことがある。

C わるさもよくやった、川でどんぐろという魚を取って来て、寺の池に放し、住職に吐られた。

T 十月で終わったのでよかったが、越冬していたらどうなったかわからない、思っただけでもぞっとする。

T 食料の入手ルートをたえず気をつけなければならず、村の人をおこらせない様に気配りをしなければならず、越冬の為の炭焼きも大変だった。

C おやつも、いなごの焼いたもの、いものつるを蒸したもの、今から思えば「あんなものがよく食べられたな」と思う様な物ばかりであったが、とても楽しかった。

C 空腹をまぎらわすために、柿を盗んだことがある。

T 一番苦勞であり、気を悩ましたことは、大阪との連絡であった。空襲にあいながら、大きな荷物を背負い、帰路につく時は特に苦しかった。

T また切符の入手も苦勞の一つであった。

T 親から預かったり、送ってきた荷物を子供に渡す時はとてもつらく、他の子供に気をつかった。

C 淋しくて辛抱出来ず、線路づたいに、夜逃げ出したが先生に連れもどされ、目的を達することが出来なかった。

C 二十kmもある道を、わかめ取りに何回も行った。

C しらみやぶとで随分悩まされ、ぶとで足がはれあがり、うんで困った。今もその跡が残っている。

T ぶとの治療で毎日病院に連れて行った。三時間に一本しかない汽車で通うわけで、その上、途中でよくB二十九爆撃機に出合ったので、非常に気をつかった。

T しらみとりを、日だまりで一斉に行うのがとても嫌だった。

以上の様な数々の思い出が語られ、時間の過ぎるのもわからない程でした。なつかしさと思い出が、先生を中心につきることなく話され、会を閉じることが出来ない状態だった。

☆ 当時疎開地の児童から家庭への便り

・ 昭和二十年四月二十日付 明通寺内

お父さん、お母さん、十九日の午後三時頃、元気で新平野へ着きました。ごあんしん下さい。けれどもつるがで乗りかえる時、荷物が重くてたおれるかと思いました。けれどもつるがから新平野へ行く汽車がすいていたから、らくにえきへ着きました。すると、国民学校のせいとが荷物をもってくれたので、早く寺へ着きました。あまりうれしくて、家の中をとびまわってあ

そびました。ごあんしん下さい。けれどもはぶらしがなくなりました。そのほかのことは、うれしいことばかりです。ごあんしんください。お父さん、はやくなおって、私のかえるのをまわって下さい。さようなら。

・ 昭和二十年五月十八日付 明通寺内

お父さん、お母さんお元気ですか。私は元気ですが、このごろ手紙がこないのですね。になりました。お父さんの病気もよくなったでせうか。私は福井県へ来てから、もう二十九日になります。ほんとうに月日のたつのは、ゆめのようです。きのうも松永さんと城野さんのおじさんが来られて、私達にいいおくわしを持って来て下さいました。私はほんとうに集団疎開をしてよかったと思っています。お父さん早く直して下さい。又お手紙下さい。さようなら。

・ 昭和二十年六月八日付 明通寺内

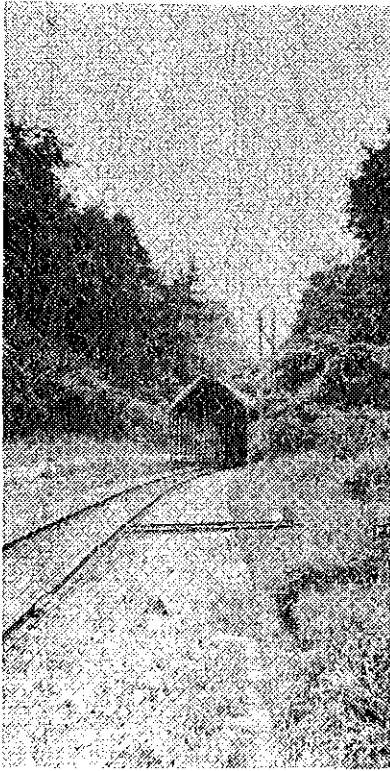
お父さん、お母さんお手紙ありがとうございます。この間寮へかえられた水田先生が「この頃は大阪は一日おきに大きくふしふがあるそうですね」、又「裏松の伯父さんの家がやけたさうですね」、けれども、けがをしなかったのですね。よかったです。私はほんとうに幸福です。「このごろ沖なわの戦いもだんだんはげしくなってきましたね」、お父さん、お母さんも勝つまでがんばって下さい。さようなら。

・ 昭和二十年八月二十五日付 明通寺内

お父さん、お母さんお元気ですか、私も元気で毎日をくらししていますので安心して下さい。きのうの夕方岸上さんのおぢさんがおこしになって、かんぱんをいただきました。久しぶりでほんとうにおいしくいただきました。おとついまであつかったのに、もう秋が来たようです。雨が降って急に寒くなりました。そしてもうすぐかへれるさうですね、たのしみにまっています。お父さん、お母さんかへる日をたのしみにまっています。ではお元気でさようなら。

(註) お気の毒に、この子のお父さんは子供の疎開中に亡くなられました。尚手紙はすべて原文のままです。

当時の子供たちは家庭との文通を唯一の楽しみとし、心のよりどころでもあったのだらうと思われる。疎開先から毎日のように書き綴って両親宛てに送った、当時の一児童の貴重な手紙を資料として提供してくれたものです。

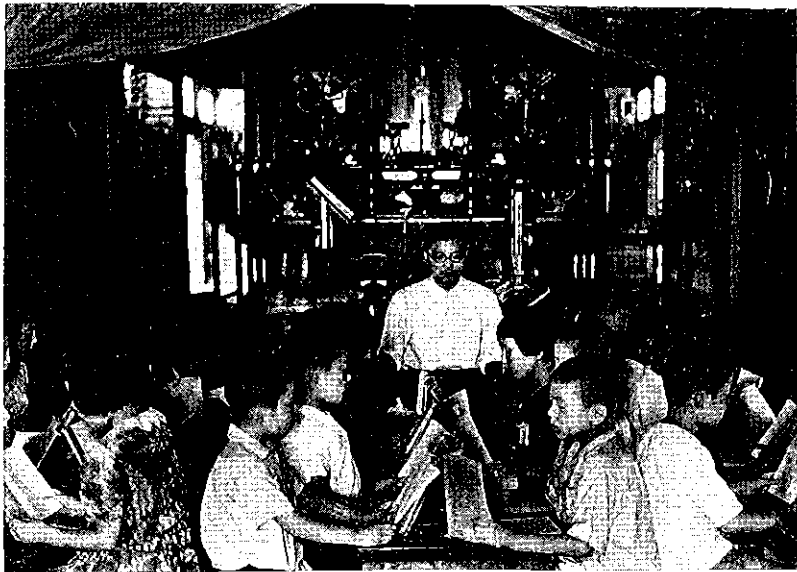


(著書 「蔭涼」より転載)



「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

集団疎開出発風景



寺での授業風景

「決定版 昭和史」(毎日新聞社刊)より転載

## 三十七 戦争と食生活

東劍坂町 藤川 伊佐雄

「光陰矢の如し」とか、何時の間にか高齢者の仲間入りをさせて戴く年となり、年月の流れの早いに驚かされる今日この頃です。振り返って四十年前、戦争を勝ち抜くため、国民一致団結、国民皆兵の世の中であつた。

私は十六年に応召をうけ四十六部隊に入隊し、毎日きびしい軍隊生活に入つて居た。突如、十二月十六日に真珠湾攻撃に日本海軍は奇襲して大勝した。

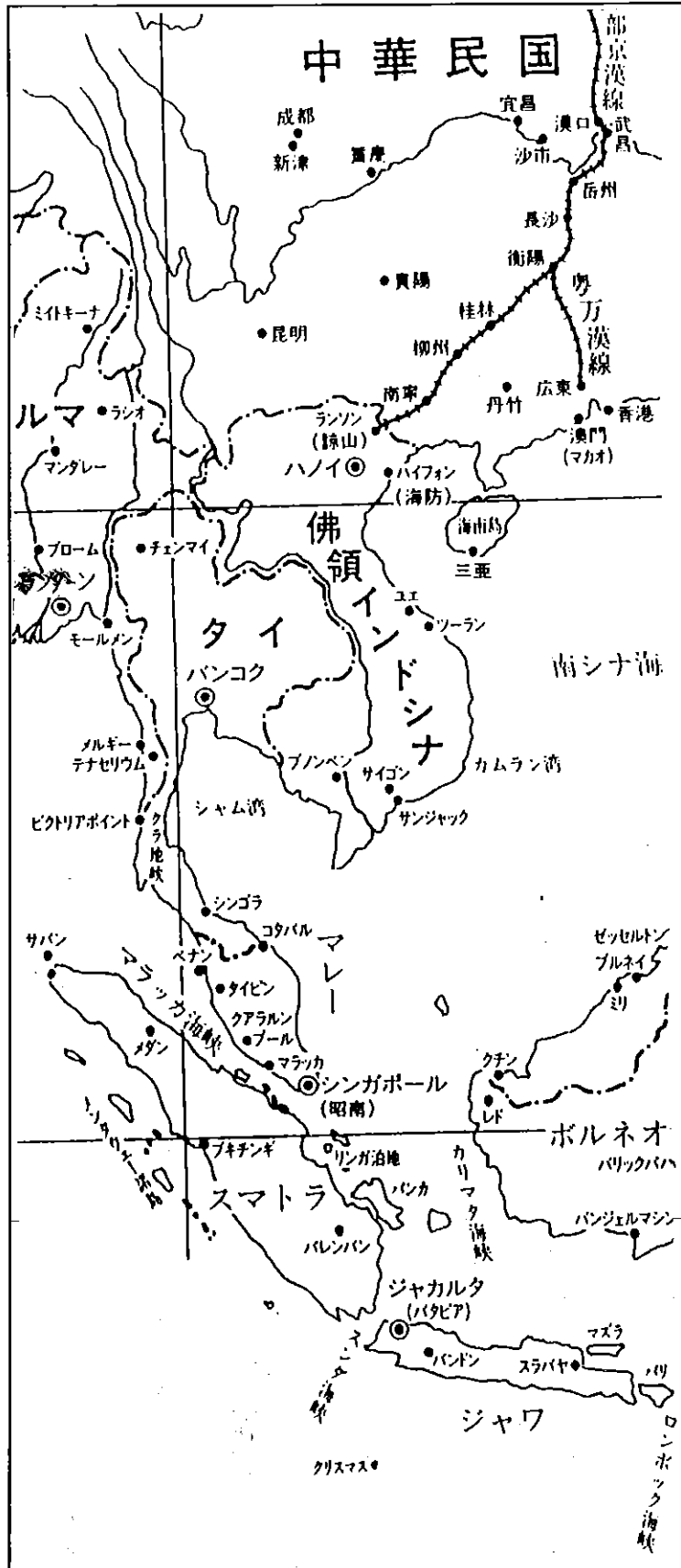
国交断絶、当時日支事変も長期戦の真直中であつた。我が部隊も出発の命が降り、宇品を後にマレ―半島に上陸した。毎日の夜行軍で、泰緬国境から転戦、転戦して戦いをする事、二カ年余り、戦いで生死を共にした幾多の将兵が、病に侵され敵弾に倒れた、友の面影を忍ぶ時、只々の哀愁の思いで痛惜に堪えない。

私は不幸中の幸せだつたのか、九死に一生を得て、二十一年六月に帰国。解除され突然の帰宅で、両親はじめ家族一同嬉しかったのか、懐かしかったのか、涙を流して迎えてくれた。

その夜は色々と御馳走になり、戦争の話に花咲き、夜の更けるのも忘れて話あつた。

色々と留守中の話が後から後へと繰り返し出され、銃後の国民の苦しい生活が分かつた。農家も米は全部供出、そして配給制度。その配給も代用食品のこうりやん、とうもろこし、大豆、馬鈴薯、そ





れよりも米三分麦七分と言う様に全く粗末なごはん。此れも腹一杯食べられない。  
 「食べられる物はなんでも食べる」との事、これも勝ち抜くために堪え忍んだ。銃後の国民は苦しい生活だったのだらう。

あれから四十五年余り、現在の生活は誠に結構な事と思う。この様な苦しい思い出の生活は、遠い昔の夢として二度と再びない様に祈ってやまない。

# 一・年表

西 曆	世界 (日本)	加 西 市
一九三二 (昭和六)	満州事変	十二月 六日 満州派遣軍戦勝祈願及入隊官兵神社報告祭
一九三二 (昭和七)	第一次上海事変 (一月) 満州国、建国宣言	十二月二十一日 姫路師団の一部満州出勤に付武運長久 (小学高等科参列)
一九三三 (昭和八)	日本軍、通州を占領 毎年農繁期には実施	六月 十八日、 義務教育 一週間農繁休暇
一九三六 (昭和十一)	二・二六事件 日本政府「北支処理要綱」指示、後決定 青年訓練所解散 青年学校開校	六月二十五日、 十日間託児所へ教員が援助の為出張
一九三七 (昭和十二)	日中戦争、日本海軍、全中国沿岸封鎖宣言 日本軍 南京を占領	九月二十日 防空演習実施 (十九日正午、二十日午前八時) (法華山) 九月二十六日、二十七日 青年団一泊講習会 六月 四日 旧制姫路高校学生 百名 演習途次 講堂宿泊 (九会小)

西 曆

世界 (日本)

加 西 市

一九三八 (昭和十三)

一九三九 (昭和十四)

一九四〇 (昭和十五)

南京事件 (十二月)

第二次上海事変 (八月)

蘆溝橋事件 (七月)  
 (一カ月に何回かその都度実施された)  
 (7月・8月)

国家総動員法公布 日本軍、徐州占領

神戸大水害 日本軍 武漢、三鎮占領

「支那事変処理根本方針」決定

ノモンハン事件

第二次世界大戦

日・独・伊三国軍事同盟調印

皇紀二千六百年奉祝式

七月二十九日 ○○氏応召 歓送

八月 四日 応召者 祈願祭参列歓送

十一月 九日 北満、北支、上海出兵将兵慰問文、  
 絵 画發送

十一月 十七日 故○○氏、送骨出迎えの為姫路ま  
 で職員、児童六年以上綱引まで

十一月二十四日 防空演習 警戒警報  
 午後七時三十分発令

十二月 十五日 南京陥落奉祝式挙行全村

三月 十日 忠魂碑入魂式

八月 六日 勤勞奉仕隊 神戸水害救援

十月二十七日 漢口占領 神社参拜

五月 五日 爱国少年団結成式

義務軍拓殖訓練講習 (高等科2年)

十一月 八日 農繁期中 出征兵遺家族

西 曆

世界 (日本)

加 西 市

一九四二 (昭和十六)

北部仏印進駐

日ソ中立条約調印

国防治安法制定

国民学校に改称

戦時学徒動員

南部仏印進駐

太平洋戦争

日本軍、ハワイ真珠湾攻撃

一九四二 (昭和十七)

シンガポール・マニラ占領

日・独・伊・軍事協定調印

第二次戦勝祝賀会

米軍機・東京など初空襲

日・米珊瑚海・ミッドウエー

海戦

ソロモン一次・二次

一九四三 (昭和十八)

姫路海軍航空隊飛行場建設

二十五歳未満、未婚女性「女子挺身隊」

婦人標準服決まる

山本連合艦隊司会長官フイン方面で戦死

食糧増産空地開墾指示

二月 十八日

祝賀会 旗行列

二月二十五日

防空並びに避難訓練

三月 十二日

全校神社参拜  
旗行列 部落巡回総行進  
供出米協議会

青野が原戦軍隊分列式

青野が原陸軍病院慰問

三校合併飯盛野青年学校開設

九月 十六日

九会小学校移転開始  
(二部授業)

鶴野飛行場勤労奉仕作業

西 曆	世界 (日本)	加 西 市
<p>一九四四 (昭和十九)</p>	<p>イタリア、連合国に無条件降伏  「大東亜政略指導大綱」採決  サイパン島米軍占領 (全員戦死)  レイテ島沖海戦 日本連合艦隊の主力失う  海軍、神風特攻隊第一陣出撃  古賀連合艦隊司令長官ら退避途中消息を断つ  疎開学童に関する措置要領  中国基地の米B二十九爆撃機 北九州を攻撃  米機動隊、沖縄を空襲 台湾沖航空戦  雲南省拉孟・騰越の守備隊は中国軍の包囲攻撃をう  け玉砕  米B二十九約七十機マリアナ基地から東京空襲  名古屋空襲  二月米軍 硫黄島上陸  四月～六月 沖縄戦 (四月一日上陸)</p>	<p>川西航空機株式会社鷯野工場開設  運動場開墾着手  食糧増産手伝いの為四日間授業廃止  満蒙開拓義勇軍壮行式  学徒勤労動員に出動</p>
<p>一九四五 (昭和二十)</p>		<p>学校報国隊出動  空襲警報発令  (四月七日・五月五日・五月十日・五月十一日)</p>

西 曆

世界 (日本)

加 西 市

神戸・明石・姫路空襲を受ける

一月十九日 明石

三月十七日 神戸

三月十四日 大阪

六月 五日 神戸・姫路

広島・長崎原爆投下

太平洋戦争日本敗戦

ポツダム宣言受諾

国際連合発足

財閥解体・新選挙法成立

一九四六 (昭和二十一年)

日本国憲法公布・農地改革・民主主義

一九四七 (昭和二十二年)

学制改革・国民学校廃止  
(小学校・中学校・高等学校)

村義勇隊結団式

七月 三十日

米軍の飛行機の空襲をうけ大被害。都会者の疎開による転入で机、椅子は高学年はなし

兵舎等を改築し、中学校発足

## あとがき

この計画が持ち上がったのが八月、九月からこの作業に取りかかり、十月から十二月までに原稿募集をしました。はじめての試みでもあり、加西市高齢者大学（かしの木、サルビア、しらかし）の皆様を中心に御協力をお願いしました。出版出来るだけの原稿が集まるかどうか気惧しましたが、学園生の方々の御理解と大学担当者のお力添えにより出版の運びとなりました。

当時の状況をよく理解して頂くために、写真等資料を出来るだけ多く掲載したいと、募集時に依頼し、私も図書館、市史編集室に足を運びましたが、何分「我が身を守るだけが精一杯」でその上「軍の検閲」の厳しい時代のこととて、充分な資料が得られぬままに今日に至りました。

他にもいろいろ不備な点が多いと思いますが、空襲の悲惨な状況や、戦時下での生活を一人でも多くの方が御理解下さり、平和の尊さについて考え、この平和が永遠に続く努力を地道に実践して下さいようお願いいたします。

尚、今後も寄稿者が多くあるようでしたら、第二号を発行したいと考えております。

最後になりましたが、「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）より、写真を転載することについて、快く御承諾下さいました毎日新聞社の方々に厚く御礼申し上げます。

おわび　　ほとんどの原稿は「歴史的かなづかい」で書かれておりましたが、「現代かなづかい」に改めさせていただきます。ありがとうございました。

表紙写真提供

「ニューひょうご」

一九九三年二月号

兵庫県広報課発行

第二次世界大戦体験記

轍(わだち)

— 永遠の平和を求めて —

平成五年三月二十五日

編集 加西市教育委員会生涯学習課

発行 加西市教育委員会

加西市北条町横尾五一四

電話 (〇七九〇) 四二一一一〇

FAX (〇七九〇) 四三一八〇三

印刷 株式会社 フジワラ

加西市殿原町一一五六―二

電話 (〇七九〇) 四四一〇五七四



